

金の星

Z32-B88



第六卷 十二月二十日 第二十號

(行發日一回一月毎)可圖實集數種三第日二十月六年一十正天

行發日一月二十年三十正天 本納刷印日九月一十年三十

金の星 第六卷第十一號 昭和三十三年十一月九日 印刷 大正十三年十一月九日 印刷 定価金四十銭 送料一錢五厘

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



後庭の一隅にもスケッチの
好題材が有ります

王様クレイヨン
キングクレイヨン
王様水彩繪具

全園到る處の文具
店にあり品切の節
は直接に發賣元へ
御注文下さい。

發賣元 東京工業株式會社
東京市神田區神保町六番地
電話東京四二九六五

カルピス

あたたかい
おいしい
滋強飲料

心をこめた
おくりもの



商店・食料品店・藥店にあり

Kis.

金の星社編・世界少年少女名著大系 (10)

グリム童話

新刊

グリムの童話は改めて述べるまでもなくドイツの有名な傳説研究家グリム兄弟の作つたもので各篇ともドイツの各地に傳へられた國民童話である。しかし、グリムの童話は今ではドイツ一國のものでなく、世界の少年少女の珍寶として尊ばれてゐる程有名なものになつてゐる。本書の中に集められた作はグリムの數多くの作の内、最も有名な面白いものばかりである。童話の愛好者及研究家の御一讀を待つ。

金の星社編・世界少年少女名著大系 (11)

繪入 イソップ物語

新刊

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまでに、随分澤山の本が出てゐる。しかし、本書の如く、一つのお話に一枚づゝの立派な畫を入れて、お話と畫と兩方で面白く讀ませる本は他にない。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていただきたい。

四六判箱入美本
内容 百七十頁
定價 金九十錢
送料 金十五錢

四六判箱入美本
内容 百六十餘頁
定價 金九十錢
送料 金十五錢

金の星社 東京市外 一五三番

振替東京五九五六番
電話小石川三五七番

沖野岩三郎先生著 ○ 落谷虹兒畫 伯裝幀並ニ挿畫

長編 森の祈り

四六判箱入美本
本文 二四〇頁
挿繪 三色版外數頁
定價 金壹圓八拾錢
送料 金拾五錢

本誌愛讀中未だこの物語を讀まざる人ありや!! そは、一生の不幸なりとも云ふべし!!

本篇は紀州の漁村に育つた兄妹の哀れな物語りである。父が行方不明になつた後、祖父と母と共に世の荒波にもまれつゝ奮闘努力を續け、遂に父に再會する。その血涙記である。著者の信仰生活によつて生れた名篇だけに、一度本書に接すれば生涯忘れ得ぬ深い感動を與へられるであらう。最も健全にして有意義な讀物として金の星社が責任を以て世に問ふ一大傑作である。尙裝幀と數頁の挿畫とは落谷畫伯の苦心になり、他に見られぬ高雅極まりなく、しかも頗る豪華な本である。

東京市外田端三一五
金の星社
振替東京五九五六番

善丸キ

用筆年萬

キンイナデア



すまりあもに店具房文もに店書のこど

小島政二郎先生譯

(英國文豪) キツブリング原書

世界少年少文學 叢書 第二編

狼少年

附録 白あざらし

【最新刊】

寺内萬治郎畫伯裝幀

四七判 入紙クロース 内容三百數十頁挿繪澤山

定價金貳圓廿錢 送料金十五錢

冒険と驚異を愛する少年は読め!! 世界的名篇を渴仰する少女は読め!! 全国の圖書館は本書を備へて藏書を完備せよ!!

この物語は印度の森林の中で、狼に育てられた少年の物語である。印度の大自然の中で、いろいろな動物と共に生活する不思議な運命を持ったこの少年の物語は、如何に大きな驚異を以て讀者に迫るであらう。世界的文豪キツブリングの名作を、小島先生が翻譯によつて譯述されたもので、日本には珍しい一大名篇である。尚附録の「白あざらし」も同じ作者によつて書かれたもので、頗る面白く物語りである。装幀と口繪共に寺内萬治郎畫伯の苦心になる。

振替東京五九五六番
電話小石川三五八七番

金星社

東京市外 三端一五



目次 (第六卷・第十二號)

鈴の音 (表紙・原色版).....寺内萬治郎	晩秋 (口繪・三色版).....岡本 歸一	小作 石 (口繪・一色版).....寺内萬治郎	同作 曲 (口繪・一色版).....野口 雨情	目玉の入れかへ (滑稽童話).....(一) 本居 長世	一千一夜の酒 (支那怪奇童話).....(二) 小島政二郎	家なき娘 (長篇).....(三) 片平喜一郎	ホシロー・ヒルム (鬼の耳の巻).....(四) 三井 信衛	町 (童話).....(五) 三井 信衛	十五少年漂流物語 (長篇).....(六) 霜田 史光	豚の子を拾った猪 (滑稽童話).....(七) 野口雨情選	青い服 (童話).....(八) 久米 絃一
------------------------	-----------------------	-------------------------	-------------------------	------------------------------	-------------------------------	-------------------------	--------------------------------	----------------------	-----------------------------	-------------------------------	------------------------



動物愛護日 (童話).....(九) 奥山 晃一	枯れ葉 (推薦童話).....(一〇) 日高 紅椿	天狗の失敗 (滑稽童話).....(一一) 野口雨情選	ば 證城寺の狸囃 (傳説童話).....(一二) 原田 謙次	附録・山の少年 (長篇).....(一三) 若山 牧水選	風 (自由篇).....(一四) 野口 雨情	私の兄さん (綴方).....(一五) 山本 鼎選	出陣 哀話 扇の的 (特別一大長篇).....(一六) 齋藤佐次郎選	史外 史傳 ある仇討ちの話.....(一七) 寺内萬治郎	挿 畫.....(一八) 岡本 歸一
--------------------------	---------------------------	-----------------------------	--------------------------------	------------------------------	------------------------	---------------------------	------------------------------------	------------------------------	--------------------





晩^{ばん}

秋^{しゅう}

(金の星書齋)

岡本歸一畫

西條八十先生編著

現代抒情小曲選集

二百餘編の小曲詩選と著者の小曲十編を附録したる無二の優透小曲詩集として特に推賞するに足る。

▽數多の新聞雜誌の選者として長い間に特選せる小曲詩曲約二百を收録して茲に範を示す。當代詩人として名ある者の作品より遙に遙に優逸なりと評ある之等數多の作家あることは眞に吾國詩壇の將來を期待し得るものと謂ふべく。又初めて詩、小曲、民謡、童謡を作らんと欲する諸君には特選せられたる本書こそ愛誦翫味して其表現作方の如何を悟らるべきで有る。乞ふ先づ一讀して其價値を知られよ。

▽（中形版總布特美箱入三百餘頁全一冊）
（正價金一圓三十錢送料書留金十三錢）

高評新刊
評重刊
噴版の
々書満
たを足
る手を
交に恩
蘭にを
社のせ
のらぶ

加藤長江 氏新著 音樂常識辭典
落谷虹兒 氏新著 第三 銀砂の汀
野口雨情 氏著 童謡作方問答
渡邊増三 氏新著 童集 絲ぐるま
テニス原 氏著 イノツクアーデン
幡谷正雄 氏譯

音樂好愛家の爲に知らねば恥の普通重要語歌劇等全部收録金一圓三十錢送料書留金十三錢
美しき畫と美しき詩と美しき装幀と目醒むるばかり美しき本金一圓三十錢送料金十三錢
童謡を讀み又は作らんと欲する人は必ず先づ本書を讀むべし金一圓二十錢送料書留金十三錢
童謡を愛する人は是非一見されん事を望む眞に傑れた童謡三百金一圓廿錢送料書留金十三錢
長篇哀詩として眞に萬人必讀の要ある世界の名著愈々出づ金一圓三十錢送料書留金十三錢

東京 市口 神座 田代 區東 南四 保〇 神二 町七 六十 九

交 蘭 社

▶ 威權高最の物讀童兒 ◀

書叢館書圖童兒院書アデイ

篇三十	篇二十九	篇二十八	篇二十七	篇二十六	篇二十五	篇二十四	篇二十三	篇二十二	篇二十一	篇二十	篇十九	篇十八	篇十七	篇十六	篇十五	篇十四	篇十三	篇十二	篇十一	篇十	篇九	篇八	篇七	篇六	篇五	篇四	篇三	篇二	篇一	
中島孤島著	相良德三著	上里朝秀著	小島政二郎著	野口雨情著	沖野岩三郎著	水谷まさる著	河野伊三郎著	吉田助治編	赤阪清七編	小川未明著	吉田助治編	赤阪清七著	吉田助治著	遠藤早泉著	奥野庄太郎著	田中末廣著	仲原善忠著	岸英雄著	岸英雄著	北村壽夫著	山村暮鳥著	山村暮鳥著	田尾一一著	小植義郎著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著
ギリシヤの神話	西 衛術史 埃及及現代	日本の祖先の生活	コサック騎兵	童話 木の葉の使ひ	黒船物語	マッチの兵隊	鈴	遊記	金島	飴子コノ天使	張月	星の國	星の國	星の國	星の國	星の國	星の國	星の國	星の國	星の國	星の國	星の國	星の國	星の國	星の國	星の國	星の國	星の國	星の國	星の國
價定二、五〇	價定二、〇〇	價定二、〇〇	價定一、六〇	近刊	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定二、三〇	價定一、六〇	價定二、〇〇	價定二、六〇	價定二、三〇	價定二、三〇	價定二、三〇	價定二、三〇	價定二、三〇	價定二、三〇	價定二、三〇	價定二、三〇	價定二、三〇	價定二、三〇	價定二、三〇	價定二、三〇	價定二、三〇	價定二、三〇	價定二、三〇	價定二、三〇	價定二、三〇	價定二、三〇	價定二、三〇
篇三十	篇二十九	篇二十八	篇二十七	篇二十六	篇二十五	篇二十四	篇二十三	篇二十二	篇二十一	篇二十	篇十九	篇十八	篇十七	篇十六	篇十五	篇十四	篇十三	篇十二	篇十一	篇十	篇九	篇八	篇七	篇六	篇五	篇四	篇三	篇二	篇一	
小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	小川未明著	
ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	ある夜の星だち	
價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	價定一、六〇	

三二四五―東京替振 院書アデイ 區込牛市京東 兌發
六五六三―東京替振 院書アデイ 區込牛市京東 兌發

▶ 書叢館書圖童兒のアデイ ◀

中島孤島著

西洋古代史の神話

四六判 411頁
定價二圓五十錢
送料八錢

▲最新刊▼

世界の神話
大洪水の物語
月の神話
海の怪物
龍の窟

成城訓導 上里朝秀著

日本祖先の生活

▲第六版▼

四六判 250頁
定價二圓
送料八錢

歴史の興味は、このように見出す
歴史の興味は、このように見出す
歴史の興味は、このように見出す

文學士 相良德三著

美術史 埃及より現代まで

▲最新刊▼

四六判 27頁
定價二圓
送料八錢

イギリスの歴史
イギリスの歴史
イギリスの歴史

六五五六―東京替振 院書アデイ 區込牛市京東 兌發
三二四五―東京替振 院書アデイ 區込牛市京東 兌發

酔^{よひ}の夜^や一^{せん}千^一



(第十四頁「二千一夜の酒」を御覽下さい。)

寺内萬治郎

最新刊

奥野庄太郎著

(敬する兄姉にも愛する弟妹にも趣味の世界一周記として推奨す)

世界一周繪話

四六版全一冊
總タロース製
挿畫五十餘個
定價一圓二十錢
送料金十錢

著者は日本に於ける知名の教育實際研究家であります。過般初等教育視察の爲め歐米を漫遊せられた際、身を一兒童の立場に置き、歐米の山河・都邑・風俗・人情を觀察し、茲に兒童生活に即したる世界一周記を完成せられました。從つて其の説く所は直に兒童の心琴に觸れ、其の豊富なる挿畫は行文と相應じて、身其の境にあるの感があります。

刊新最

富助一著

(愛する少年少女讀君を始め教育家にも父兄にも一讀を仰ぎたき新著

童話集 兄弟星

四六版全一冊
紙數二百三十頁
定價金八拾錢
途料金十錢

[illegible]

發行人 東市牛區 三共出版 振替東京三五〇五番
電話 牛達一七六二番 小川町二丁目

◇本、るば喜に物り贈のスマスリク◇

▽霜田史光譯

◇四六判上製箱入頗美本
◇定價金九十錢送料六錢

幽靈船

次 目 書 本
カ 隊
リ フ の 鶴 商
幽 靈 船
ツ ア ロ イ コ ス の お 話
フ ア ト メ の 救 ひ

▽原作は有名な獨逸のウキルヘルム・ハーフ、金の星誌上でお馴染みの好評を博したものの、少年少女にも、大人にも、面白くて為になるとは本書のこと、それで定價は低廉無比……あらゆる御家庭の讀み物として、お勸めします。

初等 基本算術書

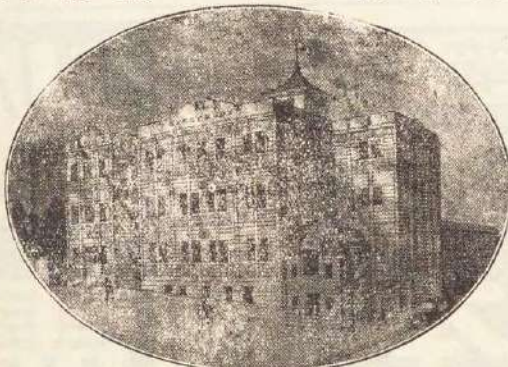
四 六 判
二 百 五 十 頁
定 價 金 七 十 錢
送 料 金 四 錢

▽中學校、女學校、受験生の爲めに、最も權威ある算術の準備書を、推薦致します。

店 書 本 米 一ノ一町錦田神京東 九三三二五京東替振 所行發

天下青年の登龍門

會長、 正三位	尾崎行雄
學監、 理學博士	山内繁雄
文學博士	遠藤隆吉



(圖計設所務事會本)

目下新學期開講中
入會の最好期は今也!!
講義録見本つき會則
— 申込次第無料進呈 —

大日本國民中學會あり!!

天下の青年諸君、意を強てうし可也

諸君は學校、萬端の迷夢より醒めなければならぬ。中等教育を受けるには必ずしも「學校」に入るを要しない。我々は居ながらにして中學校に「参入」することが出来るのである。大日本國民中學會の同志をつくせる議義録は學校以上の學校、教師以上の教師として諸君に臨むであらう。

本會二十二年の試練と經驗とはこゝに次の如き獨自の特色を獲得せり。

講義の新しいこと……模範的通信教授として推奨せらる。

會費の賤いこと……全科の學費一ヶ月分の遊學費にも満たず。

學制の正しいこと……正確に中學校令に従ひ全く中學校と同様也

指導の良しと……通信教授に永き絶望を有するを以て指導慾はを極む

講師の善
中興
實業家
の
専ら

創立以來二十二年國家事業として一般に認めらる。

成功の確な事………太會の門より出でたる成功者の多き事と謂ふを用ひず。

大日本國民中學會

振替 電話 三〇〇四番
口座 電話 三〇〇四番
名古屋 電話 三〇〇四番
名古屋 電話 三〇〇四番

名古陸四二八〇卷 楚辭生述 五〇九五雷

ざっし
雑誌
を
えら
選ぶ
は
いま
今!!

◇新年からお薦めしたい雑誌◇

◆生活の必需品 として我國でも雑誌が新聞と同じ様に誰にも讀まれて來たことは、最も喜ぶべき事實であるが、その善惡の影響に就いては、讀者間の話題となつてゐる様だ。雑誌の持つべき點、効果に就いては今更言ふ迄もないが、多く讀まれれば讀まれるだけに如何に社會利本位のものも自然現れて來ることは何時も覺れることで、現在では雑誌の選擇がまた重要なものとなつて來た程である。

雑誌は新年號から読み始めることが讀者にとつて最も利便が多い、従つて來年からは何を読まうかと迷つて居られる方も多いことであらう。

◇少年少女讀物 としては、何と言つても、澄宮殿下台覧の光榮な荷ひし、同類諸中の第一の大部分を有する「少年俱樂部」少女向としては、國母陛下皇太子妃殿下台覧の輝き「少女俱樂部」と定評がある。何しろ兩誌

共ニ代一流の教育家數十名が賛助員として纏
結されるものだけに愛する御子弟方の讀物と
しては絶好のものである。

婦人雜誌の中 には上品で實用的との
評判が高い。婦人俱樂部が第一に數へられ
る。同誌が最も親切な婦人の味方として、堅
實な道を歩み今日の大発展を見た事は、實に感
嘆に値する。小説、料理、育児、裁縫、美容
の記事、説話、評論、研究等婦人に關する一切
の事物は、各専門家の責任を以てて記述し
てゐる。即婦人方が雜誌選擇の絶好期に臨
み、婦人俱樂部を手にせられる事を記者は切

◆萬人向の雑誌
第一に数へられる。徳富蘇峯氏、上杉慎吉博士が極力推薦されてゐる所から見ても、滑稽愉快な雑誌「面白俱樂部」と共に我國の娯樂雑誌を代表してゐるものと云へる。

高級知識の民衆化を標榜し、國民必須の知識を平易に誰が讀んでも面白く判る様に記述した雑誌「現代」が名實共に本一、是非お薦めしたい雑誌の一つ。

◇面白くて爲になる事を其の極語として
 編輯される大日本雄辯會、講談社發行のもの
 は各方面から代表的な雑誌として好評を受け
 てる。例へば講談社、現代、白雲、
 部、或は雄辯、婦人俱樂部、少年俱樂部、少
 女俱樂部と云つた様に何れもその方面々々で
 評判を以て誌界第一位を占めてゐる。

この著年號から創刊される同社の「キング」も豫告や、諸方面の名士の評判から見ても、これ又推奨すべき良雑誌の様に見られる。

◆日本一を標榜し發行部數が現在日本の最大部數を發行する雑誌より三倍で、面白く、爲になること、安心のこと、何から何でも日本、然し同社が過去二十年に亘る研究の結果發刊されるものだけに、一躍世界有数の名雑誌として日本の誇りともなるやに考へられる。

今は雜誌の選び時、此期に以上の様な良雜誌を選擇される事が最も肝要である。何故ならば種々な大讀物や面白讀物などは、何れも新年號から掲載されるし又種々な特典があるからである。

(廣告)

あをぞら社新刊重版書

東京市神田區錦町一ノ八日本日曜學校協會内
振替東京一八〇〇四番 電話大手五五三八番

本社は多年の研究と経験から、児童の心理と、教育の原理とを考へ合せ、特に宗教々育上の立場から安心してお勧め出来るものを厳選して家庭に提供する爲めに新らしく生れたものであります。茲に最初の厳選出版六種をお目にかけます。

童話集 幼き日

野邊地天馬先生著
童話の寶玉集である特に幼いお子さん方を目的にして著者獨特のなだらかな筆で書いたもの。
(價一圓八十錢 税八錢)

聖フランシス

山村暮鳥先生著
アシシの聖者の生涯を敬虔な思想と詩的な筆致でほんとうに子供の友として描き出したもの。
(價一圓五十錢 税八錢)

舊約エステル姫物語

鈴鹿正一先生著
舊約物語に精通する著者が得意の壇上を筆にしたもので清い美しいエステル姫の面目躍如。
(價一圓 税四錢)

島の娘

村岡花子先生著
物語と童話とクリスマスのお話の三部に分れて網羅する所二十五篇悉く著者の精選に係る
(價税共同上)

第一集 子供も臺中にして

上澤謙二先生著
新しい計画と工夫の下に書かれたもの、母親、教師、お話の先生は勿論子供達にも良い同伴
(價同上 税六錢)

日曜學校讚美歌

讚美歌委員會編
讚附教師用價一圓 税六錢
譜無生徒用價廿五錢 税二錢
初版二萬部買切改訂再版新裝して發賣

金の星

二十 月 號



小石

本居長世作曲

Andante (M.M. ♩ = 152)

The first system of the musical score for 'Koushi'. It features a treble and bass staff with a key signature of one sharp (F#) and a common time signature (C). The tempo is marked 'Andante' with a metronome indication of 152 beats per minute. The music begins with a series of eighth notes in the bass staff, followed by a melodic line in the treble staff.

The second system of the musical score. It continues the melody from the first system. Below the treble staff, the Japanese lyrics are written: ひかふよとちうてこいしをひろたひろたひろたこいしをたもとに.

The third system of the musical score. It continues the melody. Below the treble staff, the Japanese lyrics are written: いれやうたもとあもーてふろーとてふれや.

三

The fourth system of the musical score. It continues the melody. Below the treble staff, the Japanese lyrics are written: たもとたんであひさのせたのせたのせたたもとたないて.

The fifth system of the musical score. It continues the melody. Below the treble staff, the Japanese lyrics are written: たもとたんであひさのせたのせたのせたたもとたないて.

The sixth system of the musical score. It continues the melody. Below the treble staff, the Japanese lyrics are written: あたふしはころけーたふろーはのそる. The system ends with a 'riton.' (ritardando) marking.

二

小石

野口雨情

向ふ横丁で

小石を拾た

拾た小石を

袂に入れりや

袂重くて

振ろとて振れぬ

袂たたんで

お膝に載せた

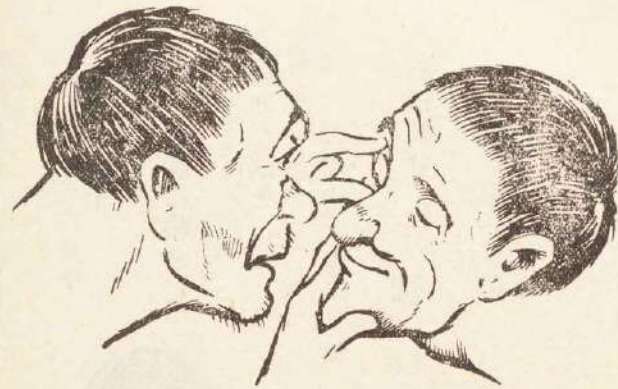
載せた袂を

たたいてゐたりや

石は轉げて

袂は残る





へかれ入の玉目

郎二政島小

六

昔——と云つても、明治の初めに、八王子に伊吾さんと云ふ人がゐました。或時、目をわづらつて難儀をしてゐました。方々の醫者にかかつて療治をして貰つたり、目に利くと云ふ温泉へ行つたり、しまひには、お禁脈をして貰つたりして見ましたが、一向よくなりませんでした。そのうちに、目の前に雲が掛つたやうになつて、物が見えなくなつてしまひました。

今日も、伊吾さんは、お醫者に通ふつもりで、杖を突き突き歩いて行くと、

「おや、伊吾さんぢやないか。按摩さん見たいに杖なんか突いてどうしたんだい。」

「さう云ふ聲は一六さんだね。目が見えなくなると、聲で人を聞き分けるから不思議なものさ。」

「目が見えない？ 一體どうしたんだい。まさか晝

間から見えないんだから、鳥目ぢやあるまい。一體何目だね？」

「雨だよ。」

「ナニ雨？ そんな目があるのか。」

「雲が一杯掩つてしまつたから、雨さ。」

「ナーンだ。目が見えないと云ふのに、洒落か。どれどれ、見せなさい。」

かう云ひながら一六さんは、伊吾さんの目を指で開いて見てゐましたが、

「伊吾さん、こりや雨ぢやないよ。お天気だよ。」

「どうして？」

「だつて、星が一杯出てゐるもの。——が、まあ冗談はさて置いて、目は大事だからネ、いゝ醫者に見せなくつちやイケないよ。昔から、目をつぶすか、身上をつぶすか」と云はれてゐるが、潰すならどつちを潰すネ？」

「どつちも潰したくない。」

「そんな悠張つたことを云はすに、まあ、どつちを潰すネ。」

「目は潰したくないネ。」

「そんなら各齋各齋しすに、いゝ醫者にお掛りよ。」

横町 藪 竹庵なんかに掛つてゐた日には本當の盲にされてしまふ。」

「盲にされては大變だ。誰かいゝお醫者を君は知つてゐるのかい。」

「知つてゐるとも。横濱に、目の病氣専門のイギリスの博士がゐる。名をヘボン先生と云ふのだ。ところが、この先生は一昨年亡くなられて、その後は一番弟子のシャボン先生と云ふのが病院を開いてゐるが、目の病氣ならどんな難病でも立派に直すと云ふ觸れ込みで、大繁昌をしてゐると云ふことだ。そこへ行つて見給へ。」

「成程。ちやあ此足ですぐ行つて見よう。」

で、伊吾さんはシャボン先生の町所を教はつて、

七

急いで横濱へ出向いて行きました。

二

「やれ／＼、やつと横濱までやつて来たぞ。多分の邊だらう。何でも横町へ曲れと云つたつけ。いつぞやまだ目が見えた時、按摩さんに、「一體横町に曲る時にはどうして分ります」と聞いたなら、そつちの方から風がフーッと吹いて来るから分ります」と云つてゐた。成程、吹いて来る。こつちへ曲るんだらう。」

伊吾さんはそんな一人言を云ひながら、その横町へ曲りましたが、

「往來の方、シャボン先生の病院はどの邊でございませうか。」と尋ねました。すると、親切な人が、
「かう 出でなさい。」と手を執つて、引つ張つて玄關まで連れて行つてくれました。

上へあがると、日本人の先生がゐて

てしまふところだつた。」

「直りませうか。」

「直るとも。今日一日で直る。」

「有り難い。では、是非療治を願ひます。」

「その代り、少し荒療治だぞ。」

「荒療治と云ひますと？」

「目の玉を剝り抜くのだ。」

「えッ。」

「目の玉を剝り抜くのだ。」

「目の玉を剝り抜いて捨ててしまつたら、新しい目が生えて来ませうか。」

「誰か目の玉を捨てると云つた？」

「でも今、目の玉を剝り抜くのだと仰しやつたぢやありませんか。」

「まあ、さう慌てずに、しまひまで聞きなさい。——

いゝかね、目の玉を剝り抜いて……。」

「成程、目の玉を剝り抜いて……。」

「生憎シャボン先生は一月ばかり旅行に出られてお留守だが、代りに私が見て上げよう。」

「すると、あなたは代診ですか？」

「まあ、早く云へばさうだ。しかし、代診の中でも、先生の一番弟子で、劍術使ひで云へば、先生に代つて弟子に稽古をすることが出来る位の腕前はある。」

「——どれ、見せなさい。」

「あなたでも直りませうか。」

「直る直らないは見た上でなければ分らん。いゝから、まあ見せなさい。」

「まさか命を取られることもあるまい。思ひ切つて見て貰はう。しかし代先生、なるべく此上悪くしないで下さいよ。」

「安心するがよい。悪くなつても、盲になれば済むことだ。——ウン、成程、すつかり目に雲が掛つてしまつてゐる。危いところであつた。もう二三日手當が遅れようものなら、取り返しつかぬ盲になつ

「薬の中で雲をすつかり洗ひ落すのだ。さうして、それを素通り睨め直せば、目は秋の月のやうに澄みわたつて、何でも見えるやうになる。」

「ナールホド。しかし、さう口で云ふやうに旨く行きませうか。」

「行くだらうと思ふんだ。實はこれまでシャボン先生のなさる所を幾度も見てゐたが、自分で療治をするのはこれが初めてなのだ。ナ—ニ、シャボン先生のなさる所を見てゐると、造作のないもんだ。まあ、試しにやつて見よう。失敗つたつて大したこともあるまい。」

「そりや貴方には大したことはないでせうが、私にとつては一生の大變ですからね。せい／＼失敗らないやうにお頼み申しますよ。」

「よし／＼。もつとこつちへ寄りなさい。いゝかね、ぢやあ愈々剝り抜きにかかるよ。ソラ、これが痛みを止める注射だ。これさへ注射して置けば、何をさ



「でも痛くない。ホラ、痛くないだらう。——ボロツ、ボロツ。どうだ、もう両方とも剝り抜けてしまった。」

「へえ、もう剝り抜けてしまったので。驚きましたネ、ちつとも痛くありませんよ。」

「さあ、これから目の玉を薬で洗ふのだが、少し時間がかかるから、その間退屈だらう、そこにある『金の星』でも読んでみなさい。」

「代先生、冗談ぢやありませんよ。両方の目の玉を剝り抜かれて、何が讀めるんです。」

「成程、私はまだ一度も両方の目を剝り抜かれた覚えはないが、目の玉がなくなつてしまつては、何も見えないだらうね。それとも見えるかい？ かうして私が目の玉をジャブ／＼薬で洗つてゐるのが見えるかい？」

「見えませんよ。しかし、ジャブ／＼洗つてゐる音はよく聞えますよ。どうか無駄口を利いてゐない

で、一分でも早く洗ひ上げてしまつて下さい。——まだですか。」

「いや、もう少しだ。ホレ、御覧。こんなに雲が消えて、目の玉が澄んで来た、ソーラ、とう／＼全く雪が消えて、十五夜お月さん今晚は……。」

「嬉しい、嬉しい。早く嵌めて下さいよ、代先生。」

「よろしい。こつちを向いて！ 大きく目を見張つて！」

しかし、代診先生が餘り永く洗つてゐたものですから、目の玉が脹けて、穴よりも大きくなつてしまつたので、素通り嵌まなくなつてしまひました。

「おや？ これはイケない。力まかせに押し込んだら、運入らないこともあるまい。エンヤラヤ、ドッコイシヨ、ウーン。」

「代先生、さう押し込んだちや痛くつて堪らない。もつと静かに入れて下さい。」

「目の玉が這入るか運入らないかの瀬戸際だと思へ

ば、少し位痛く／＼たつて我慢しなさい。私だつて一生懸命だ。——エンヤラヤ、ドッコイシヨ、ウーン。」

「アイタタ、アイタタ。」

「こりやどうもイカン。よし、鐵槌で叩き込んでやれ。トン／＼、トン／＼。」

「ガン／＼、ガン／＼。こりや堪らぬ。腦へ響いて、目から火が飛び出しさうだ。」

「うん、分つた。お前さん、心配しないで宜しい。いゝ事を考へた。目の玉をかうして此板の上へ載せて、この縁側の日向へ乾して置かう。三十分もすれば、乾いて素通り小さくなるだらう。」

そこで二人は、その問世間話をして待つことになりましたが、やがて代先生が

「もう宜からう。」と振り返つて見ると、今まであつた目の玉が影も形もありませんでした。「さあ大變だ。お前さんの、目の玉がどこか逃げて行つてしまつたよ。」

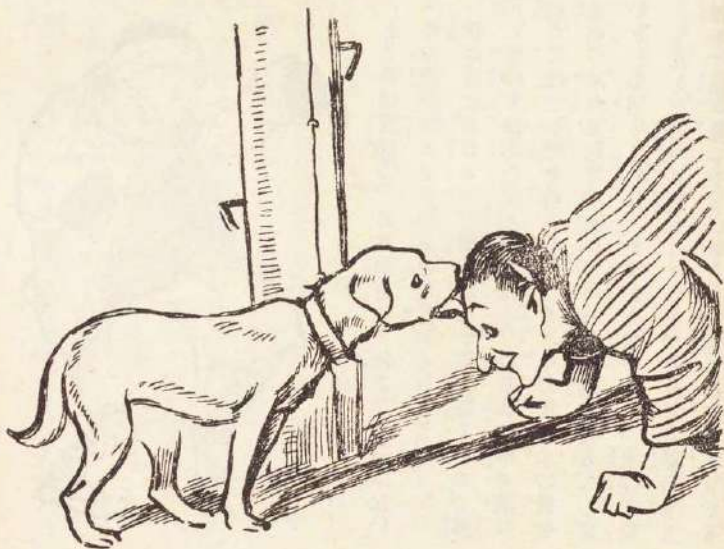
「えッ。それぢや私はこの儘本當の目無しになつてしまふんですか。」

『しかし、不思議だな。目の玉に足が生える譯はなし、まさか太陽の熱で溶けてしまつた譯でもあるまい。』

と云ひながら代先生があたりを見廻すと、庭で犬が口をモグ／＼させてゐました。

『伊吾さん、安心するがい、目の玉の行方が分つたよ。シャボン先生の飼犬が食べてしまつたのだよ。』
『馬鹿にするにも程がある。犬が目玉を食べてしまつたから安心するがい、とは何事だ。何が安心だ。』

（安心さ。犬の目の玉を剥き抜いて、お前さんの目の中へ入れて上げる。お前さんの目の玉よりもすつと上等な目の玉が出来る譯ぢやないか。』
『そんな事が出来ますか。しかし、それぢや犬が盲になつてしまつて可哀想でせう。』



「ナニ、犬のお腹の中にはお前さんの目の玉が二つ這入つてゐるから、それが、自分の目の玉を剥き抜かれると同時に、ビヨ／＼と、犬の目の玉になるから、心配したものではない。」

かう云ひながら代先生は、犬の目の玉をボロボロと二つとも抜き出して、伊吾さんの目の中へ嵌め込んでくれました。

『うん。丁度よく合つた。どれ、静かに目をあけて御覽。』

云はれて、伊吾さんはソロリ／＼と目をあけて見ました。

『どうだ。よく見えるだらう。』

『えい、よく見えることはよく見えますが、不思議だな、何も彼も逆様に見える。』

『締まつた。逆に入れてしまつたのだ。待ちなさい。今すぐ直して上げるから。』

また造作なく、ボロ／＼と目の玉を抜き出して、

今度は正しく嵌め直してくれてから

『さ、今度はいゝだらう。静かにあけて御覽。』

『ナールホド。こりや宜く見える。暗い處でもハツキリ見える。クシヨン、おや、あすこの臺所の隅に鼠が走つてゐる。ワン／＼。——あら、今玄關を怪しい奴が覗き込んで行きましたよ。クシヨン。ああ云ふ奴が下駄泥棒をするに違ひない。——ファン／＼、不思議に鼻まで犬のやうに利いて來て、いろんな匂がする。』

『さあ／＼そんなに犬見たいに方々を嗅いで廻らないで、直つたんだから、さつさとお歸んなさい。』
『えい。いろ／＼有り難うございました。ぢやあ左様なら。』

と伊吾さんは歸りかけましたが、ふと喉のところへ手をやつて

『あ、代先生、鰯札がなければ歸れません。』

(をばり)



一千一夜の酒

片平喜一郎

ところは支那の、ある山奥に、秋さんと云ふたいへんお酒を造ることの上手な人がありました。秋さんは毎日々々、朝起きてから夜遅くまで、谷川に行つては水を汲んで来たり、森や林の中を駆け廻つては、お酒を造る材料にする木の根や木の實を蒐めて来たりして、日がな一日、お酒を造ることばかりして居りました。ですから秋さんは、風采のこなんかを考へる暇もないので、それこそ髪の毛も髭も、雀の巢ぢやないかと見間違ふほど、もちやも

ちやと延びるがまゝで、それに着物と云つたら、ちやうど昆布を束にして、肩からさげてゐるやうな風で、それは、汚らしい着物を着て、まるで、乞食のやうな風をしてをりました。でも秋さんは、そんなことには一向おかまひなしで、風采のことを考へる暇があつたら、それよりか『今度は、一ツどんなふうにして、良い酒を造らうかな』と、お酒を造ることを考へる方が、餘つ程良いと思つてをりました。

そんな譯で、秋さんはもう、初めてお酒を造りだしてから、それは、いろ／＼のお酒を造つたのでありました。先づ、そのうちでも、なか／＼珍奇なものだと思はれるのは、浮れの酒、沈思の酒、くしやみの酒、噴き出しの酒、と云つたやうなもので、それこそ数へ出したら、二日も三日もかゝらなければ数へきれない程の澤山のお酒を、それ／＼形の異つた瓶に入れて、家中一ツばいになるほど、いろ／＼なお酒を造つたのでありました。

ところで、また、秋さんの造つたお酒と云ふのは、不思議なことには、普通の酒屋で賣つて居るやうなお酒とは異つて、それが實に奇妙なのです。家中に並べてゐる、その澤山の瓶のお酒は、みんな別々に異つた味がして、そしてまた、別々に奇體な酔ひかたをするのです。例へば、浮れの酒と云へば、その酒を飲んだ人は、どんな内氣な温順しい人でも、浮れ出して丁ふし、沈思の酒と云へば、それを飲むと、

べら／＼喋るお喋りやでも、みんな陰氣な顔をして、何か考へこんで丁ふし、泣き笑ひの酒を飲めば、顔をしかめて泣きつ面をしながら、けた／＼笑ふとか、くしやみの酒を飲むと、酔が醒めるまでは、何百べんとなく、くしやみばかりして居るとか、噴き出しの酒と云へば、年がら年中、四角ばつてむづかしい顔をしてゐる人でも、一度そのお酒を口に入れたが最後、『はッはッはッはッはッ』と、大きな聲を出して、けた／＼笑ひ出して丁ふと云つたやうな風で、奇妙奇手烈な、お酒ばかりでありました。中でも、人の榮酒などと云ふ酒ときたら、今が今まで、酒を飲む前までは、まるで畜生にも劣るやうな、強慾者の、義理人情も知らない心の悪い者でも、その酒を飲んで丁ふと、すつかり心が生れ變つた人のやうになつて、ちよつとのことにも涙つぽくなつて、たいへん慈悲深い心になると云ふ、實に良いお酒でありました。

かういふ譯で、狄さんの造るお酒と云ふのは、世にも珍らしい、不思議な酒ばかりでありましたが、狄さんはその酒を街へ持つて行つて、高いお金で賣つてお金儲けをしようなどとは考へませんでした。狄さんは、一生一代の仕事として、唯だ、そんないろいろのお酒を造つて居るのが樂しみなのでしたから、いつも、お酒を造りあげる度に、そのお酒の出来加減をみて、それに相當するやうな恰好の瓶をこしらへて、そしてその瓶に、出来たお酒を入れて、だん／＼とお酒の瓶が増えていくのを見ては、ほくほく喜んで居るのでありました。

ところで狄さんは、近頃になつてから、『一つ今度は、うんと大が／＼で、いゝ酒を造つてみたい。』と思ひ出したのでありました。それと云ふのは、今まで造つたいろいろのお酒を、みんな少しづつ混せて、その上、うんと良い原料を選んで、そして、『二千一夜の酒』と云ふお酒を造らうと考へたので

した。そして、それを造るには、一千と一晚もかゝらなければ出来ないと云ふ、この上もない立派なお酒なのでありました。

つまり、その一千一夜の酒と云ふのは、そのお酒を飲むと、忽ちのうちに何とも言はれない良い心持ちになつて、そして、極樂淨土のやうな樂しい國へでも行つたやうな氣持ちに酔ふと云ふ、實に以つて、快い酔ひかたをして、その上に、そのお酒の酔が醒めるまでには、一千と一晚も暮さなければ、酔が醒めないと云ふやうな、不可思議千萬なお酒でありました。

それで、いよいよ狄さんは、一千一夜の酒を造ることになりますと、狄さんの苦心はたいしたものので、毎朝、夜が明けないうちから起き出して、綺麗な水ですつかり體を洗ひ清めて、それから四方の神々様に、

『これは／＼四方の神々様、どうか、一千一夜の酒



の出来加減がよろしく参りますよ、この狄、心の底から、深く／＼お願ひ申し上げます。』と云つて、

神様にお祈りをあげてから、仕事場へ行つて、仕事を始めるのでありました。

そして先づ、浮れの酒を一杯、それから泣き笑ひの酒を三杯に、くしやみの酒を一杯半と、沈思の酒を二杯、ところで、人の榮酒が三十六杯、と云つた風にして、柄杓を持つて、あつちの瓶からも、こつちの瓶からもと、いろいろの瓶からお酒を汲んでは、大きな新しい瓶へ入れて、棒をもつてそれをかき混ぜながら、一千一夜の酒を造ることに一生懸命でありました。

ところが、一千一夜の酒を造りはじめてから、恰度八百八十と九日目の、或るとんよりと曇つた日のことでありました。狄さんのむかしのお友達で玄さんと云ふ人が、ひよつくりと、狄さんの仕事場へ訪ねて來ました。

『やあ、しばらく……』

『これは、また、お珍らしい……』

と、玄さんと狄さんは、久し振りで會つたのですから、にこ／＼笑ひながら挨拶をしました。

『ところで、近頃は、どんなお酒をお造りで——』と、大酒のみの玄さんは、挨拶が済むとすぐ、お酒のことを尋ねました。

正直ものゝ狄さんは、にこ／＼笑ひながら、さも嬉しさうな顔をして、

『へえ只今は、一千一夜の酒を造つて居りますんでなア——』と云つて、一千一夜の酒のことを詳しく玄さんに説明して聞かせました。すると酒のみの玄さんのことですから、一千一夜の酒の不可思議千萬な酔ひかたであることを聞くと、さあ、堪つたものではありません。一千一夜の酒が飲みたくつて、ちつとしては居られません。

『そつ、それに有難いことぢや。一ツ、わしに御馳走して下さい。』と云つて、玄さんは、一生懸命狄さんに頼みました。

一千一夜の酒を飲んで了ふと、

『もう、一杯。』と云つて、盃を差し出して、狄さんにねだりました。

すると、いくら人の良い狄さんでも、玄さんの、その無作法なを見て、ちよつと眉をよせて、

『いや／＼、最初のお約束ぢや。今日は一杯で我慢なされ。まあ今日は、これで歸るとして、一千一夜すぎてから、また來なされ。』と言ひました。

そこで玄さんは、もう一杯飲みたくつてならなかつたのですが、なか／＼狄さんが、飲まして呉れさうでありませんので、仕方なく、

『それぢや、まあ仕方がない。今日は、諦めとして、また、そのうちに來るから、今度はうんと飲してお呉れ。』と言つて、さも残念さうな顔をして、舌をべろ／＼出しては、口の周圍を舐めすりながら、ふらふらしながら、歸つて行きました。

玄さんは、もう狄さんの家を出た時から、すつか

しかし、まだ一千一夜の酒は、出來上つてゐないのですから、狄さんはそのことを云つて、『一千一夜になるには、まだ、百と十二日も早いから、それまで待つてお呉れ。』と云つて、斷りました。しかし、お酒のことゝきたたら、なか／＼言ひ出したら後にはひかない、強情ツ張りな玄さんですから、

『いんや／＼、早くたつて、かまはん／＼』と云つて、たうとう、八百八十と九日にしかならない一千一夜の酒を、一杯だけ御馳走して貰ふことになりました。

成る程、玄さんは一千一夜の酒を飲んでみると、まだ、八百八十九日にしかならない出來上つてゐない酒ではありましたが、その味のいゝことゝ云つたら、さすが狄さんが苦心したゞけあつて、玄さんが、生れてから一度も、味つたことがないほど、何とも言へなら良い舌ざりでありました。玄さんは、すつかりいゝ心持ちになつて、舌つゞみをうちながら、

り、一千一夜の酒の酔ひが體中に廻つて、そこら中にあるものが、何でも彼でも、みんな面白さうに踊り、ちよつと居るやうに見え出して來ました。玄さんはすつかり、嬉しくなつて了つて、鼻歌を歌ひながら、すた／＼踊りをどつて家へ歸りました。ところが、だん／＼家へ近づくに従つて、お酒の酔ひが益々體にきいて來て、終ひには、何が何やら譯が解らなくなつて了ひました。そして、やつと自分の家の門口まで來た時には、たうとう、堪へきれなくなつて、そこへばつたりと、棒のやうに倒れて了ひました。

玄さんが倒れたその音が、あまりひどかつたものですから、家の中に居た人達は、みんな吃驚りして、門口に出て來ました。見ると、どうでせう。もう玄さんは、まるで死んだ人のやうに眞つ蒼になつて、口からぶく／＼泡をふいて居るのです。

玄さんの家の人達は、大さわぎをして、玄さんを

家の中へかつぎ込みました。そして水をかけたり、薬を飲んだり、お醫者を招んだりして、手あてをしました。が、玄さんは、生きかへりさうありませんでした。お醫者も、

『こりや、もう駄目です。あまりお酒を飲み過ぎたのです。』と云つて、氣の毒さうな顔をしたつきり、何も言ひませんでした。玄さんの家の人は、がつかりして、みんなおい／＼泣きながら、お坊さんを頼んで、玄さんのお葬式を出すことにしました。

そこで玄さんは、たうとう、その翌日、お葬ひをされて、お寺の傍の空地に埋められて了ひました。それから、恰度一千と一日目のことでありました。玄さんの家へ、

『玄さん、おいでかな?』と言つて、ひよつくり、狄さんが訪ねて來ました。

ところが玄さんは、とうの昔に死んで了つてゐるのですから、玄さんの家の人は、さう不思議さうに、



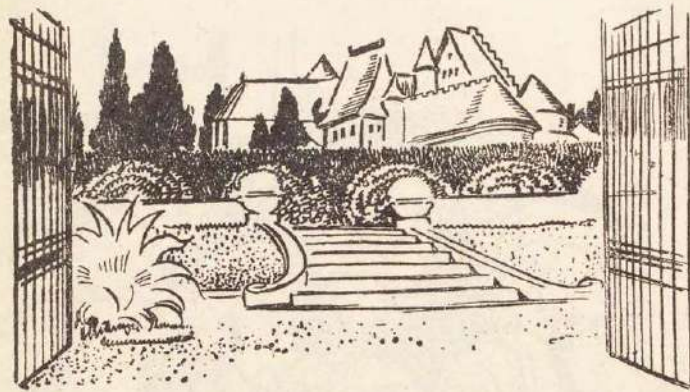
『え、玄ですか? うちの玄は、とうに死んで了ひましたが。』と言つて、狄さんの顔をじろ／＼見ました。狄さんは、すつかり驚いて了つて、

『そ、そりや大變だ。玄さんは死んだんぢやない。そりや嘘だ。ほんとに、死んだんぢやない。』と云つて、狄さんは玄さんの家の人達に、玄さんが一千一夜の酒を飲んで、それに酔つて眠つてゐるのだと云ふことから、今日は恰度一千一日目だから、もう酔ひが醒める頃なので、それでわざ／＼訪ねて來たと云ふことを、詳しく話しました。玄さんの家の人は、驚くやら、喜ぶやら、てんでこ舞ひをして、早速、狄さんを連れて、玄さんを埋めてあるお寺の傍の空地へ行きました。そして、大あわてに、あわてて墓石をひつくりかへして、土を掘り始めました。すると、どうでせう。土を掘るに従つて、だん／＼お墓の底の方から、ぶん／＼と人臭い、にはひがして來ました。みんなはその臭ひをかいで、『これは、

きつと、玄さんが、生き返つたのかも知れない』と思ひました。そこで尙も、一生懸命、土を掘りました。そして、たうとう、すつかり土を掘りあげて、漸くのことに棺の蓋を開けてゐると、こはそもいかに、死んだ筈の玄さんがばつちりと眼を開いて、みんなの方を見廻はして、にこ／＼笑ひながら、『ウ、――』と、背のびをして、

『ああ、すつかり良い心持ちで、寝こんで了つた。ほんとに、一千一夜の酒の酔心持の良いことつたらないな。お蔭で、すつかり寢坊をしてすつた。ところで、みなさん。随分、お天と様が高／＼昇つてゐるが、一體、今は、何時頃なんだね。』と言つて、玄さんは、大きなあくびをして、また、『うう――背のびをしました。』

これを見た狄さん始め、玄さんの家の人々は、玄さんの陽氣なのにあきれて、笑ふことも出来ませんでした。



娘きな家

(篇妹姉の『子きな家』)

衛信井三

七 祖父の面影

一二

端なくも道づれになつたこの少女の名前は、ロオザリイと言ひました。歩きながら彼女はバリンヌに向つて、色々と身の上を尋ねるのでした。バリンヌが彼女と同じ父母のない身の上であることや、さては眠るに家もない娘だと知ると、ロオザリイは心から思ひ勞りました。さうしてロオザリイのおばさんが下宿屋をしてゐるので、家へ来て泊つてはどうかと勧めました。

この町へ来ても、直ぐにはおちいさんに會ふことも出来ないと思つた今では、どうせ何處かで眠る家を見つけたければなりません。バリンヌはロオザリイの言ふまゝに、その家で泊ることにしました。「彼の家にはベンチットさんといふ技師が泊つてらつしやるのよ。でもその方は英吉利人なの。」

「まアさう、私英吉利の言葉も話せるからいゝわ。」

思はずバリンヌは言ひました。

「まア、英吉利の言葉を！」

「私のお母さんは英吉利人だから。」

「あらさう？」ロオザリイはちつとバリンヌの顔を見ました。バリンヌはハツとうつむきました。

二人は青々と繁つたボブラの並木路を通り抜けて、やがてマロオクウルの町に着きました。丁度その町の入口には、大きな鐵の門が建つてゐて、しかもその中には夢の宮殿のやうな美しいお邸が、くつきりと見えてゐるのでした。

「まア美しいお邸だこと！」バリンヌは言ひました。「これはウルフランさんのお邸なのよ。」

ロオザリイの言葉にバリンヌは、思はずその門にびつたりと身を寄せて、つくつくとその中を眺めました。これが當り前の身分なら、誰に遠慮會得もなくこの中へ入つて行くことが出来るのに……彼女の小さい胸は、限りもない哀しさで押し詰るやうでし

た。

寂しい思ひでロオザリイの家に着いたバリンヌは、初めてフランソアおばあさんに會つて、さうしてその夜から泊めて貰ふ約束をしたのでした。小さい庭の林檎の木の下で、ロオザリイと二人テエブルに向つてお夕飯を食べてゐた時、不圖耳を澄して見ると、丁度表に當つてから、んころんと朗らかな鈴の音が聞えました。

「あゝ、ウルフランさんがお越しになつたわ。」

ロオザリイがさう言つたので思はずその方を見ると、向方からは美しい一臺の幌馬車が走つて来て、やがて家の前でびつたりと停つたのでした。その馬車の中には、白髪頭の老紳士が乗つてゐました。それこそはバリンヌの祖父ウルフラン！

「おゝ、おちいさま！」と口に出かゝつたその言葉を、バリンヌは哀しく歎してしまひました。

馬車の音を聞くと、フランソアおばあさんは門の

外へ馳けて行きました。

『今日はウルフランさま！』

『今日はフランシア！』

さうして暫らくの間、二人は何事かを語り合つてをりましたが、やがてウルフランは言ひました。

『ロオザリイは何處にあるのかな？』

『はい、こゝにをりますわ。』とロオザリイの聲。

『おゝ、さうか、これをお前に上げよう。』

さう言つてウルフランがロオザリイに銀貨を一つ與へると、再び馬車は鈴の音を立てゝそこを立ち去つて行きました。ロオザリイはバリンスの處へ走つて来て、今のお金を見せました。

『ウルフランさんがこれを下すつたのよ。』

『えゝ、私こゝで聞いてゐたわ……でもウルフランさんは、あなたをよく御存じなんではう？』

『えゝ、よく御存じよ。何故？』

『だつてウルフランさんは何故「ロオザリイは何處

にゐる？」なんて仰有るの？』

『それはウルフランさんのお目が見えないからよ。』

『えッ？』

『さうよ、ウルフランさんは盲目なのよ。』

『まア……盲目！』バリンスはかう叫んだまゝ、暫くはロオザリイをちつと見つめてゐるのです。

八 女工となつて

ウルフランが盲目だと知つたバリンスは、何とも言へない憂ひに閉されました。固より只の一度も會つたことのない祖父ではあつたけれど、初めて盲目だと知つて見ると、心は例へやうもない哀しさで一杯でした。

バリンスの父のアドモンが勘當されて間もなく、ウルフランは深い心配の餘り急に肺炎を病つて、その熱のために目が見えなくなつたのだ——ロオザリイはこんなに話しました、可哀想な祖父のウルフラ

ン！可哀想な孫のバリンス！一體この二人の運命はどうなり行くのでせうか？

さて、その夜バリンスは、ロオザリイに伴れられて一つの部屋に案内されました。部屋とはほんの名ばかりで、ちめくくと床は濕つてゐて、ブンと厭な臭が鼻を衝きました。しかもぎつしりと六つのベットが、その狭い部屋中に並んでゐるのです。

バリンスはその一つのベッドに身を横たへましたが、まるで玩具のやうに小さくて、寝返りを打つことさへも出来ません。しかもこの部屋へも、又お隣りの部屋へも、やがてたくさんの女工たちが入つて来て、がや／＼と騒ぎ立てました。

眠られぬまゝにバリンスは、只一人この家を出て行きました。さうして或る池の邊りに行き着いた時、不圖眺めると、そこには小さな小屋がありました。中は真暗ではあつたが、誰一人ゐる様子もありません。池の汀の小波の音、木の葉の戦ぎ——あの

堅い小さなベッドに増して、まアそこはまるで楽しい天國のやうにも思はれました。

思はずぐつすりと眠つた彼女が不圖目を醒して見ると、もう邊りには明るい朝の光が射し込んでをりました。さうして工場の煙突からは黒い煙が流れ流れ、やがてはボーッと汽笛の音さへ鳴り渡りました。

『さうだわ、私はこれから一心に働きませう。さうしたなら、いつか工場主のウルフランさまを、おちいさんとお呼びする日も来るに違ひない。』

心に強く決した彼女は、その小屋を後にしてマロオクウルの町に入りました。やがて二番目の汽笛が鳴り渡ると、今までは人通りのなかつた静かな町には、彼方からも此方からも俄かにたくさんの人たちが出て来て、見る／＼うちに一杯になりました。老人や若い人や少年や少女や……それ等の人たちが長い／＼列を作つて、流れるやうに工場へ／＼と急ぐ

のでした。

たくさんの人たちの列の中で、バリンスはロオザリイの姿を見つけてました。さうしてロオザリイに伴れられて、工場の門を入つたのでした。工場の玄関には職工長のタルウチルといふ人が立つてをりましたが、これは又至つて意地悪で、バリンスがこの工場に雇はれて暫く経つと、この人がウルフランの盲目なのを幸、工場を横取りしようと企んでゐるのを知ることゝなるのです。

それはさておきバリンスは、その日からこの工場に雇はれることゝなりました。やがてロオザリイに伴れられて、と或る一部屋に入ると、そこには老人の職工長が立つてをりました。この老人は今から十二年前に機械に觸れて兩足を失くし、さうして木の義足をつけてゐました。それで歩く時にはコツツリ／＼と音がするので、誰も彼もがコツツリさんと呼んでをりました。



コツツリさんに伴れられて、バリンスは大きな倉庫の前に來ました。

『貴様は小父さんたちが荷物を積んだら、側見をしないで一心に車を曳いて行くのだぞ。わかつたか？』

『はい……』

やがて二人三人の老夫たちが、『えんやらどつこい！どつこいえんやら！』と荷物を山ほど積むと、今度はバリンスがその車を曳いて、この倉からもう一つの倉へ曳いて行くのです。車を空にして歸つて來ると、直ぐに又『えんやらどつこい！』と荷物を積みます。さうしてまア一日の間に、何十遍それを繰り返したことでせう！

激しい働きのためにどき／＼と高鳴る胸を抑へ、バリンスがロオザリイの處へ行くと、まだ絲繰機械は轟々と響きを立て、その側に糸をかけてゐるロオザリイの顔は、寂しさうに微笑んでゐました……と、その時、突然ロオザリイは『きやつ！』と叫ん

で打ら倒れてしまつたのでした。

ロオザリイさん、確りして頂戴！確りして頂戴！驚いてバリンスはその側に駆け寄ると、倒れてゐるロオザリイの床の上には、真赤な血が流れてをりました。

『どうしたんだ！』コツツリさんは叫びました。

『はい……指を怪我しましたの……』

『どれお見せ。』

可哀想にロオザリイの指は、もうぶら／＼に干切れてゐるではありませぬか。直ぐにバリンスは確りと肩を抱い

て、工場の門を出て行かうとすると、あの意地悪のタルウエルが、どうしても出してはくれないのでした。

途方に暮れてバリンスが不圖後を振り返つて見ると、一人の老人が手さぐりで歩いて來ました。思ひがけなくウルフランでした！

目は見えないが直ぐにウルフランはロオザリイだと氣がついて、深切にもお醫者のところへ行けと言ひました。

『お前一人で行けるかな？』

『私が伴いてまゐりますわ。』

バリンスは言ひました。おゝ、思へばバリンスが、ウルフランに向つて物を言つたのは、本當にこれが初めてでした。道を行きながらバリンスは、しみじみと言ふのでした。

『ロオザリイさん、本當にウルフランさんは御深切な方ね。』

た。

『おい、英語を話すちびといふのはお前かい？』

『は、はい……』

『そんなら分工場へ行け！ ウルフランさんのお呼びだ。』

『えゝッ？』とバリンスは驚きました。『分工場へ行つて、まあ何をするんでせう？』

『そんなことは知らん。』

『私、分工場へ行く道を存じません。』

するとタルウエルは、黙つて頸をしやくりました。と、そこにはいつもウルフランの乗つてゐる美しい幌馬車が、びつたりと横づけになつてゐるではありませんか！

からりころり——馬車がやがてマロオクウルの町を去つて、サン・バボアの分工場へと向ひました。それにしてもウルフランが、一體どうしてバリンスを呼んだのか。不審で一杯になつてゐたその時に、駈

『えゝ……若しあの方が、本當のおちいさんだつたら、どんなに——幸福でせうね！』

思はずかう言つたロオザリイの言葉に、バリンスはハツとして胸を抑へました。あゝ、何時になつたらあのウルフランを、おちいさんと呼ぶ機が來るのであらう……？

九 小さな通辯

生れもつかぬ不具となつたロオザリイは、手に綱帶を巻いたまゝ、やつぱり工場に通つてをりました。が、それからほんの間もなくのことでした。いつもの通り、バリンスがえんやら／＼と荷車を曳いてゐると、コツツリさんが聲をかけました。

『おーい、事務所から呼んでるぞ、直ぐに行け！』言はれてバリンスは、何事が起つたのだらうと訝りながら、そのまゝ大急ぎで工場の玄関へ行つて見ると、そこにはあのタルウエルが立つてをりました。

者のウイリアムは馬車を走らせながら、その譯を話しました。

それは外でもないが、今度英吉利から二人の技師が訪れて來ました。だが、この工場の英國人の技師ペンヂットが急病となつて、英語を話せる者が誰も居なくなりました。ところが丁度その時、バリンスが生れながらに英語を話すといふことが、ロオザリイの口から知れ渡つて、やがてそれがウルフランの耳に入つたのでした。さうして今彼女は、サン・バボアの分工場でその英吉利の技師たちの言ふことを、ウルフランに通辯することゝなつたのです。

どんなにか深い心配をしたけれど、バリンスの通辯は見事に成功しました。その流暢な英語を聞いたウルフランは、バリンスに向つて色々身の上を訊くのでした。

『お前のお母さんは何時亡くなつた？』

『五週間ばかり前でございましたわ。』懐へた低い聲

でバリヌヌは答へました。

『お父さんは？』

『お父さんは……お母さんより半年ほど前に亡くなりましたの……』

『お前はお母さんが亡くなると、直ぐに巴里を立つたのかな？』

『さうでございますわ。』

『どういふ譯で？』

『お母さんが死にます時に、お前は巴里にゐないで直ぐに北部へ行つたがい、そこにはお父さんの親類があるんだから……さう申したのでございます。』

『さうしてお前は、いつも



の親類とやらへ行くのかな？』

バリヌヌは思はずハツとして暫くは黙つてをりました。

『私はもうそこへはまゐりません……』

『それは又どう云譯で？』

『お父さんは、おちいさんと大變仲がお惡かつたのでございます。私の生れます前に、お父さんは家を出ておしまひになりました。私が歸つて行きましたなら、吃度おちいさんは、お怒りになるに違ひありません……』

哀しさうなバリヌヌの言葉を聞くと、ウルフランは

見えない目を窓の方に向けて、はつと深い溜息をつきました。

『それはお父さんのことだよ。』

たとへお父さんかさうではあつ

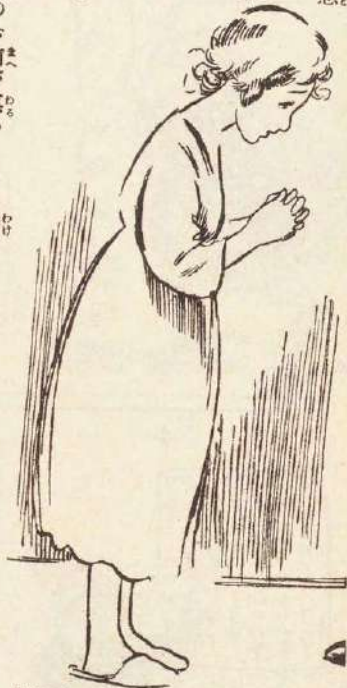
ても、その子供のお前が悪いといふ譯がどこにあらう。』

『え、？ まアそれは本當でせうか。』

思はずバリヌヌは言ひました。

『若しや……若しやそのおちいさんが、あなたでございしたら、やつぱり……そんなにお思ひになるでございませうか。』

けれどもウルフランは、それには何一言も答へてはくれませんでした。



その時支配人が急用で招びに來たので、ウルフランはそこを出てしまひました。

さうして哀れにもバリヌヌは、たうとう祖父と名乗る機も來ないで、その翌る日、このサン・バボアの町を去つて行つたのでした。

それから暫く經つて、彼女はウルフランの世話役となり、あの大きな美しい邸の中に住むことゝはなつたけれど、彼女の運命は益々苦しくなつて行きました。バリヌヌが初めて幸福の日を見るまでには、まア何といふ辛い哀しい月日を送つたでせう！美しくも悲しいこの物語は、やがて一冊の本となつて、皆さんの前にあらはれませう。どうか御愛讀の程を祈ります。(をばり)



哉州丹徳夫作
寺内七郎画



童 謡

野口雨情選

(子供篇)

踏切番の

おばあさん

福岡市 野坂 治

雨の降る日の
汽車道は

ザアザア雨が
降るばかり

電信柱も
ならんでぬれた

踏切番の
おばあさん

汽車が来るまで
何してる

ふくろ

山梨縣 飯島 正明

月夜のばん

ふくろうが

鳴いた

ホウーホウー

ふとんを

かぶつて

ねませうよ
ホウーホウー

すゝむし

京都府立 岡本しな子

いだの葉蔭で

すゝむしは

今夜はじめて

なきました

町の雨

熊本縣 渡邊 徹之

雨は山から町へふる

からかさした町の人

かつこの鳴てたお山から

雨は町へとふつてくる

晴の朝

京都府 波多野鹿之助

そら豆 畑 麥畑

ならんで青いぞ

お空ははてまで

とんとこ晴たぞ

もとの學校

長野縣 五味 光信

もとの學校へ行つたら

昔のまゝの學校のお庭

ぼぶらが

ならんで居りました

もとの學校のお庭の隅に

今日もコスモス

咲いてます

一本ねむの木

香川縣 若松 忠夫

お里の燈はもう消えた

夕ぐれ

山梨縣 大久保準一

星が出る

竹さんボツ

酒買ひに

矢車草

京都府 伊藤富士雄

はねつるべはねつるべ

矢車草が

枯れさうだ

一ばい水くめ

まだまだ

二ばい水くめ

まだまだ

矢車草が枯れさうだ

一本ねむの木おねむりよ

闇夜は暗くて淋しから

なせなせお月さん光ない

大空小空

山梨縣 丸茂大次郎

大空小空

青いそら

からす一羽

北山寒い

水切り

東京市 金子 武夫

一ちよう切つた

二ちよう切つた

三ちよう切つた

皆んなで石もつて

水切つて

一ちよう切つた

二ちよう切つた

三ちよう切つた

マツチの小人

甲府市 丸茂 五郎

マツチのお家に

何がある

小人が千人

すんでゐる

小人はどんな

ふうしてる



頭にや黒い
まめづきん

一本足で
やせてゐる



十五少年漂流物語

(前巻までの梗概は六六頁にあります)

霜田史光

イバンスはまた話し出しました。
「ワイルドストン等は、この洞の少年達を攻める方法を相談してゐました。本當に悪い奴等です。皆さんをおのセベルン號の船長達のやうに、殺してしまはうと思つてゐたのです。で、私はどうかして逃げたいと思つてゐました。今朝からワイルドストンは、フオーベスとロツクとの二人に私を見張らせて置いて、何處かへ出かけました。私はこんな時でない」と逃げるときは、急いで森の中へ逃げ込みました。それは午前十時頃でしたが、それから私は一日中二人に追ひかけられながら

森の中を逃げ廻りました。さうして私は、三、四里は走つたと思ひます。その間に二人は幾度も私に鐵砲を打ちかけましたが、幸ひに當りませんでした。
そのうちに夜になりましたが、電光がひどいので、私は姿を隠すことが出来ません。やつと川に出ましたから、この川を渡りさへすればよいと思つて飛び込みますと、その時またピカリと電光がしまして、私の體が見えたのです。それから、ズドンと一發うたれました。その丸は私の肩へ打つたが、その時早く、私は水の中へ躍り込んでゐましたから、彼手を切つてこちらの岸へ泳ぎ着いたので

す。そして草の下へ身をかくしてゐますと、向岸で二人の話し聲がしました。――確かに命中つたかい――命中つたやうだよ――ちや水の中へ沈んだのだらう――いゝあんばひだ――こんな話しをして、二人は歸つてしまひましたので、私は此處へ来て君達に助けられたのです。
イバンスは長い話しを終ると、
「皆さん、どうぞ私にもお仲間に入れて下さい。そして力を協せて、あの悪者共をこの島から追ひ拂つてしまひませう」と云ひました。
少年達は大喜びしました。イバンスと云ふ

大人の、しかも力の強うな人が、自分達の味方になつて呉れると云ふので、少年達の勇氣は前の倍にもなりました。

二、離れ孤島ぢやない

それから少年達はイバンスに、交るゝ自分達がこゝに流れ着いた事から、今日まで二十ヶ月の間暮して来たことを話しましたので、イバンスは大層感心しました。
一通り話しが終つて、また悪者共を防ぐ相談になりました。ワイルドストンは、
「ワイルドストン等に、若し入用な大工道具を貸してやつたらどうでせう。さうしてワイルドストン等が船の碇が直しが出来て、この島をおとなしく去つて呉れば、戦ひなぞなしないても済むと云ふものぢやないでせうか。」と種々なことを云ひ出しました。するとイバンスは、
「もつとものやうですが、あのワイルドストン等の悪者共は、君達のさうした恩を有難いと思ふやうな人間ぢやありません。船の碇が直しが済んでからでも、奴等は屹度君達の所から、食べ物や鐵砲や彈や、それからお金まで

奪ひ取らうとするでせう。その時君達は、何んでも奴等の云ふ通りになりますか。」
「そんなことは出来ません。」
「出来ないとすれば、奴等は脱ぐで持つて行かうとするでせう。さうなれば矢張り戦ひです。どうせ戦ふのう、始めからその心算で戦つた方がいゝぢやありませんか。」
イバンスの云ふことはもつとでした。それでワイルドストンの説も止めにして、いゝ／＼悪者共と戦はうと云ふことになりました。

イバンスはまた云ひました。
「例へば奴等が大工道具を借りて、船を直すことが出来たとしても、奴等は君達のことを放つて置いて、自分達ばかりこの島を去つてしまふでせう。」
それを聞いてサーピスは、
「僕等のことなんか、放つて置いて貰つて結構ぢやありませんか。」と云ひました。
「ちやあの傳馬船がなくなつたら、私達は何んぞこの島を脱がれようと思ふのですか。」
今度はワイルドストンが妙に思つて、
「あなたはあんな小さな傳馬船で、この廣々とした太平洋を横切らうと云ふのですか。」と

訊ねました。
「勿論です」とイバンスは云ひました。
「だつてあんな船で何百里と云ふ海が乗り切れますか。」とバクスターも云ひました。
「え、何百里であつて、所が私が乗り切らうと思ふ所は三十哩もないんですよ。」とイバンスは云ひました。
「さうしますと、この島の周囲の海は太平洋ぢやないのですか。」と誰かが云ふと、すぐにまた一人が、
「それぢやこの島は大陸から餘り遠くないのですか。」
「それ、少年達は驚いて訊ねました。
「おや、それぢや君達は一體今何處にゐると思つてゐますか。」
「太平洋のたゞ中の離れ孤島……」
「そりア島は島ですよ。然し離れ孤島ぢやありません。君達は方々でいろんな名を付けたりやうですが、して見るとこの島にも名を付けましたか。」
「え、私達はチエイマン島と呼んでゐます。チエイマンは私達の學校の名なんです。」
「チエイマン島か、成程ね。さうしますと、

この島は古いのと新しいのと二つ名が出来る
たけです。と云ふのは世間でこの島を
古くからハノーバル島と云つてゐますから
れ。

この話は少年達をどんなに驚かしたてせ
う。

イバンスは詳しいことは、明日地図を出し
て、それで教へませうと云つて、その晩は寝
ました。

十五少年は皆急に何んだか嬉しくなつて、
床の中でも胸がわくわくするのでした。

三、この島の位置

南アメリカの南に、東は大西洋から、西は
太平洋までつき抜けてある大きな海峡があり
ます。その兩岸は山が多くて、高いのは海が
三千尺もあり、この海峡は海が多くて、
船を泊めるには大變便利で、それに何處
へ行つても水や薪に困りませんから、船乗は
ホルン岬を廻るよりも、浪は低いし、この方
を喜んで通ります。これは千五百年前に名
高いポルトガルの船乗のマゼランといふ人が
見つけ出した所で、マゼラン海峡と云ふ名が

ついてゐます。

マゼラン海峡の東口は大きな湾になつてあ
る、見る限り水ですが、西口の太平洋の方は
小さな島が幾つとなく點々としてゐまして、
これはチリ國の濱邊と並ぶやうにして北の
方へ續いてゐます。

イバンスは翌日、少年達を集めて、地圖
を開き、南アメリカの南の端の方を指してあ
ました。

「ほう、こんなにマゼラン海峡の西口から北
に向つて、チリ國と並んで續いてゐる深山
の島の中に、南はメクシコ島に向ひ、
北はマドリード島とケサダム島に近く向つてゐる
一つの島があるでせう。この島の名はハノー
バルと云ふのです。君達がチエイマン島と名
づけたのがこれなんです。此處で君達は二
十ヶ月も暮してゐたんですよ。」と云ひまし
た。

「して見ると僕達は、チリ國とはいくらも
離れてゐない所にあつたんですか。」とゴルドン
は驚いて云ひました。

「さうなんです。しかし、若し君達がうまく
大陸へ渡ることが出来たとしました所で、君



を親切にして呉れるでせう。たゞチリ國の
海岸は、曲りくねりが多くて、船を進めるの
は大分危いのです。」

「これから南へ行つたら、僕達の本國へ歸る

でこの島を出帆するとしたら、一體どの方向
へ行つたらよいのでせうと訊ねますと、イバ
ンスは、

「まづすぐに南へ行くんで、風の都合さ
へよければ、私達はチリ國の海岸のどこか
の港に着くことは、さうむづかしいことでは
ないでせう。そしてその邊の人達は、何處私達

に都合のよい所へ出られますか。」とアリア
スが訊ねました。

「さうです。まづ地圖を御覽なさい。私達は
これから南へ下るとします。そしてスミエ海
峡にゆき、これを抜けるとマゼラン海峡に出
ます。こゝにタマルと云ふ港があります。か
ら、此處へさへ行けば、多分歸れるやうな船
を見つかることが出来るでせう。」

「若しタマル港で、本國へ行く船が見付から
なかつたとしても、どうしますか。」

「その時は、マゼラン海峡の内へ入つて少し
行くと、左にフランスウキツク半島が見えま
す。その半島にフォアレスウ港があります。
海の中にカーラントと云ふ港があります。
この港は船の出入が深山あります。もつ
と進んで行きますと、半島の南の端のフロロ
ード岬を廻つて、アウゲキンビル湾に出ま
す。その湾の港は、いつも出入の船が深山泊
つてゐますし、もつと行けばフアミンと云
ふ港もありますし、パンタアレナと云ふ港も
あります。」

イバンスは流石に船乗だけあつて、よく知
つて居ります。少年達は一度マゼラン海峡の

邊がチリ國のアレンセン共和国の街まで出
るには、何百里と云ふ荒野を通らなければな
りませんし、それにその荒野にはよくない野
蠻人がゐますから、君達が大陸へ渡らすに今
迄此處にあつたのは却つて幸せであつたです。」
と、イバンスは云ひました。

このハノーバル島をとりまいてゐる海は、
狭い所は十五マイルか二十マイルで向ふの陸
へ渡ることが出来るので、若し晴れた
日なら、モーターボートを漕いでも行かれた
のであります。少年達が東の海岸へ立つて、
始終見てゐたなら、或いは向ふの陸が見えた
かも知れないのですが、向ふの陸も岸が低い
爲めに、近いけれどもなかなか見ることが出
来なかつたのでせう。その上いつも一番遠い
所から見えてゐたことになつてゐたからでもあ
ります。たゞゴルドン達が北の海岸へ行つた
時は、明らかにチアダム島が見える筈であつた
のですが、生憎、その日は嵐で、それから見え
なかつたのです。そしていつかアリアンが見
た白い點は、雪を被つたアンデス山脈の中
一つの山だつたのでせう。

ゴルドンはイバンスに向つて、若し傳馬船

中へ這入りさへすれば、どこかの港で本國の
方へ行く船を見つけて、頼んで乗せて貰ふこ
とが出来ると云ふ。海峡の内でもタマル、カ
ーラント、フアミンなどの港は皆貧乏な街
ですが、パンタアレナは中々賑やかな街
ですから、其處には大抵な欲しいと思ふ品物
もある筈です。

四、計略の裏をかけ

イバンスの話は聞いて見ると、少年達の
第一の仕事はマゼラン海峡へはいる事です。
それにどうしても、あの傳馬船が入用にな
つて來ます。その爲めには惡者共と戦つて、
それを分捕らなければなりません。併し、こ
れは中々むづかしいことで、こちらはイバ
ンスが味方になつたと云つても、あとは少年達
です。その少年達は、あつては五、六人
で、あとは自分の體を守ることに、出来な
いやうな幼い者ばかりです。それに引き換へて
敵は七人もの大人で、それこそ人殺しの幾度も
したやうな恐ろしく強い者共ですから、とて
も普通に戦つたら勝てる道理はありません。
一番いい方法は、この洞の守りを固くして、

敵の攻めて来るのを待つてゐることです。ケ
ートの話によりますと、悪者共の中で、フ
ガイベスだけは根からの悪者ではないとの事
です。何しろケートはフガイベスの爲めに殺
される所を助かつたのですから、そんな風に
考へてゐます。しかし、イバンスはフガイベ
スとても始めは誘はれて悪者の仲間入りをし
たのだらうけれど、今は本當の悪者になつて
ゐるだらうと云ひました。

それから五六日たちましたが、ワルストン
等の攻めて来る模様もなければ、少しも様子
も判りませんでした。それにしても、悪者共
の中の誰かが洞内の様子を探りに来さうなも
のだと思ひました。

イバンスは或日、ふと考へ付いたことをア
リアンやゴルドンに話しました。

「私が若し彼奴等だとして考へ付いたことと
すが、きつとかうすだらうと思ひます。そ
れは彼奴等はまだ君達が知らずにあると思つ
てゐるに違ひありませんし、ケートさんや私
なも死んだものと思つてゐるでせうから、あ
の仲間の一人がこの洞に来て難船で捕れ着
いた者だから助けて下さいと云へば、君達は

きつと中に入れて種々と親切にしてやるでせ
う。さうして洞の中へ這入つたら、隙を見て
中から戸を開けて外の仲間を呼べば、わけな
くこの洞を分捕ることが出来るでせう。ワ
ルストン達が中々攻めて来ないのは、つまりこ
んな計略を考へてゐるからぢやないでせう
か」と云ひました。

「さうすると、僕達はどうしてそれを防いだ
らうでせうねえ。」

「計略の裏をかくんですそれ。」

「イバンスは答へました。」

翌る日も別に變になく夕方になりました。

が、その岩壁の上に見張りをしてゐたらエ
ツプとクロースとが忙がしく洞に歸つて來
て、今川の對岸に二人の人影が見えて、だん
だんとこの洞に近づいて來ると云ひました。

「ほう、私の云つた通りになつて來たでせ
う。」イバンスが云ひますと、リアンは、

「僕等はどうかしらうでせうね」と心配さ
うに訊ねました。

イバンスはリアン等の耳に口を當て、

ヒツ／＼と何か云つて聞かせました。そして

イバンスとケートとは、物置の隅にある戸棚

の中へ身をかくしました。

ゴルドン、リアン、ドクバン、バクス
の四人は、それから洞の外へ出ておろ／＼
してゐますと、二人の男が如何にも驚いたや
うな顔をして四人のところへ駆け來まし
た。ゴルドン等もそれを見て、わざと吃驚し
たやうな顔付をしました。それはロツクとフ
ガイベスといふ二人の悪漢でした。

「貴方がたは何んですか」とゴルドンから口
を切りました。

「私は今朝この島の南で難船しました水夫
です。」

「英國人ですか。」

「いや、米國人です。」

「外の乗組員はどうなさいました。」

「皆溺れ死んでしまひました。私達二人はか
りが幸ひにも波邊へ流れ着いたので、そし
てあなた方は？」

「僕達はこの島へ移つて來た者です。」

「それならお願ひですから、私達に少しはか
りの食べ物と一杯の水を下さいませんか。私
達は今朝から水さへるくに飲めなかつたので
す。」

人位はひねり殺してしまふと思ひましたか
ら、別に心にもかけませんでした。



五、悪者共はそろ／＼動き出した

かうして二時間ばかりの間、悪者二人はぐ
つ／＼と眠つてゐました。
起き出す様子も見えませんでした。モコは
ひよつとすると、今夜はこのまゝにして明日
の傍でも何かしようとするのではないと思
ひました。
夜半の十二時になつた時、悪者二人はそ
そと起き出しました。そして忍び足に戸口
の方へ進み寄りましたが、天井から吊してあ
つたランプの光は、はつきりと二人の様子を
照しました。
川の方へ向いた物置の戸は門を堅くした
上に、周りは大石が積んでありましたが、二
人は大石を除け、いま、門に手をかけまし
た。

その時、ロツクの肩を背後から、ムンジと
掴んだ鐵のやうな腕がありました。ロツクは
吃驚して振り返つて見ると、お處にはセベル
ン號の二等運轉士のイバンスが立つてゐまし
た。

「イバンス、汝も此處に……」とロツクがふ
ふ間に、イバンスは

「皆んな出て來ろんだ」と叫べば、バクス

「難船した水夫はどこへ行つても助けを求め
ていゝのです。遠慮なくお入り下さい。」
ロツクと云ふのは見るから恐ろしい悪漢
をしてゐましたが、フガイベスの方はどうや
らそんなに惡いでもありませんでした。二
人は洞の中へ這入つてから食べ物を買つて食
べながら、少年達と難船の模様を話して
聞かせました。けれどもあまり詳しく聞か
れると、疲れたからと云つてごまかししま
ひました。そして洞の中を見廻して武器の澤
山あることや、その守りの厳重なのに驚いた
やうな様子をしてゐることは、早くもゴルド
ンが見てとりました。

二人は少年達に案内されて、物置の隅の床
に横になりましたが、その中に食べ物や深
山着つてあるのを見て、二人は顔を見合せて
喜んでゐる様子な、そつと窺つてゐたゴルド
ンがまた見てしまひました。然し、二人は大
分疲れた人のやうに、ぢきにぐつ／＼と眠り
つてしまひました。モコはそつと二人の傍
に來て寝ました。二人はその事を知つて居り
ましたが、著し自分達がいゝ事を始める
時に、聲などを立てれば、たかが悪人の子一

「う、さうです。」



「さうです。」

「さうです。」

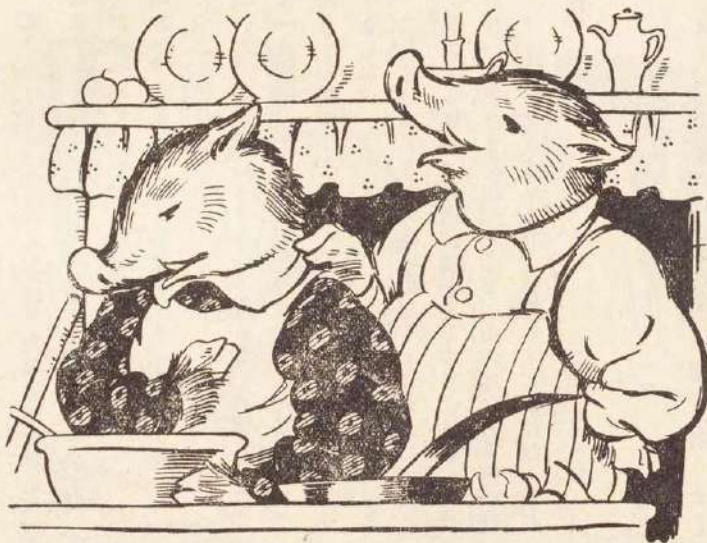
「さうです。」

「さうです。」

六、戦いは始まった

「さうです。」

「さうです。」



豚の子を拾つた猪

久米 一

山奥に、猪の夫婦が棲んで居りました。傍で見ても美しいほど仲がよかつたのですが、困つた事には、二人の間には一人の子供もありませんでした。

よく夕方など、夫の猪が縁側で頬杖を突きながら、何かちいつと物思ひに沈んでゐる事がありました。妻の猪が傍へ来て、

「もし、どうかなさつたのですか。」と訊ねますと、夫は顔を上げて、

「いや、なんでもない。が、併しね、俺達にも一人でもいいから子供があつたらなア。」と残念さうに云ふのでした。

のです。勇ましいドノバンは雄飛を發つとすぐ、フハンを先に立て、聲のした樹の方へ駆け出しました。

「それ進め、進め、ドノバン君一人をやつちやいけない。」

とイバンスが叫びながら、少年達も後から走つて行つて、ドノバンに追ひ付いて見ますと、樹の下に一人の人間が倒れてゐて、もう息も絶えてゐます。イバンスはそれを見て、

「これはバイクだ。これで世界の中から悪者を一人減らすことが出来た」と云ひました。

「外の奴は何處へ行つたでせう。まだ遠くへは行くまいと思ひますがね。」とドノバンが云ふと、

「さうです。この邊に隠れてゐるでせう。君達、跳つくんだ。頭を上げちやいけない。」

とイバンスが云ふ間もなく、少年達の左の方から一發の音と一緒に彈丸が飛んで来て、いま跳つかうとしてゐたサ・ビスの右額をなすりました。

「君、怪我したか」とドノバンが聞くと、サ・ビスは、

「なに、一寸かすり傷だ」と平氣です。

この時、ガーネットは急に氣が付いて、

「アリアン君は何處へ行つたらう」と云ひ出しました。その時フハンは左の方の草叢を目標に、まづしらに駆け行きますので、ドノバン達は「アリアン君、アリアン君」と叫びながら、その後を追ひかけました。

クロースは忽ち體を地の上に伏せながら、

「氣をつけなさい。イバンスさん」と云ふので、イバンスはすぐに體を屈めて頭を下げますと、その時スドンと音がして、イバンスの頭の上一二寸の所を彈丸が飛んで行きました。

イバンスはすぐに頭を上げて見ますと、一人の悪者が森の中を向ふへ逃げて行く後姿が見えました。それは昨夜とて逃したロツクでした。イバンスはズドン、と一發後からお見舞申しました。するとロツクはまるで地の中へ落ち込んだやうに、急に姿が見えなくなつてしまひました。

「チエツ、また逃がしたか」とイバンスは口惜しがりました。

こんなことの起つたのはほんの六七秒の間です。イバンスはクロースと共に、駆け行

つて見ますと、ドノバンの聲で、

「アリアン君、しつかりし給へ」と叫んでゐます。

イバンスはその聲を目がけて草や木を分けて夢中に近づいて見ますと、アリアンはコープと戦つて、地の上に組み伏せられてゐます。しかもコープはいま小刀をふり上げてアリアンを一刺しに刺さうとしたが、その時早く、駆け寄つたドノバンが、しつかりとコープの右手を抑へて動かしません。そして片手で腰のあたりを探つて短銃を出さうとしてゐます。その手のゆるんだ所を、悪者はドノバンの手をふり放つたと思ふと、ドノバンの胸にサツと小刀を突き差しました。

追に勇ましいドノバンも、叫び聲をへださずに地の上にぶつ倒れました。(なほり)

(附記)「十五少年漂流物語」はながながと怪傑の御愛護を受けて、熱狂的御好評を以て迎へられてゐましたが、まだお話の終らない内に遂に十二月號となつてしまひました。で、止むなくこゝで一段落にして、後は近日、本社から出版する單行本に掲載いたします。悪か、すお赦しを願ひます。(記者)

又、妻の猪が、臺所で小麦粉を捏ねる手を休めて、はんやりと遠くの空を眺めてゐる事がありました。夫が傍へ来て、ボンと肩を叩いて、

『おい、どうした。』と云ひますと、妻は氣が附いて、につこり笑ひながら、

『いえ、どうもしませんの。併しね、私達にもたつた一人でいゝから子供があつたら、どんなによかつたらうと思つてましたの。』と淋しさうに云ふのでありました。

二人はいろ／＼と相談の揚句、もう此上は、よく人間がする様に、神様に願ひををするより他に仕様がなと思ひました。そこで、山の麓にある明神様へ、夫婦が代りばんこで、お詣りする事になりました。

二

さて、山の麓には、豚の夫婦が棲んで居りました。



四八
た。この夫婦は大變な子持ちで、豚の奥さんは、毎土曜毎に一人づつ赤ちやんを産みました。ですから、豚さんのお家、喧ましい事と云つたら大變で、御飯の時など、ぶう／＼がや／＼、まるで戦場のやうでした。

『ねえ、丁度奥さんが廿六人目の赤ちやんを産んだ時、夫に向つてかう云ひました。

『かう赤ちやんが出来てはほんとに困ります。しまひには私達迄が食べられなくなつてしまふかも知れません。……どうでせう、可哀さうですが、一人棄てる事にしたら？』

夫の豚は何でも妻の云ふ通りになつてゐましたので、

『それもよからう』と賛成しました。そこで今生まれたばかりの赤ちやんを、ぼろぎれに包んで明神様の森迄抱いて行き、杉の根本にそつ棄てゝ來ました。

三

其日は丁度、山の奥では、夫の猪の參詣の日に當つてゐました。夫の猪がおまわりを済して、石段を降り様としますと、右手の森の中で『びゅう、びゅう』と云ふ赤ん坊の泣聲がしました。猪は吃驚して走つて行つて見ると、おや／＼、杉の根本に生まれたばかりの猪の、(夫の猪はさう思ひました)赤ちやんが、紐の様な尻ッぽを振り／＼泣いてゐるのでした。猪は、そのふうわりと軟かい、桃色の身体を抱き上げると、無性に嬉しくなつて來ました。『さア、いよ／＼神様が我々の願ひを叶へて下さつたのだ！』

夫の猪は飛ぶやうにして我家へ歸つて來ました。『おい、早く出ておいで。赤坊が生れたよ、赤坊が！』妻はそれを聞いて、大急ぎで駆け出して來ました。『おや、まア、可愛らしい赤ちやんね 何時生れた

の……まア、なんてこの鼻先の可愛らしいんでせう。一寸、一寸、私にも抱かせて下さい。」

「いや、どうして……」夫は遮ぎつて「さう滅多には貸せないよ。これは私の赤坊だからね。私がお祈りしたために神様が下さつたのだからね。」

「あら、そんな事はないわ。私だって、どんなに一生懸命神様にお願ひした事か。貴方がお宮に行つていらつしやる留守中、私も内々でお祈りをしてゐたんですよ。」

「いや、何といつてもこれは私の子だよ……」

あゝ、よし／＼、泣くな／＼、ねん／＼よう。おころりよ、よい子だ泣くなよ、ねんねしな。」

四

夫婦が猪の赤坊だと思ひ込んでゐる、豚の子は日増に大きくなつて行きました。

併し困つた事には、夫の猪は、

「いくらきりやうがよくつたつて、あんなに意氣地無しちや困ります。それと云ふのも皆、貴方がいけ

ないんです。あなたが活潑に育てないからいけないんです。今日は一ツ、山へ連れて行つて、崖落しを教へてやつて下さい。」

かう云はれて見ると全くそれに違ひないので、夫の猪は、其日坊やを連れて、墓の高い山へ上つて行きました。崖落しと云ふのは、峻しい／＼崖を、腹

匍ひになつて滑り下りる方法です。

猪のお父さんは、先づ自分が崖の上から谷底迄、する／＼／＼と見事に滑つて見せました。そして息子

の所へ来て、

「さア、お前もやつて御覧。お父さんが此處で見えてゐるから。この術は是非覚えて置かないと、獵人に追かけられた時、飛んでもない事になるからね。さア、やつて御覧」と云ひました。

併し猪の子は深い谷底を覗き込んだまゝ、容易に

五〇
「この子は私が拾つて來たのだから、私の子だ。」と云つて朝から自分ばかり抱つこしてゐて、奥さんには一寸も貸してくれません。奥さんにはそれがつまらないのでした。

その内に赤ちゃん、其處等あたりを遊び廻る事が出来る様になりましたが、どうも、他の猪の子供等の様に活潑ではありません。

山のぼりや、角力などは大嫌ひで、何時も御飯を戴くと、涼しい所へ行つて、ごろりと横になるのが癖でした。

「もし、あなた」或日の事、妻の猪が夫の所へ來て申しました。

「うちの坊やは、へんですね。」

「なに？へんだ、何が變だ？」

「だつて、色が妙に生白いちやありませんか。」

「生白くたつていゝぢやないか。御覧。森中の猪の子で、うちの坊やはどの標緻よりは無いからね。」

決心がつきません。

「どうしたの、どうしてやらないの？」

「だつてこはいんですもの。」

「怖いなんて云つてる所ぢやないぢやないか……併し、まア、崖落しが嫌なら後でする事にして、今

度は水泳ぎを教へてやらう。さア、おいで。」

「いや、水泳ぎは冷たいから厭！」

「水泳ぎも厭だつて？ちや、お角力か。」

「お角力は痛いからいや！」

「困つてね。ちや一體、何がいの？」

「嫌、お腹が空いたの。」

お父さんは困つてしまひました。併し、子供に甘いものですから、無理に教へる事も出來ずに、すぐと家へ歸つて來ました。

五

それから四五日経つた或日の事、猪の一家は山の

麓にある親類へ、およばれに行く事になりました。
お父さん猪は脊廣に烏打帽、お母さんは黒琥珀の
バラツルをさし、坊やは水兵服を着せて貰ひまし
三人は丁度、明神様の傍の、もと坊やの生れた豚
の家の傍を通りかゝりました。
お父さん豚とお母さん豚とは留守でしたが、二十
何人と云ふ子豚たちは泥の中で、盛んにこね廻して
ゐました。或る者は泥の中に鼻を突入れて、ぶう、



ぶう、と云つてゐました。又或者は尻ッぽを振りな
がら、お甘藷の屑を嚙つてゐました。
『坊や、一寸あれをもらん。』
猪のお父さんはスタツキの先で、その有様を指し
ながら、

『あれは豚と云ふものだ。私達が働かないで遊ん
でばかり居ると、あんなになつてしまふのだよ』と
云つて聞かせました。丁度其時、子豚の一人が眼早
く坊やの姿を認めて叫びました。

『やア、秀坊が歸つて来た！ あれ、ごらん。あんな
服なんか着て。やア、秀坊。早くおいで、早くおいで。』
皆んなもそれと知つて、口々に、

『秀ちゃん、秀ちゃん』と呼びたてました。

秀坊は立止つて、ちいッとその有様を見つめて居
ましたが、突然何と思つたか、自分の水兵服を脱ぎ
棄てると、大急ぎで豚のお家へ駆け込んで行しまし
た。そして、いきなり溝泥の中にすてん、と轉がり

やら、大騒ぎをしました。

猪の夫婦の驚きは、まア、どんなだつたでせう。
暫くは何も云へずに、ぼかーんとして其處に突立つ
て居りました。

x

x

x

x

『お前がいけないんだ。お前がお祈りしたもんだ
から、あんな豚の子なんか来たんだ。』

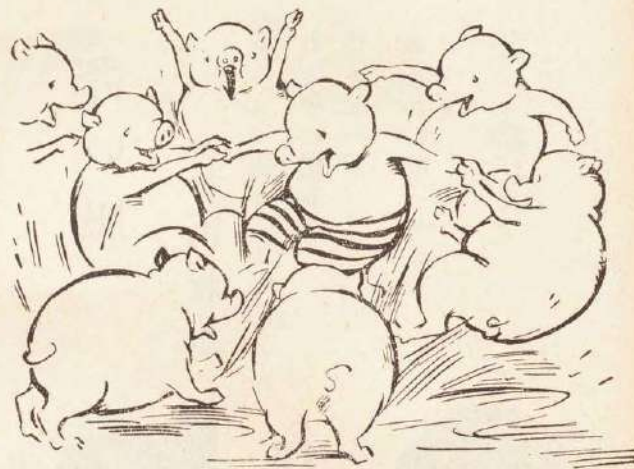
『あら、あんな事云つて、貴方は、あの兒が来た時、
(これは俺がお祈りして貰つたんだから、俺の兒だ)
ッて仰しやつたぢやありませんか。』

『うそだ。』猪の夫婦は歸り途にこんな事を云ひ
乍ら争ひました。

『併しね』

暫くして夫が云ひました。

『あの兒にして見れば猪の所へ来て、色んな事を教
へこまれるより、やつぱり豚らしく、あゝやつて居
た方が幸せかも知れないよ。』(をばり)



ました。『やア、秀坊が歸つて来た！』
皆んなは大喜びで、泥どかけるやら、耳を引ける

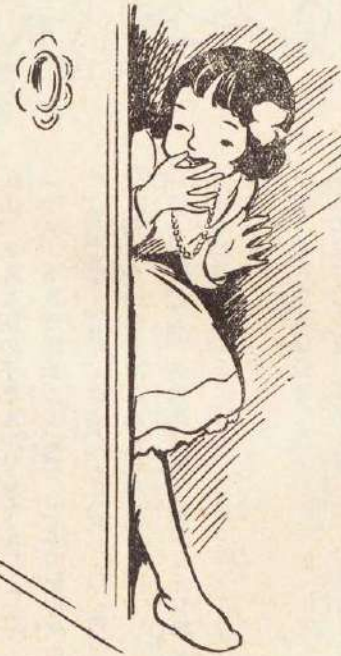
青い服

若山牧水

あゝをい服うき着て

あゝかい顔かほして

ちよいちよい



覗くは誰たれでせう

あゝをい服うきあゝかい顔かほ

あゝをい服うきあゝかい顔かほ

あゝあ

解つたまさ子さん

子供の名ばそれぞれに



動物愛護日

奥山晃一



五六

米太の家には、白兎と雞を飼つてゐました。白兎は雄と雌とで二匹居ります。どちらも白い毛が艶艶しくて、赤い眼をしてゐました。ものを食べる時の口元が可愛いと云つたらありません。

雞は小さなちやばが三羽つがひ居りました。雌は羽の色が黒許りでしたが、雄は赤い羽も交つてゐて、大變立派なものでした。

米太は毎日、雞に餌をやつたり、兎と一緒に遊んだりして、愉快に暮してゐました。その中にも彼は兎と追つかけてをしたり、雞を肩の上へ止まらせたりすることが好きでした。兎も雞も米太にはよく馴れて、何でも云ふことを聞いて、いろ／＼な應當を覺えました。米太は兎や雞が自分の體よりも可愛い位、よく可愛がつて世話をしてやりました。雞のとなは家の軒でしたが、兎の小屋はお隣の

垣根でした。そこはよく陽が當るので、晝の間は雞も出て遊ぶところになつてゐました。

米太のお隣は達吉の家でした。達吉の家には雌犬が一匹とカナリヤが二羽ゐました。犬はイギリスから來た、セツターと云ふので、非常に立派なものでした。これは達吉のお父様が、澤山なお金を出して買ったもので、獵もよく出來るし、力も強かつたのです。

カナリヤは小さな可愛い鳥で、朝障子の外から鳴きながら達吉を呼び起して呉れました。犬の小屋は米太の家との境目の垣根に、白兎の小屋と背中合せをしてゐますし、カナリヤは籠に入れて軒へ下げたり、縁側へ置いたりしてありました。

達吉はどちらも可愛いので、半日はカナリヤの傍で、その唄ふ聲を聞いて縁側に寝轉びながら、繪本を見たり歌を唄つたりして遊び、半日は犬を連れて散歩に出かけました。さうして駆けつゝをしたり溝を飛び越えたりして、面白く遊び暮しました。

二

二人はお互の家へ、さう云ふ友達が出來てからは一緒に外で遊ぶと云ふことはなくなりました。垣根越しに時々話をする位のものでした。

その中に米太の家の兎が、仔を四匹産みました。米太は大變な喜びで、その小さな／＼の兎の仔が、早く大きくなればよいなどと思つて、いまいでよりも楽しみが多くなりました。さうして小屋が手狭まのを見て、急に少し擴げてやりました。その時、お隣の達吉が、

『やあみんなで四匹だ。いゝやつが産れたよ！』と大きな聲で叫びました。覗いて見ると、それはいま犬がお産をしたところなでした。

『達ちゃん、僕の家の兎も一昨日四匹仔を産んだよ。』

米太は垣根の隙間から一寸顔を覗いて云ひました

『おやさうかい。僕の家も産んだよ。ほうら綺麗だらう。第一この犬は毛の色が馬鹿によく、鼻がよくきくし、その上駆けることにかけたら、君の家の兎公よりも屹度早いよ』

達吉が嬉しまさげに自慢を云ひました。これを聞くと米太も負けずに、

『いや何と云つても僕の家は兎は、足が短くてよく走れるんだからね。それに毛の艶と云つたら、まるで銀のやうに光つてゐるんだ。丁度眼の色がよく熱れた櫻實のやうに可愛いんだもの。見たところ犬なんかより、兎の方が賢いさうだね。』

と云ひました。二人は夢中になつて、各自の友達を褒め始めました。さうして二人共それに氣を入れてゐる内に、いつか云ひ争ひをして別れて了ひました。

『何んだ兎公のくせに……』
『犬の畜生がつまるもんかい。』



もう少しのところで、二人が組打ちを始めるところでしたが、二人共その可愛い友達を足元にゐるのに氣がつくと、急に笑顔になつて、云ひ争ひを止めて了ふやうになりました。

三

ある日のこと、米太は餘り家に許り置いてゐるのが可愛さうになつたので、お晝過ぎから兎公を連れて原へ運動に出かけました。仔兎は残して親兎二匹だけを連れて、原へ来て見ると、達吉はいつものやうに、向ふの丘の邊を犬と一緒に走り廻つてゐました。

米太の來たのを見ると、達吉は

『やあ米ちゃん、珍らしく兎公を連れて來たんだね。いつもお家に許りゐるから、もう走れさうぢやないね。』

と聲をかけました。米太はいつも自分の兎を達吉

から馬鹿にされるので、口惜しくて堪らなくなりました。そこで遂々、

『達ちゃん、どちらがよく走るか君の犬野郎と、僕の兎の競争をやらせやうぢやないか。』

と云ひました。

『よからう。今から直ぐやらうよ。』

と達吉も直ぐに得心したので、二人はそれ／＼自分の友達に勢をつけてやつたり、叩いたり撫たりしてから、スタートのところへ並べて立たせました。

兎は久振りの運動だから、耳をびく／＼動かして嬉しさうにしてゐました。犬はこの小さな／＼した友達を、不思議さうに眺めてゐるのでした。

米太の掛聲で犬と兎は走り出しました。二人も後から駆け出しました。けれどもその勝負は、犬の方が負けでした。

『兎！ 兎！ 白兎！ お前は偉いぞ。ねえ達ちや

ん、僕の家うしの兎うさぎがよく走るときがこれで解つたらう。」
と米太は嬉しさを抑へかねて、大聲で叫びました。
達吉は疲れた犬をいたはり乍ら、泣き出して丁ひま
した。

それから暫く経つてからのことでした。達吉の家
の犬が病氣びやうきして、餘り食物も食べられなくなりまし



た。達吉の心配は一通りではありません。まるで自
分が病氣かなぞのやうに、一日中犬の傍へつきゝり
で介抱しました。終ひには達吉の顔色が悪くなつて
少しは體も疲れたやうでした。達吉は犬が病氣した
のも、この間の兎との競争に負けたから、そのため
に心を痛めてさうなつたのだらうと思ひました。そ
れですら面白さうに遊んでゐるお隣の兎を、垣根
越しに眺めては口惜しくてなりませんでした。
達吉のお父様は、犬が病氣になつてから、仔犬四
匹ともみんな他の家へやつて丁ひましました。達吉は一
層寂しく思ひました。

四

夕方になつて、米太は兎をみんな小屋に集めやう
として、追廻してゐました。すると親兎の雄の方が
一匹垣根をくゞつて、お隣の庭の方へ飛んで行きま
した。米太は仔兎に氣を取られてゐて、それを知ら



ないでゐました。お隣の庭へ行つた兎は、何だかい
香かおりがするのでひよいと傍を見ますと、牛乳を澤山

かけた飯が犬小屋の直ぐ傍に置いてありました。
それを見つけると早速「御馳走になるかな」と云
つた風に、耳を動かしながら食べ始めました。病
氣の犬は、自分では食べたくないのに、兎が自分の
食物を急がしさに食べてゐるのを、ちつと見てゐ
ました。達吉が庭へ出て見ると、犬小屋のところへ
お隣の兎がやつて来て、犬の御馳走を食べてゐるの
で、真紅な顔をして腹を立てました。狼狽して逃げ出
さうとする兎の耳を、飛びかゝつていやと云ふ聲吊
し上げました。兎は一生懸命にもがくし、犬はこの
騒ぎにくん／＼と泣きます。

米太も垣根越しにこれを見て、驚いて丁ひましました。
『米ちゃん、君の家の兎公はひどいよ。病氣の犬の
食べものを、すつかり盗んじやつたんだ。』

達吉はもう口惜しくて仕方がないので、お母様のお花を切る鋏はさみを持つて来て、兎の耳をちよん切つて
終ひました。米太は急いで垣根をくゞつてそこへや

つて來ました。

『おい達ちやん、いくら何でもご飯を食べた位にそんなことをするのはひどいよ。』

『構ふものか、こんなお行儀の悪い兎公なんか。うんとこんな時に罰を加へてやらなくつちやね。』

達吉、氣持よさうに笑ひました。米太はいつか悲しくなつて、耳をちよん切られた兎を抱きかゝへて泣きながら歸りました。

二三日すると、達吉の家の犬は病氣がすっかりよくなりました。達吉は喜んで犬を庭へ出して、久振りに面白く遊ぶことが出來ました。

二人は段々遊びに氣を入れて、夢中になりました。達吉が犬の前足へ細引をつけて、一生懸命駆けさせて置いて思ひがけなく、その細引を後へ引くと、犬はくるつとひつくり返つて悲鳴をあげました。達吉は手を拍つて笑ひこけます。

その遊びを繰り返へしてゐる中に、ふとしたはず

みで犬は達吉の手から、細引をふり離して勢ひのついたまゝお隣の垣を飛び越えて了ひました。それがあまり見事だつたので、達吉は尙嬉しくなりました。

五

お隣の庭へ入つた犬は、ざれてざれて、ざれ廻りながら雞を追つかけてゐましたが、やがて一羽の雌雞の首のところに啣へて、やたらに振り廻しました。雞は悲鳴をあげました。米太が飛んで來て犬の細引を掴んでも、犬は雞を離しませんでした。そこへ達吉も急いでやつて來ました。

『一寸この細引を持つてゝ呉れないか。』

米太はさう云つて、達吉に犬を渡して置いて、物置きから太い棒を提げて來ました。さうしていきなり犬の前足を、力一杯振りつけました。

犬は一度に雞を離して了つて、大きな聲をあげて、それは／＼悲しさに泣くのでした。

『行儀の悪い犬なんか、こんな時にうんととつちめてやらなくてはいけないんだ。ねえ達ちやん。いつかの兎を君がやつて呉れたから、その代りに今日は



犬に罰を加へてやるよ。』

と米太は云ひました。犬の離した雞は首が曲つて、あえぎ／＼息をしてゐました。

それから後と云ふもの、お隣同士の兎や雞や犬は、毎日のやうに二人にいちめられて、みんな醜い片輪者になつて了つたのであります。米太の可愛い兎はみんな耳をちよんぎられ、雞はみんな首曲りや、びつこになりました。

達吉の可愛い犬は、片眼潰され、片足びつこになつて了ひました。それでも二人は意地張りですから未だ喧嘩をやめませんでした。

ある日のこと、脊中合せの兎と犬とが喧嘩を始めました。米太は兎をけしかけるし、達吉は犬をけしかけました。

やがて犬は暴れ狂つて、とう／＼垣根をこはして大きな穴を明けて了ひました。犬は勢ひづいて兎の小屋へ暴れ込んで、兎の仔達を踏むやらけるやら『うをう！うをう！』と叫びながら、四邊の仔兎をみんな殺して終ひました。

さうして今度は雞をめがけて飛んで來ました。

雞は『けい、い、い』と叫びながらばつとたちあがつたり、駈け廻つたりして逃げました。犬はそれを面白がつて、びよん／＼はねながら追つかけると云ふ有様です。まるで牛若丸と辨慶の戦のやうに、雞は飛び上り、犬は吠え立てると云ふ騒動になつて了ひました。その中雄雞はどうかしたはずみに、犬の片方残つてゐる眼をつゝいて、潰してやりました。それで犬は全くの盲目になつたのです。

この騒ぎにまぎれて、親兎達はお隣へ逃げて行きました。それを見つけた達吉は、兎を掴まへてひどい目に合せてやらうとして、庭中追ひ歩きました。けれども兎は、敏捷で中々攔りませんでした。その中に一匹の方の兎は、縁側へ上つて行きましたがそこに置いてある鳥籠に目をつけて、一寸の間は口を動かして考へてゐましたが、籠の戸口をぐつと頭で持ちあげました。

耳を切られた白兎を見て驚いたカナリヤは、悲鳴

取りかへてすぐ／＼家へ引きかへしました。

耳のない兎を抱いた米太と、盲目でびつこの犬を連れだ達吉は初めて夢が覺めたやうに、自分達の片意地を満足させようとして、可愛い友達をいたためてゐたことに気づきました。二人共『つい気づかない中に悪いことをして了つた』と心の中で呟きました。不具者になつた犬や兎は、毎日悲しうな顔をして泣いてゐました。米太も達吉もその泣聲を聞いてゐると、自分達も悲しくなつてしく／＼と泣き出して了ひました。何とかしてお友達を治してやりたいと思つたのですから、今度は二人で相談してお父さんやお母さんにお願ひして、お醫者を呼んで親切に診て貰ひました。その後、二人の仲がすつかりよくなつて、毎日一緒に遊ぶやうになりました。

ある日二人が遊びに行つて外から歸つて來ると、お家の前に一匹の痩せこけた野良犬が、病氣になつたものと見えて死にかゝつてゐました。二人は可愛

をあげながら開いた戸口からみんな逃げ出してすひました。達吉が來て見た時には、兎は二匹共鳥籠の中へ入つてちつとしてゐました。達吉がいくら追つても、兎はお願ですからもういちめないで下さい。どうぞこゝへ置いて下さい。とても云ふやうに、達吉の方へ哀れみを乞ふ眼つきをして逃げ出しませんでした。そこで達吉は兎の入つたまゝ、鳥籠を下げてぶつぶつ云ひながら、お隣の方へ出かけて行きました。すると垣根のところへ、米太も盲目の犬が、雞をくはへたまゝ連れて來てゐます。二人はうんと相手を云ひこめてやらうと思ひましたが、

『この通りだよ。兎公はカナリヤをみんな逃した。』と、達吉が云へば、

『それが何だい。犬の野郎、兎の仔をみんな殺した上に、雞までこの通りだ。』と米太も云ひました。双方の友達と同時に悪いことをしたので、二人はそのまゝ何も云ふことが出來ません。黙つて犬と兎を

さうに思つて、その野良犬を家へ連れて來て、垣根の小屋へ入れて大事にして置いてやりました。兎も犬もお醫者にかゝつてから大分よくなつたので、それからは二人共お友達を可愛がる許りでなく、蟲毛等一匹ひといい目にはしませんでした。

犬も兎も米太達が急に心を入れ換へて、可愛がつて呉れるやうになつたので、大變よろこびました。それから二人は垣根の小屋を一つにして兎も犬も一緒に飼ふやうになりましたが、犬や兎は大變仲がよく米太達とも睦じくなりました。

その後二人が學校へ行くやうになつてから動物愛護日と云つて、

『皆さん生きものを可愛がつてやりませう』と書いたビラを持つて、犬や兎達と一緒に二人は日曜日に

なると街の中を配つて歩いて遊びました。

兎も犬も一年一年と仔を産んで、大變大勢仲間が殖えて楽しく面白く暮しました。(をばり)

概梗、の(てま號、前)篇長

山の少年 二の長篇は紀州の山の中に育つた三人の少年の物語です。三人の名は、信次、孫四郎、善太といひました。三人はいつも遊び友達で楽しく暮らしてゐましたが、仲間の善太が、今度皆なに別れて、樺太の見習いに行く事になりました。孫四郎も信次も別れを惜んで、その日は一日、三人して山の中で遊び暮しました。いよいよ今日は、善太が山の本拠小屋へ行くこととなつたので信次と孫四郎が見送つて行きました。ところが途中で鹿に出遇つたのです。鹿は犬に追はれながら山を一目散に駆け下りて来ましたが、逃げ路を失つて洞の中へ逃げ込みました。三人がわあ／＼騒いでゐるところへ、信次のお祖父さんに當る奥兵衛爺さんが来て、鐵砲でもつて、巧く鹿を打ち殺しました。やがて、三人はまた善太を送つて山を登つて行きました。河童の話などをして、三人は大元氣でした。途中、川瀬を見つけたらして、三人が道草をしい／＼行きますと、山の本拠小屋から善太を迎ひに来た若者に出會つたので、い／＼／＼で別れました。信次と孫四郎とが、すこ／＼歸りかけると、その時、しよにゐた愛犬の白が、けた／＼／＼吠え出しました。何事かしらと見ると、大きな猪が現れて、今や白と猪とは大血戦中です。信次と孫四郎はびっくりして樹にかけ上りました。その内に獵人の新之助が来て、ドンと一發で猪を射止めたが、その時には既に、白は猪の牙にかゝつて、あへない最後を遂げ／＼了しました。

十五少年漂流の語 濠洲にニューギランドといふ島があります。この島にオーランドといふ市があつて、そこにチエイマンといふ學校があり、島中休暇には二ヶ月の休暇があるので、この學校に通學してゐる十五人の少年が集つて船でニューギランドを一周しようといふことになりました。で、い／＼／＼船の準備が出来、大勢大人も乗組んで明日は出帆しようといふ前の晩、ヤックといふ少年の惡戯のために、大人が一人も乗らない内に陸を離れてしまひました。明日は出帆しよ太平洋の中を波の間に流されて、遂に或る無人島に流れ着きました。こゝで助け船の来るのを待つてゐる内に二年とたつて了ひました。その内に思ひがけなくこの島へ流れ着いたといふケートといふ女に出遇ひました。この女の話で惡漢が大勢島へ流れ着いてゐることを知つて、一同は非常に驚き、惡漢の居處を知るために大きな風を作り、それに乗つて空中から偵察しようといふ事になりました。しかし、誰がこの危険な風に乗るかといふことが大問題でした。ところが勇敢にも、ブリアンといふ少年が、自分から進んでこの危険な風に乗つて、空中から敵艦を偵察しました。と、二三里向ふに焚火を見つけたので、これこそ敵の居處であるといふことが分つたのです。それから數日後のひどい嵐の晩でした。外でズドンと一發銃聲がしたので、驚いて一同が身構へると、一人の男が飛込んで來ました。それは惡漢のところから逃げて來た二等運轉手のイバンスでした。少年達はこの男から惡漢達の様子をこのやう聞きました。

枯れ葉 (推選)

臺灣 日 高 紅 椿

いつの間にやら
冬が来て
から／＼ 枯れ葉が
皆枯れた
はやく花咲く
春が来て
花咲爺さん
花たもれ





童 謠

野 口 雨 情 選

(大人篇)

かへらうよ

東京市 長谷川 覺

かへろがなくから

かへらうよ

片丘すゝき

青すゝき
あざみの花も
夕焼けた

酔川の橋

山形縣 山口 喜市

酔川の本橋
だあれが渡る
朝は鳥が
二羽三羽

おひるはおひるで

日はかんかん

猫が一匹

通つてつた

日暮れは夕やけ

芳の葉ゆれて

鈴森探しの
子が二人

下駄投げ

大阪市 田井 美春

なげてもなげても
下駄なげは
あしたは雨か
うらばかり

表通りに

みんなして

なげてはなげる

下駄なげの

呼ばれてかへる

日の暮れを

からす

東京市 佐藤よしみ

母さん呼んで
なく鳥は
なく鳥は
四つでねんねの
おとゝ鳥

だまつて

だまつて

とぶ鳥は

七つでおとなの

おにさ鳥

雨乞まつり

香川縣 坂出附屬校 薊

雅

トントコノ

地藏様まつり

あーかい焚火だ

雨乞さんだ

かわいた道路の

ほこりが赤い

トントコノ

地藏様へまゐろ

こい松しよつて

雨乞さんだ

後の小簀の

笹の葉赤い

歸らんしよ



夕やけ

横須賀 水島 一景

夕やけこやけ
赤い雲

どこからあの雲

きたのだらう

お里の空の夕やけの

雲もあのよに

赤かつた

雨はれ

仙臺市 冬木

雨が霽れたと

這つて出る

黙つてこつそり

かたつむり

この葉にあの葉に

這つて出る

六九



天狗の失敗

七〇

原田 謙次

一 昔、或る田舎に芳造といふ男がゐました。

この男は村人の中で頭のよい方で、皆よりも読み書きの出来るのが自慢でした。そして他の者が何か讀んだり書いたりしてもらひに來ますと、『なあんだ、これ位のものが讀めないのか。』とか、『なんだ、それ位のことを書けないのか。』といふやうな風で、相手を馬鹿にするやうなところがありました。それで、皆は芳造の才能を認めてはゐても、彼を尊敬する氣にはなれませんでした。

芳造の方でも、益々皆を馬鹿にしましたので、皆

に尊敬されないばかりでなく、嫌はれ憎まれるやうになりました。

さうして、彼は次第に皆から遠ざかり、皆は彼を除け者にしました。

芳造は一人で、いろ／＼な書物を讀んで益々物識りになり、自分では大へんな學者のつもりで氣取つてゐました。

しかし、彼の讀む本といふのは、大した學問の書物ではなく、主に武勇傳で、彼の知識はすべてそれから出て來るのです。

記憶力の強い彼は、書物のあちこちを讀んで暗誦してゐました。

三十二貫目の鐵の棒を自由自在に振りまはした人は日本に三人しかないとか、宮本武藏が佐々木岩柳に足を拂はれた時には、何尺何寸何分飛上つたとかいふことを、彼はよく知つてゐました。

とりわけ彼の興味を有つたのは天狗についての話

でした。

彼は、天狗をお化や獸だなどとは考へませんでした。人間が修業を積んで成つたものだと思ひました。

そして、天狗になる方法を種々と研究しました。

芳造は、武勇傳の主人公達を大へん崇拜しました。

しかし彼は自分がとてもそんな武術の達人になれないことを知つてゐました。

彼は身體も小さく力も弱く、また實際、臆病でもありました。

彼は、いつそのこと天狗になりたいと考へました。天狗になることに成功しなへするならば、自由に空中を飛び廻ることも出来、力も自然に生じ、武術もうまくなるに違ひないと思ひました。

そして彼は、自分が天狗になつて、平生自分を嫌つたり憎んだりしてゐる皆を、ひどい目にあはしてやらうと思ひました。

そこで彼は、天狗になる法の中で一ばん、くであ
りさうな、七日間斷食して高い樹の上に登つてゐる
方法を取ることにきめました。

彼は村から數里距つた町の親類の方へしばらく行
つて來ると皆に吹聴して、村から姿をかくしました。
そして實際、一先その町の方へ行つて、芝居で
使ふ天狗の面や衣裳や羽團扇などを買つてそれらを
身につけ、夜中にそつと自分の村に歸り、村はづれ
の道ばたにある大きな松の樹の上の方の枝に攀ち登
りました。

お面を冠つたのは、ほんたうの天狗に成つてしま
はない中に、もし人に見出されては困ると考へたか
らでした。

二

天狗の面や衣裳を着けた芳造は、松の樹の高い枝
の上にちつと止つてゐました。

さうしただけで彼はもう、自分が半分位天狗にな
つたやうな氣がしました。

夜が明けました。

鳥が飛んで來て彼の近くの枝に止らうとして、彼
に氣が付き、驚いてはかの樹へ逃げて行きました。

畑へ出る村の者が見えはじめました。

芳造は天狗面の眼の穴から下界を見下しました。

『お、陳平の奴が馬を曳いてやつて來るわい。』
芳造はさうつぶやきながら、やがて松の樹の下を

陳平が通り過ぎようとする時に、

『エヘン、エヘン。』と樹の上から咳拂をしました。

けれども、陳平にはそれが聞えなかつたのか、仰
向きもしないで行つてしまひました。

『村の奴等は、今におれが天狗になることなんか夢
にも知らないのだ。あいつ等はどんなに天狗を怖は
ることだらう。』

芳造は天狗の面の下ではゑるみました。

路を通る者は誰も、樹の上の天狗に氣が付きませ
んでした。

芳造は皆に見つかつては困るやうな、また見つか

成りかけの芳造はお腹が空いて來ました。

しかし彼は我慢をしました。

『七日間の辛抱ちや。七日斷食すれば天狗に成れる



らないでもつまらないやうな氣がしました。

さうかうして、日の暮れかかつた頃には、天狗に

のだ。』

夜が更けますと、天狗志願者も眠くなつて來まし

た。

斷食のことは書物に書いてあるけれど眠つてはならぬとは書いてないから、眠るのはかまはないと芳造は考へました。

そこで、落つこちないやうに身體を帶で枝にくくりつけて眠りました。

翌日になりますと、ます／＼お腹が空いて來ました。けれども芳造は我慢をしました。

「あと六日間の辛抱ちや。あと六日の斷食で天狗に成れるのだ。」

さうして、二日過ぎ三日過ぎました。

すつかりお腹が空いてしまつて、もう、飢ゑを我慢することよりはかには、なんにも考へられなくなりました。

とう／＼六日目まで我慢して來ました。

芳造はもう殆んど、枝につかまつてゐる力もなくなりましたので、眼の覺めてゐる時でも夜と同じや

三

天狗の芳造は、下から投げ上げた梨を、ボールを受取るやうにして二つ取ると、『もう善い。』と言ひました。

そして、さう言はれて大變喜んだ男が、散らばつた梨を籃の中に拾ひ入れて擔いで行つてしまふのを見送つてから、芳造は、天狗の面を脱して梨に噛みつかうとしました。

その途端、彼の呼近くで、『斷食を忘れたのか。あと一日の辛抱ちや。』といふ囁きが聞えました。

芳造は、はつと驚いて、握つてゐる梨を落つことしさにした位でした。

しかし、彼のひもぢさは、梨を見て以來、ことにそれを自分の手に取つてからは、前の幾倍も激しく、たまらなくなりしました。

うまさうな果實の匂は天狗志願者の靈魂をすつか

うに、身體を樹に縋りつけたのでした。

そのやうな六日目の夕方のことでした。

元氣がなくなつて、ばんやりとしか見えなくなつた芳造の眼にふと映じたのは、路を通つて行く男の籃の中に甘さうな梨が一ばい満ちてゐるのでした。

『おいおい。』と思はす大きな聲で芳造は呼びかけました。

下の男は驚いて聲の方を仰ぎ見ますと、またびつくりしました。

高い樹の上から恐ろしい天狗の顔が、下を睨みつけてゐるのですもの。

『きやあッ——』と悲鳴を上げて引つくりかへつた拍子に、投げ出してしまつた籃を捨てたまま、逃げ出さうとしました。

『こら、こら、逃げるな。命は助けてやる。そのかはりにその梨の大きいのを擇んで此處まで投げ上げろ。』と天狗の聲が言ひました。

り迷はしました。

『あと一日の辛抱だ。』といふ考と、食物の誘惑とに板ばさみにされて、しばらくの間芳造は悩まされました。

そして、その揚句、彼は自分に都合のよいことを考へ出しました。

それは、二つの梨を一時に食べてしまはないで、一つであと一日我慢すると、半分斷食したことになる。それで、あともう一日を梨一つで我慢すると、最初から八日になるが、終りの二日は半日づつのわけになるから、それで丁度七日の斷食になるといふのでした。

『これはうまい考だぞ。こんなうまいことを考へ出すとは自分ながら驚いた。これはもういくらか天狗になつた證據かも知れない。』

芳造はさうつぶやきながら、梨をかじりはじめました。

一つ食べてしまつて、芳造ははつと息をつきました。彼はもう一つ食べたかつたのですが、やつと我慢しました。

そして自分の思ひつきには少しも間違はなく、斷食を破つたことにはなつてゐないと信じました。

梨を食べたために、七日のを八日、かうしてゐなければならなくなつたものの、明日もまた残りの梨が食べられると思へば、一日位延びてもかへつて平氣になりました。二日経つと天狗になれるのだと考へると、芳造はうれしくてたまりませんでした。

天狗になつて一ばん愉快なことは、空中を自由自在に飛び廻れることです。そのことを考へて、芳造はそつと自分の肩のあたりを撫でて見ました。しかし、羽らしいものは手に觸れませんでした。

『もう六日も経つたのだから、かなり羽も伸びていい筈なのに、ちつとも生えて來ないのはどういふわけだらう。それとも、斷食の日數が終つてから、は

じめて生えて來るのか知ら。』

芳造は飛ぶことばかり考へてゐて羽の事については研究をしてゐませんでした。この時はじめて自分の肩に生える筈の羽のことを考へ出したのでした。

さうすると、今まで少しも羽の生えて來ないのが心配になりかかりました。

『飛んで廻るから羽があるやうに思つて續などには天狗の羽を描いてあるけれども、ほんたうは羽なんかなくとも天狗は飛べるのかも知れない。羽のかはりに羽團扇を使ふのではあるまいか。』などと、芳造はそんなことも考へるのでした。

四

梨の籃をかついで逃げた男の話で村中は大へんな騒ぎになりました。

松の樹の上に天狗がゐたといふことがそれを信ずる者と疑ふ者との間にやかましく論ぜられました。



『論より證據、行つて見ようぢやないか。』と言ふ者があつても、誰も行かうとは言ひませんでした。

『もう日暮れだから明朝にした方がよからう。』

『明日になつたらゐなくなるかも知れない。今すぐに行つて見よう。皆が來ないならおれが一人で行くよ。』さう云つて銀平といふ男が先に立つて行きかかりました、止める者もありましたが、また、梨を二つ取つただけで別に亂暴なことをしなかつたところを見ると、おとなしい天狗かも知れないから、何か御馳走でもすると言つたら悪いこともしないだらうなどと考へて、後について行く者もありました。

天狗を見に行く人數が一人殖え、二人増してだんだん大勢になりますと、しまひには、一ばん怖がつてゐた者まで後について、村中の者が例の松の樹の下まで行きました。

もう日も殆んど暮れてしまひ、鬱蒼とした松の老樹を仰ぎ見ても、天狗の姿は見えませんでした。



『もしく天狗様。天狗様。』と一人が呼びました。
 『なに？ おれのことを呼ぶのか。と樹の上から聲がしました。皆は思はず二三歩づつ後退りました。
 『おれを呼ぶなら先生と言へ。』とその聲が続けて言ひました。『天狗先生。大先生様。』と皆が口をそろへて言ひました。

それを聞いた天狗の芳造は内心甚だ満足でした。
 『先生』と呼ばれる事は彼の大きな願の一つでした。
 皆は天狗に向つて、どんな御馳走でもするから、どうか村の者に害をしないやうにしてみらひたいと頼みました。それから或る一人が言ひました。
 『話に聞きますと、天狗先生は空中を飛べるといふことですが、ほんたうですか。』

『ほんたうだとも。』と樹の上の天狗は答へました。そして、皆が、今日は日が暮れて見えないから明日飛んで見せてくれと頼みますと、『明日までまだ駄目だ。』と言つて天狗の芳造は、まだ天狗に成りきれな

いからと言へないことに氣がついて、『病氣で少し身體の具合が悪いから明日までまだ駄目だらう。明後日なら飛んで見せてやる。』と言ひました。

そこでその約束の日、——芳造が松の樹に登つてから九日目の朝は早くから村中の者が樹の下に集つて、天狗の飛行を待ち受けました。

芳造は、皆に天狗先生、大先生と言はれてもうすっかりほんたうの天狗に成つたつもりになりました。

羽はその時まで生えて來ませんでしたけれど、彼は羽團扇を使つて飛べるものだと思ひました。

皆の拍手に迎へられて樹の上の天狗は飛びましたしかし、鳥のやうには飛べないで眞下の地面に落ちて氣絶してしまひました。

やがて芳造は息を吹き返しました。天狗の面の高い鼻が折れただけで、芳造の鼻は無事、身體は怪我もありませんでしたが、彼の心の天狗鼻はその時折れてしまひました。(をばり)



幼年詩

若山牧水選

せみ(賞)

山梨縣多
磯村 哮

みんな

だまつてきけ

みんなみんせみが

山でないてるぞ

評 この號令に従ふものがあ
らうか、何といふ力強い
口調だ。(牧水)

ばんがた(賞)

山梨縣多
宮崎 清

丸いから

丸いぶどうも

上げました

評 可愛い調子の歌ですこ
と。(牧水)

工場のらうか

坂出新通 小林 崇文
町尋三

しんかんとした

こうばのらうかに

まばゆいほどの

夕日の光

學校がへり

高崎市元 佐竹金次郎
紺屋町 (十五歳)

學校がへりの

一年生

かさをまはして通る

つゆが光りながら

ぶいぶいとぶ



雨

山梨縣多 興永 晴
麻校尋三

雨はざん／＼ふつてゐる

一人からかささしていく

一人ばつちであそびいく

雨はざん／＼ふつてゐる

一人からかささしていく

一人ばつちであそびいく

雨はざん／＼ふつてゐる

一人からかささしていく

一人ばつちであそびいく

雨はざん／＼ふつてゐる

一人からかささしていく

一人ばつちであそびいく

雨はざん／＼ふつてゐる

一人からかささしていく

一人ばつちであそびいく

雨はざん／＼ふつてゐる

一人からかささしていく

一人ばつちであそびいく

雨はざん／＼ふつてゐる

一人からかささしていく

一人ばつちであそびいく

雨はざん／＼ふつてゐる

一人からかささしていく

一人ばつちであそびいく

雨はざん／＼ふつてゐる

一人からかささしていく

八〇

大きなのが

今も思ひ出される

評 斯んな記憶は私にもある
(牧水)

つゆ

埼玉縣寶 平野 慎吾
珠花村

手にうつしたら

つゆは

もう光らなかつた

評 また草の葉にお移しな
さい。(牧水)

十五夜

甲府市相 豊島 泰
生校尋六

十五夜お月さん

丸いから

丸いおだんご

上げました

十五夜のお月さん

十五夜のお月さん

若狭國高 久富 君代
濱校尋六

去年

ばあさん

ぐみの枝

一本島にうゑたらば

根がつきいき／＼

してまする

さるすべりの木

香川縣水 高西 虎夫
上校尋五

にはすみにさるすべりが

赤い花をさかしてゐる

雨が降つてさむさうに

雨

若狭國 磯野 イシ
高濱校

日よりつゞけば雨ふつて

ほしい

雨ふつゞけばにくらしい

八一

證城寺の狸囃（傳説童謡）

野口雨情

證城寺の庭は

月夜だ 月夜だ

友達来い

己等の友達ア

どんどこどん。

負けるな 負けるな



和尚さんに負けるな

友達来い。

證城寺の萩は

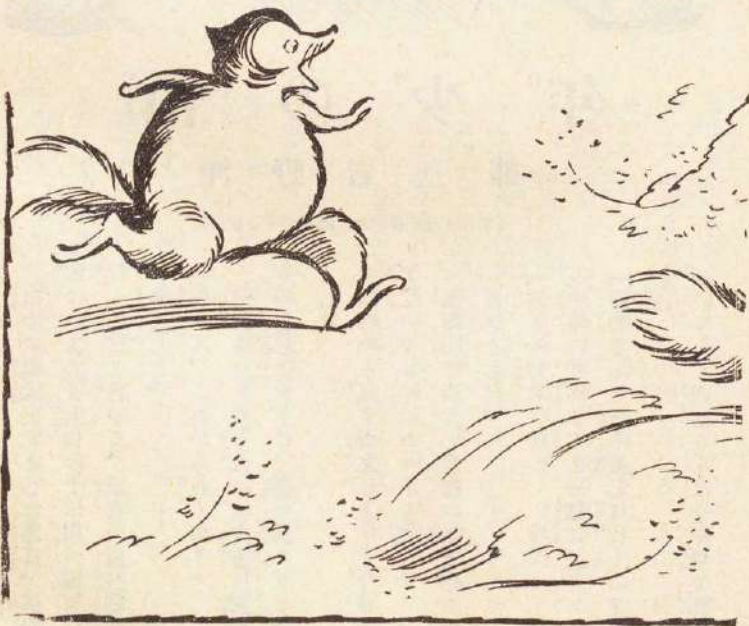
月夜に 月夜に

花盛り

己等の友達ア

どんどこどん。

（證城寺の狸囃は千葉縣木更津町に傳つてゐる
狸の名高い囃であります）





山の少年

沖野岩三郎

(前巻の六六頁にありす)

八四
白のお葬式をすました翌日、孫四郎はいよいよ大和の十津川へ嫁ぎに行くのだと言つて、信次の所へ暇乞に來ました。

「孫さん、これから行くの？」

信次はたつた一人のお友達に訣れるのを悲むやうに、顔を曇らせてゐました。

「これから直ぐ出立します。今日は丁度いゝお伴があるから。」

孫四郎は新しい襦袢の袖を撫で乍ら言ひました。

「誰と一緒に？」

「中津の卯助さんと一緒に。」

「卯助さんも材木流しに行くのですか。」

「いゝえ、卯助さんは十津川で郵便

の遞送人になるんだつて。」

話してゐる時、家の前の茶畑の所から、

「おうーい、孫さん、もう仕度はいゝかい？」と呼んだのは卯助でありました。

「はアーい、今直ぐ行きます。」

孫四郎が信次に別れの挨拶をしようとした時、牛小屋の所から顔を出した與兵衛爺さんは、

「おう、孫坊！これから嫁ぎに行くのか。それは偉い。善公は木挽に行くし、あんたは日傭稼さか。何でもいゝから、しつかり働いてお金を儲けて來るんだ。」言つて、孫四郎の頭に大きな手を一寸載せました。

「はい、二三年働いて來ます。どうぞお爺さんも、おからだをお大切に……」

孫四郎の聲は少しく頼へてゐました。

「有難う、俺はもう年寄だから、あんたの歸つて來ない前に死んで了ふかわからないが、あんたは達者

で出世してお呉れ。十津川へ行つて五年も辛抱すり

やア、立派な材木流しの日傭になれる。あんたは利

口だから、直ぐ「飛切」位にはなるぞ。」

與兵衛爺さんは、さう言ひ乍ら家の中へ入つて行つて、膳箱の抽出から五十錢銀貨を一つ取出して、

「これは俺の錢別ちや。宿賃の足しにしてお呉れ。」と言つて、孫四郎の顔の前に差出しました。

孫四郎は産れてこのかた、まだ五十錢銀貨といふものを、自分のものとして、持つた事が無かつたのです。

「まア、これを私に？」と言つて、孫四郎は、おどおどし乍ら夫れを手の平に受けました。其時茶畑の所から、

「おうーい、孫さん、早く行かうぢやないか。牛廻の峠で日が暮れると大變だよ。」と呼ぶ卯助の聲が聞えたので、孫四郎は與兵衛爺さんと信次に、訣れを告げて、悄然と茶畑の方へ降りて行きました。

「左様なら孫さん、達者で行つてお出で。」
信次は梅の木の下から伸上り乍ら呼びました。孫四郎も、

「左様なら……」と呼返しました。さうして何度も何度も同じ事を繰返してゐるうちに、いつしか二人の影は丘を右に曲つてしまひました。

「これから牛廻峠を越えるのか、少し暮れるかも知れない。」と言つた奥兵衛爺さんは、信次の方を振向いて、「信次、お前はこれから福田屋へ行つて、此間買つてほしいと言つた本を注文しておいで。あの新之助さんから貰つた二圓のお金をお前にあげるから……」

信次は奥兵衛爺さんの其の言葉を聞いた時、夢ではないかと思ふ程うれしかつたので、

「おちいさん、あのお金を私に下さいますか。」と言つて、雀躍りしながら喜びました。

其頃、村は非常な不景氣で、大の男が朝から晩ま



で一生懸命に働いて、やつと二十錢位しか儲からないのでした。そんな時に信次は祖父さんから二圓といふお金を書物代として貰つたといふ事は、本當に思ひがけない事でありました。

「あれは何といふ書物だつたかい？」

奥兵衛爺さんは優しい聲で聞きました。

「日本外史といふ本です。二十二冊で一部です。」

「夫れを十一冊だけ買ひたいと言ふんだネ。」

「はい、十一冊なら二圓で賣るのです。」

「其の本には、どんな事が書いてあるんだい？」

「源平時代から徳川時代までの歴史です。」

「ぢやア、八幡太郎や九郎判官義経の事も書いてあるんだネ。」

「あります。楠正成の事も新田義貞の事も……」

「さうか、そいつは面白い。お前が其の本を習つて來たなら、毎晩私に其の話をするんだよ。」

「ええ、します。」と言つた信次の眼の前には、褐色

の日本外史の表紙が、まぎ／＼と見えしました。

「さア、あの紙幣をあげよう。」

奥兵衛爺さんは家に入つて行つて、膳箱の抽出から一圓紙幣を二枚出して來て、信次に渡しました。

信次は叮嚀に紙に包んだ紙幣を懷に入れて福田屋の方へ走りました。走るうちにも、着物の上から何度も何度も其の紙包を押へてみました。

夫れから十日ばかり経つと、福田屋の番頭が、日本外史十一冊を風呂敷に包んで持つて來てくれました。

信次は早速其第一巻を持つて、學校の先生の自宅へ行きました。そして『平氏は桓武天皇より出づ……』といふ所から將門の亂の所まで習つて歸ると、奥兵衛爺さんは、其晩薄暗い燈火の下で、ぼそ／＼と草履を作りながら、信次の話をききました。

或晩に信次が、晝間習つて來た日本外史の保元の亂のお話をしてゐる所へ、『御免なさい。』と言つて入

つて来たのは、善太の父の興一でした。興一は懐から一通の手紙を取り出して、

「孫四郎さんから、信次さん所へお手紙が来てゐました。今、私は孫四郎さんの家へ行つて、夫れを托つて来たのです。」と云ひました。

信次は親しい友達から来た手紙でしたから、保元物語のお話を中止して其の手紙を読み始めました。すると興兵衛爺さんも、

「大きな聲で讀んでごらん、どんな事を書いてあるか、私にも聞かしてお呉れ。」と言つて草履を作る藁を引寄せました。興一も黙つて耳を傾けてゐました。

信次さん、私はあなたにわかれた時、本當にかなしかつた。おたがひは今まで、すゑぶん仲よくあそんだものだが、もう二度と、あんな楽しい日は来ないでせう。

善さんは今頃山で大きなノコギリをつかつて、木をひいてゐるのでせう。

善さんもやつぱり私と同じやうに、あなたの事を思つて、なつかしがつてゐるでせうが、あの川合山には郵便が届かないので、手紙を書く事も出来ないだらうと思ひます。

私は今日、一時間ばかりヒマがあつたので、あなたへこの手紙を書きます。

あの日、私と卯助さんとは、三つの川を渡つて、二つの高い峯を越えました。

牛廻といふ山は思つたよりも高く、道がわるかつたです。

信次さん、私はあの日生れて始めて、狼の姿を見ました。私たちが牛廻しの山の七分目程の所へ来た時、一疋の鹿が山の上から走つて来て、谷の方へ矢のやうにかけおりました。すると其のあとから、犬よりも少し大きな狼が二疋鹿を追つて走りまわりました。私たちは狼の姿を見た時、身の毛が、よだつやうに思ひました。卯助さんは私を

前に立たせて、大いそぎで山を登りました。そして行く道々で

卯助さんは枯柴を拾つて、

それをタイマツのやうに、

しばつたのを

二つ作つて、

私に一つくれ

ました。それ

はもし、狼

が来たなら、それに火をつけてふりまはす用意でした。けれども山の峠へ登るまで、狼は来ませんでした。私たち峠から二里ほど下つて、人の家が見えた時はツと安心して助かつたやうに思ひました。谷ばたの茶屋へ来て、おばアさんに聞きますと、



十日程前に旅の人が一人、狼に追つかけて、

もう少しの事で、

ころされる所であ

つたさうです。と

ころが其の人は、

狼は火を恐ろし

がるといふことを

きいてゐたので、

自分のむすんでゐ

た帯のはしに、マ

ツチで火をつけて

それをふりまはし

-15 745 32 863" data-label="Text">

乍らにげたのださ

うです。

私はそのあくる日

この日傭小屋へ来ました。こゝには四十人ほどの

材木流の日傭がゐますから、毎日四斗あまりの米

八九

を御飯にたくのです。そのお米を洗つたり、薪を拾つたりするのが私の毎日の仕事です。私は今日五錢の賃錢を貰つゝゐます。けれどもこゝで二年も、しんばうすれば、二十四五錢の賃錢を取るやうになります。

信次さん、私も毎ばん勉強してゐます。小學校で習つた本はみんなもつて來てゐます。働いてゐる四十人のうちで、一字も字を知らない人が十人ばかりあります。私はその人たちに毎ばん私の本を教へてゐます。さうすると其人たちは、私に月々一人前五錢づゝの月しやを下さいますから、私は毎月五六十錢の収入が日當の外にあります。私は昨日和歌山の本屋へ手紙を出して、金の星といふ雑誌を注文しました。

信次さん、あなたは日本外史を、おちいさんに買つてもらひましたか。私もこゝで三圓のお金が出て來たなら、日本外史を買ふつもりです。働いてゐ

る人に、日本外史の讀める人が二三人ありますから、教へてもらふつもりです。それからナショナル讀本を知つた人がゐますので、今エ、ビ、シイを習つてゐます。

信次さん、私はこちらへ來てから、もう二度もシロのゆめを見ました。あの強いシロが猪にころされたのは、かさねゝ残ねんでなりません。私は思へば思ふほどかはいさうでたまりません。私は今朝もシロの事で思つて、ひとりで泣きました。あの墓へは美しい花の咲く草か木を植ゑてあげて下さい。

善太さんから、たよりがあつたなら、私に知らせして下さい。あの人はきつと、りつばなコビキさんになるでせう。私が一人前の材木流しになつて歸るころは、もうあなたは、役場の書記さんか、學校の助教さんになつてゐるでせう。

あなたが、どんなえらい人になつても、私や善太

さんを、見すてすにいつまでもくなくして下さい。

信次さん、私はこゝへ來て、多せいの人達のお話を聞いて、いろいろの事を覚えしました。其のうちの二つ三つを教へてあげませう。それを實行してごらん下さい。

一、夜道をあくる時、化物に出あはぬマジナイは、右の人さし指で、左の手のひらに、鬼といふ字を三つ書くのです。そして夫れを握りしめてゐれば、けつして化物にあはないさうです。

二、お魚の骨が、ノドにさゝつた時は、

「ミナモトノ ヨシツネ ホネ カミクダスコト 實正ナリ ナムアビラ ウンケン ソワカ。」

と云つて、軽くノドを なでるのです。

三、小刀や、はさみで 指をきつた時は、直ぐに半紙を小さく四つに折つて、それでキズ口をオ

サエながら、
チハヤフル カミヨモ キカズ タツタ川 カ
ラクレナイニ 水クグル
とだけ云ふのです。「水クグルトハ」と云つたならダメなんです。それを三口云へば血がとまります。それは血どめまじなひです。

四、左のことばを、間違はずに三度つゞけて言つてごらん、

「ナガモチノウヘニナランダナマタマゴナナツシ
(長持の上に並んだ生卵七つ)」

「ウリウリガ ウリフリウリニキテ ウリフリ
ウレズ ウリウリハ ウリフリウリ ヤメタ。」

「瓜賣が瓜振賣に來て、瓜振賣れず、瓜賣りは
瓜振賣やめた。」

「コウヤノ ボウズガ キヤウカラ ケフキテ
ベウブヘ ボウズノ エヲカイタ。」

「高野の坊主が京から今日來て屏風へ坊主の繪

を聞いた。

毎晩四十人あまりの若い人たちが、面白い事やをかしい事を話したり、したりします。私はそれを時々お知らせいたします。

さうなら、どうぞおちいさまによろしく。

もう一つ忘れた。それはコレラが流行つても、うつらないまじなひです。

「コレラガ ハヤツテ アレハ シンデモオレ
ラハ シナヌ ナムアピラウンケンソワカ」コレ
ラが流行つて、彼らは死んでも、おれらは死なぬ」
は、は、は、今日はこれで失礼いたします。

信次がそれを讀んだ時、與兵衛爺さんも、與一も
面白いと言つて笑ひました。けれどもシロの事を讀
む時は、與兵衛爺さんも、信次も涙をこぼしてゐま
した。

「孫四郎はかしこい子ぢや。あれはきつとえらい男

になる！」

與兵衛爺さんは、信次が手紙を疊んだ時、感心し
たやうに言ひました。すると與一も、

「孫さんも、信次さんも感心ぢや。しかし善太は卑
怯者で、あれは末の見込もなにもありません。」と云
ひました。

「いゝえ、善太もなか／＼賢い子ぢや、立派な木挽
にならう。」

與兵衛爺さんは、與一を慰めるやうに言ひました。
「さア、どうか一八前の職人になつて呉れ、ばい、
が。」

與一はさう言ひ乍ら、お鈴が秋詣りに着る爲めに
買つて來た給地を抱へて、與兵衛爺さんの家を出て
行きました。

信次は日本外史の續きの話をして、與兵衛爺さん
と二人で、枕を並べて寝ました。

月日は矢のやうに過ぎて、山の少年であつた三人
は、いつしか青年になりました。其後信次は師範學校
を卒業して、村の小學校の校長になつて赴任して來
ました。或

日信次は學
校から自分
の家へ歸る
途中、大き
な椿の樹の
繁つてゐる
所を通つて
ゐると、向
ふから立派
な格の青年

年が、こちらをちら／＼眺めながら歩いて來ました。
青年は信次から一問ばかり離れた所へ來ました時、
「やア、信次さん！」と言つて、走り寄つて、いき



なり兩手を信次の肩に投げかけました。

「おや！ 孫四郎さんか……」と言つた信次は強く
孫四郎の首を抱いて、二人は涙を流し乍ら、久しぶ
りで出會つた事を喜び會ひま

した。夫れも其筈です、二人
は六年の間、手紙の遣取をす
るばかりで、ちつとも會つた
事が無かつたのです。

「信次さん、善太君はどうし
たのでせう？」

「何所へ行つたか、ちつとも
解らないんださうな。まさか
死にはしまひと思ふが……」
信次の顔にも憂の色が浮ん

でゐました。

「おうちへ、手紙が來ないんですか。」

孫四郎は信次の顔を覗き込みながら言ひました。

『お家つて、與一さんはもう二年前に家内を引つれて、何所かへ行つてしまつて、行方不明なんですよ。』

『まアさうですか。』と言つて孫四郎は呆れてゐましたが『お宅の祖父様はまだお達者でせう?』

『えエ、達者です。君が歸つて來たと聞いたなら、さぞ喜ぶこととせう。』

『では、これからお伺ひいたしませう。』

二人は、與兵衛爺さんに會ひに行きました。

孫四郎を見た與兵衛爺さんは、

『立派な男になつた。立派な男になつた。』と言つて大變喜びました。

『おちいさん、僕が十津川へ行くと云つて、お宅へお暇乞に上りました時、おちいさんは、僕の頭へお手を載せて下さいました。僕は其時まだ、こればかりでしたネ。』と云つて、孫四郎は其頃の小さい身の丈を空中に量りました。

『さうだった、さうだった。馬鹿に大きくなつたものだなア。どうれ、五尺何寸あるかい。五寸か六寸か……』

言ひ乍ら與兵衛爺さんは、伸上るやうにして、六年前のやうに孫四郎の頭の上に手を載せてみました

『五尺五寸七分です……』

孫四郎は子供らしく顔を紅らめながら、肩をすくめました。其時信次は、

『孫四郎君、白の墓へ詣つてやつて呉れないですか。』と言つたので、孫四郎は直ぐ、

『僕も其のつもりでゐたのです。墓はあの柿の木の下でしたネ。』と言ひました。

夫れから二人は打つれて、白の墓の所へ行きました。そして二人共黙つて、墓の上に咲いてゐる美しい芍薬の花を眺めてゐますと、何所からか犬の吠える聲が聞えて來ました。

二人は思はず顔を見合せましたが、無論白ではあ

りませんでした。

『あれは六年前だツたネ。』

『さうだ、月日の經つのは早いものだ。』

言つてゐる所へ

與兵衛爺さんが、線

香に火をつけて、家の

方が、上つて來ました。

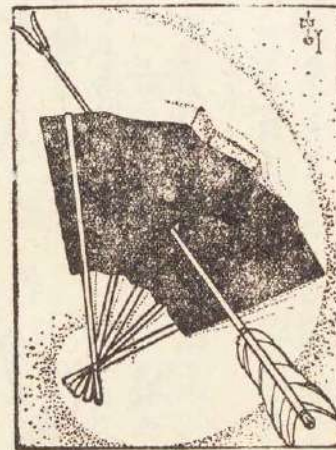
線香の煙が芍薬の花の下

で、ゆら／＼と風に搖いだ

時、三人の眼には同じやう

に涙が泛んでゐました。(をばり)





哀話 陣 扇

扇 的

九六

三 島 霜 川

お間違ひになると、いけませんから、あらかじめ、お断り申して置きます。このお話は、屋島の浦で、「扇的」を射落した那須與一の物語ではありません。その與一の子の小太郎と駒若——二人の兄弟のお話です。

恰度、屋島の合戦の始まる三月ほど前のこと——その頃、與一は、出陣の支度をしながら、まだ鎌倉

の佐介谷の方の屋敷に居りました。屋敷は、すてきに廣くつて、晝も暗いやうに、杉の太木が、しんと茂つてゐたので、化生の者が棲んでゐると云はれてゐました。それが、天狗だといふ者もあれば、また年を経た老狐だといふ者もありました——尤も、屋敷の地つゞきの山ふところに、佐介稻荷といふ古い稻荷のお堂があつたのでございますが。與一は、西國に上つて、義經の軍につくことになつてゐました。

「源氏が勝つか、平家が勝つか。勝負は時の運として、今度は天下分目の晴の戦……悴どもにも初陣をさせないが、家のため、一人は残して行く」

與一は、さう云つて、古兵の郎黨などに、「一人は残して行く」と、話して聞かせました。

「兄が残るか、弟が残るか」

那須の家では、誰も彼も、寄ると觸ると、この噂で持ちきつてゐました。

「わしは、何んとしても、お父上のお供をさせて貰ふのぢや。」

と、兄の小太郎は、さう云つて、男んで居りました。そして、小太郎の乳母の篠原も、それが、もちろん、當前のことだと信じて居りました。

弟の駒若は、おつとりした兄にくらべると、よほど、やんちゃんで、そして、向ふ見ずのところがございました。その代り、すばしくつて、力があつて、若い郎黨なぞは、とても手に立たぬ位、打物業

も、すぐれて居りました。

『おれは、どうしても、戦に行く。そしてナ、皆なが、びつくりするやうな、初陣の功をして見せる』駒若は、さう云つて、威張つてゐました。そして、その乳母の錦木は、傍から、「然うでございますとも、さうでございますとも」と、煽り立てるやうに云ひました。

さて、かうして、兄弟が、しんげんに競り合つて、『出陣』を願ふやうになりますと、與一 親心でございます。すつかり、迷つて了ひました——いづれ劣らぬ花菖蒲、杜若。おつとりしてはゐても、小太郎とても、十四歳にしては、筋骨逞しく、あつぱれ、坂東武者の血の通ふた頼もしい者である。成らうことならば、初陣をさせて、功をさせて遣りたい！

さう思つても、與一は、やはり、家が大事だと考へました。そして、内々で、小太郎の方を家に残す

ことに腹をきめて居りました。
けれども、それを、あけすけに、さう云つては、
武門の面目にかゝります。第一、兄をさし置いて、
弟を戦に連れて行くと云つては、小太郎を踏み
つけにして、『お前は腰拔だ！ 家に居ろ』と、いふ
のも同様でございます。

『そんな、むごいことが云はれるものではない』
と、興一は、これには、まづたく困りぬいて了ひ
ました。そして、いろ／＼と考へた末、二人の兄弟
を呼びよせて、斯う言渡しました。『ちと譯があつ
て、今度の戦には、お前たち二人のうち、一人しか
連れて行くことが出来ないのだ。小太郎は、家に取
つて大切な總領のことではあり、かた／＼、わしの
考だけで定めることが出来ない。それで、弓矢八
幡のお指圖に従ふことにしたのちやが、ついでに、
明日、佐々目谷山の馬場で、その證を見ることがす
る』

小太郎は、今度の戦には、てつきり、初陣が出來
ると思つてゐたところへ、かう云出されたのでござ
います。で、案外でもあり、いさゝか、安からぬ心
もちにもなりました。

『お父上、その證と申しまするのは、どのやうなこ
とをするのでございます』

と、小太郎は、おとなしやかに、たづねました。
『おう。明日、馬場の東の端へ、扇の的を二本、作
らせて置く。そち等は、めい／＼の馬に跨つて、馬
場を七へん、乗廻すのちや。さうして、西の端か
ら、矢頃ははかつて、扇の的を射落す……神意にか
なうて、二人が、見事射落したなら、もちろんのこ
と、二人ともに、戦につれて行く。もし、どちらで
も射損じたら、その者は家に残るのちや』
と、ういふ父の言葉には、不思議に、他人らし
い、嚴な響がございました。と、思ふと、急にま
た、その顔に、いつもの慈愛を滴らせて、『これ、明

日はナ、一門の人々は、云ふ及ばず、そち等の乳
母までも馬場に集まつて、見物するのちやぞ。云は
ば暗れの技。二人ともに仕損じな。よいか』

て、『きつと、射落して見せる』と、たかをくゝつて
ゐました。

ところが、小太郎の方は、駒若のやうに、さうの



と、云ひ足しました。

『何んだ、そんなことか。仕損じてたまるものか』
と、駒若は、肚のなかで、さう思ひました。そし

んきに考へることが出来ませんでした。『いやな事になつたな。時の拍子で、もし仕損じたら、戦に行けないのだ』

と、それが、心配でなりませんでした。そして、『どうか、見事に射落しますやうに』と、一生懸命に、それを、八幡大菩薩に祈つて居りました。

二

明くれば壽永二年の十二月十八日——真冬の日。鎌倉の山々、谷々を、明るく、冷に照らして、澄みきつた青空には、鶯が、とろゝ、とろゝと啼きながら、大きな輪をつくつて、舞つてゐました。

佐々目谷山の馬場には、一方に、幕が張り廻されて、そこに、那須の一門の人々が、狩衣の袖をつらねて、集まつてゐました。

『これア、てもなく、若たちが、初陣争ひぢや。いや、いさぎよいッ』

と、云つて、白髪の子兵衛などは、山風に鼻のさきを異つ赤にしなが、肩肘を怒らして、しやうちよこ張つてゐました。小太郎の乳母の篠原も、駒若

の乳母の錦木も、後ろの方に控へてゐました。そして、東の方の端に、二たひろほどの竿のさきにかけて、日の丸の扇の的を立ててゐました。

やがて、合圖の法螺の貝が、そこらの山々に、響いて、高らかに鳴渡りました。と、一方から小太郎

——これは、侍烏帽子を、紅白、だんだら染の緒にくくつて、紫紺の狩衣に、崩黄をどしの小具足に身を固め、右手に矢を、一と筋、弓を小脇に、連錢革毛の三歳駒に跨つて、しづくと乗出して参りました。その繪のやうに美しい、そして雄々しい武者ぶりを見ますと、乳母の篠原は、『ア、お勇ましい……』と、見とれて、その眼から、ホロ／＼、ホロ／＼と、悦の涙が零れて参りました。

ついで、一方から、やん／＼の駒若——これも、侍烏帽子を、紅白、だんだら染の緒にくくつて、茜染の狩衣、小櫻をどしの小具足、小太郎と同じやうに、弓を小脇に、矢を持った手に、ぐい／＼

手綱をしばつて、栗毛の逸物の足掻をはやめ、とツ、

とツ、とツと出て参りました——馬は、はやりきつてゐる、乗手は、向見すのがむしやうでございませす。とツ、とツ、とツと来た奴が、もう少しで、小太郎の馬に突つかけさうになりました。まるで、馬上で、組討でもしようといふ勢でございませす。

この勢に煽られて、小太郎の馬も、ぐいと、首を突きそらし、鬣をふるつて、嘶きながら、二度ほど、びよ／＼飛上つて、はやり出さうとしました。

『や！——皆な、ヒヤリとしました。馬と馬とに、暴れ出されては、たいへんだと、思つたのでございませす。』

ところが、小太郎は、少しも騒ぎません。前こどもになつて、鎧で腹のところをせめながら、ウンと手綱をしばりました——轡が、ガチャ／＼と鳴る。技で、せめられては、名馬も、かなひませせん。後足を弓のやうに、へし曲げて、五足ほど、タジ／＼と

退りました。そして、ビタリと停りました。その小太郎の手綱のさばき、鎧の踏張り、鞍壺の据り——

『あッばれ、乗手ぢや』

と、皆なが『あッ』と、感歎の聲を、どよめかせました。

與一も、にっこりしながら、一人で、しきりに、うなづいてゐました。

駒若は、それから、十間ほど先きまで、乗出して、ヤツと、馬の頭を回しました。その勢の好さ——

『駒若殿は、やッぱり、駒若殿ぢや』

と、郎黨などのうちには、さう云つて、その勇ましいのに感心した者もありましたが、しかし、それも『あッ』といふほどのことではありませんでした。

乳母の錦木は、それが不服でありませんでした。そして、『誰も彼も、兄御が、ひいきなのぢや』と、思つて、膨れかへつてゐました。

馬を回した駒若は、北に向ひ、小太郎は、南に向

つて、馬を立てました。さうして、二番目の合圖を待つてゐました。つまり、その合圖で、二人は七へん、馬場を乗廻すのでございます。

程なく、その法螺の貝が鳴りました。と、小太郎も、駒若も、『は、よッ』と、聲をかけるのと一緒に、手綱を一つ引きました。はやりきつてゐた馬は、カツバ、カツバ、カツバ、カツバ、刻むやうに足掻をはやめて、走り出すと、一方は、南の方から、北、東へ、一方は、北の方から、南、西へ向つて、さつと鬘をなびかせ、蹄を宙に跳らせて廻つて行きました。土煙があがる、土塊が飛ぶ。そして、二度三度と、馬場を廻るうちに、だん／＼に勢が加はつて、どちらの馬も、一足飛——蹄が、眞の僅、地を掠めるやうにして走りました。その烈しい勢に吞まれて、皆な、息を引きつめ、手に汗を握つて、見物してゐました。與一でさへも、少しづつ前へ乗出して、夢中になつてゐました。さうして、

五へん、六へん——馬の口には、白い泡が見えて來ました。

その時、三度目の法螺の貝が、一段と高く鳴渡りました。駒若は、丁ど矢頭になつてゐましたので、ふいと、體を左手に、ねち向けたと思ふと、鐵を馬の尻の方に向けて、キリ／＼と弓をひきしほりました。そして、よッ引いて、ひようと放つた矢——あざやかに飛んだ矢は、見事に扇の日の丸を射抜きました。扇は、竿をはなれて、ヒラ／＼と落ちる。皆なは『やんや』と、云つて、どよめきました。

その、どよめきを、乳母の篠原は、安からぬことに思ひました。そして、駒若の方は見向きもしないで、一心に、小太郎の方を見つめてゐました——駒若に、先きを越されたといふだけでも、乳母の心は、ザワ／＼と、妙に波立つたのでございます。

駒若は、馬を乗りしづめ、胸を反らし氣味にして、とッ、とッ、と、與一等の前の方へ、やつて來ま

した。そして、ヒラリと馬から飛下りて、一禮したとき、恰度、小太郎は、駒若と同じ姿勢になつて、よッ引いて、放つた矢——弦音高く飛んだ矢は、扇

と、小太郎は、慄てました。そして、二の矢をと思ひましたが、あはれ、父から渡された矢は一と筋しかありません。



をかすめて、さらに五六間彼方の樫の樹に、一とゆりゆれて、鋭く突ッ立ちました。

『や……』

それと見て、篠原は、よ、よと、聲をあげて、泣伏しました。與一は、うつむいて、じツとなつて、小太郎の哀な様子など見ないやうにしてゐました。

その頃から、空は怪しく雲立つて来て、風さへ荒く吹出しました。

三

「どうして射損じたのだらう。手先には、たしかに、くるひは無かつたのだが」

小太郎には、それが、不思議に思はれてなりませんでした。

「時の拍子か。弓矢神に見はなされたのか」

それが、どちらであるにしても、初陣に出られなくなつたことは、小太郎に取つて、こんな悲しいことはありませんでした。まつたく、あきらめようにも、あきらめられない、情ないことでした。

で、馬場から引上げる時などは、情れてはゐても、まだ、氣を、しつかりと持つてゐましたが、居間に歸ると、ホロリ、ホロリと泣出して、やがて「残念だ、残念」と、云ひつゞけて、正體もな

く泣伏して下ひました。

「お道理でございます、御もつともでございます」
乳母の篠原も、さういふほかに、慰める言葉もございせん。そして、とも／＼に泣いて居りました。

「おれア、今度の戦に行けぬほどなら、腹切つて死んで了うた方がよい」

小太郎は、さう云つて、駄々をこねました。

「腹切るとは、めつさうな！ ま、ま、氣をおしづめなされませ」

篠原は、泣聲をすゝつて、さう云ひました。けれども、そんな言葉では、なか／＼、小太郎の涙かとまる筈はありません。さうして、二人は、何時までも、いつまでも泣いてゐました。

母の玉の井御前も心配をして、何度となく様子を
見に来ては、いろ／＼慰めましたけれども、それも、二人の悲みを救ふことが出来ませんでした。與一も、こつそり、やつて来て、そつと二人の様子を窺



つておきました。が、これは、どういふ譯か、二人に氣づかれないやうにして、そのまゝ引返してしまひました。

するうちに、その日も暮れかゝつて來ました。二人に取つては、淋しい暮方——風は、どうく吹きつけて、大粒の雨は、バラ／＼、バラ／＼と、物凄く、廊や荷をたゞきつけました。

『若様……』

と、篠原は、鼻をすゝりながら、呼びかけました。その顔にはきつとある決心が動いてゐました。

『いつまで、お歎きあそばしても、仕方がございませぬ。この上は、何か一つの功をお立てあそばして、もう一度、初陣のおゆるしを、お願ひあそばすより、他に途はございませぬ……もう、お歎きなされますな』

『ム……』と、すなはに、うなづいて、『したが、その一つの功と云やるのは？……』

小太郎は、その『一つの功』といふ言葉にさへ、あゝ望みをつなぎました。そして、遽に、涙の目を、いき／＼させました——それがまた、篠原には、いじらしく思はれてなりませんでした。

それはナ、なみ大抵で出来ることではござりませぬ……でも、其程のことをなさらねば、とても、もう一度、願うて見るといふことは出来ませぬぞえ』

『ム。俺ア、どんなことでもする』

と小太郎はきつとした決心を見せて云ひました。

『それならば、申します。若様も御存知の通り、このお屋敷は、化生屋敷、妖怪屋敷云うて、鎌倉ちうでの取沙汰……變化の棲家も、大が、あの、佐介、稻荷のお堂であらうと、皆が云うて居ります』

『ム、ム……』

と、小太郎は、勢づいて、グン／＼篠原の方へ乗出して行きました。

『有様は、乳母も、この程から、三夜さゝつとい

て、あの、お堂の森のなかで、何んぢややら、人魂のやうな怪しい光が、消えたり光つたりするのを見ました……正しく變化に相違ございませぬ。若様、

ア、那須與一が總領ぢや、何んで、怖かる』
『オ、よう有仰いました。では、きつと、退治なされますな……お一人』



あなた、その變化の正體を見届けて、退治なされま
するお心はござりませぬか』

『オ、退治をしようぞ。妖怪でも、變化でも、俺

と、篠原は、念を押すやうに云ひました。

『ム。ぢやが、その變化めが、いつ出居るか？』

小太郎は、それを、たより無いことに思ひました。

「いえ、それは、お氣遣ひなされますな。變化は、毎晩、出るのござります。まして、このやうな晩には……」

「では、俺ア、これから、直ぐに行つて、お堂に籠つてゐよう！」

と、小太郎は、躍上がるやうにして云ひました
「まア、お待ちなさらませ。お急になつては、仕損じがござります。變化の出るは丑満……真夜なかまでは、ゆるりと、お休みなされたが可うござります。そして、誰にも知らさぬやうに、此の暴風雨に紛れて、こつそり、お堂へお越しなされませ」

「ム」

と、小太郎は、勇立ちました。

「お獲物は、あの、薙刀……」

「ム」

「具足は、そのまゝに……」

と、篠原は、何から何まで、氣をつけました。小

太郎は、その時まで、小具足をつけてゐたのでござりました。

四

その頃の鎌倉の山々、谷々の森には、たいがい天狗が棲んでゐるとか、妖怪がゐるとか云はれてゐました。そして、どこの子が天狗に攫はれたとか、誰が、夜、どこの森を通つたら、土砂を撒きかけられたとか、または或る大の男が、天狗に股を裂かれて、木の枝に引つかけてゐたとか——そんな話、のべつに、そこらちうに傳へられてゐました。

小太郎も、よく其の話を聞いてゐました。

けれども、小太郎は、それを何んとも思ひませんでした。そして、變化を退治して、それを功に、初陣の望をかなへて貰はうとの一念に燃えてゐました。

夜は、だん／＼更けて行きました。雨は、だいぶ

小降りになつて來ましたが、風は、やはり、ごう／＼と、鳴わめいて、荒廻つてゐました。誰も彼も、寝しづまつて、館のうちは、しんとしてゐました。

「もう、よい刻限であらう」

と、小太郎は、そつと、自分の居間から忍んで出ました。そして、厩の傍まで行つて、下郎の着る襦をき、それから、森の奥の方へと進んで行きました。雨夜の月——雲が少し薄れて來たので、物の影が、すべて、ボンヤリと見えます。それがまた、い

つそ物凄いやうでした。

ふと、向ふに——恰度、お堂の方角に、何か知らず赤い火の光が、木の間にぐれに、チラ／＼するのが見えました。焚火か、松明か——小太郎は、さうも思つて見ましたが、どうも、それとも違ひます。さうして、その火が、消えたり、また光り出したりするのでございます。

「乳母の云つたのは、これだな」

小太郎は、さう思ひました。そして、とある樹のもとへ身をよせて、薙刀をかいこみながら、じつと、向ふを窺つてゐました。

「いよ／＼變化であれば……」

さう思ふと、或る張合に、胸がワ／＼して來ました。しかし、「落ちついて……落ちついて……」と、何度となく、『はやる心』に云ひ聞かせて、静に、お堂の方へ近づいて行きました。雨は、霧がかりかけて、たまに、ボツリ、ボツリと、落ちて來るほどになつてゐました。でも、樹の影などは、まだ不思議な恰好をして、無氣味にゆれてゐました。

五

幾だんかの石段を上がつて、お堂の前に來て見ても、別に變つたこともありません——怪しい者の影も見えませんでした。

「をかしいぞ」

小太郎は、ちよつと張合の抜けた氣味になりました。そして、何も見えないのが、いつも無氣味なやうにも思はれました。格別恐ろしいといふのではありませんが、ある重くるしい凄みが、ジリ／＼と肌を喰ひこんで参ります……

『何に驚ッ』と、小太郎は、ぐつと肚を据ゑて、落ちつけるだけ落ちつかうとしました。そして、堂に沿つて、後ろの方までも、ぐるりと一廻りして見ました。しかし、そこは、只、薄暗くて、しん／＼としてゐるだけで、別に何事もありませんでした。仕方がないから、また、お堂の前まで歸つて来て、そこで考へました『この上は、お堂のなかを見て道らう』さう決心しますと、小太郎は、少しもぐづついてゐませんでした。ヅカ／＼と階段を上がつて、ぐいと、扉を押しあげようとした時……思ひかけず、扉が、内から、左右に、ぱつと開きました。ふいでしたから、小太郎は、はつとして、一と足、後へ退

つて、薙刀を構へました。

あらはれてのは異形の變化——金色の眼は、らんと光つて、口は耳まで裂け、さつと振亂した髪を長く引きすつて、白衣に、緋の袴。片手に鐵杖を振りかざして、小太郎を見するが、ジリ、ッ、ジリ、ッと迫つて来る——その勢が、なか／＼烈しいのです。その魔氣に襲はれて、小太郎は、思はず二足三足、あとへ退りましたが、すぐに立ちなほつて、薙刀を水車のやうに廻して、切りこんで行きました。その早業……

今度は、變化の方が、たじ／＼となつて、後へ退りました。鐵杖で、二度ほど、火の出るやうに薙刀を拂ひましたが、小太郎は屈みません。たゞみかけ、疊みかけて、切立てで竈立しました。そして、もう少ししのところで、斬られさうになつたときに、變化は、かなはないと思つたのか、ヒラリと身を躍らせて、階の下へ飛下りました……小太郎は、すき間

もくれずに、それ／＼横なぐりに薙ぎましたが、ざんねんにも、袴の裾を一尺ほど切落したゞけでございました。



だが、それが、流れて、肩さきへぐく切込まれました。『あッ……』——不思議な叫聲と共に、變化は、よ

小太郎も、つゞいて、蟬のやうに飛下りました。飛下りながら、真向から打ちかゝつた薙刀……變化は振りかへりざま、すばやく鐵杖で受けとめはしまし

ろよろと、前の方へ踏つて、うつぶしに倒れました。小太郎は、薙刀を捨て、躍りかゝり、のしか、つて、取つて押へつけました。そして、武夫の作法

——大聲に呼はりました。怪しの變化を、那須小太郎が牛捕つた」恰度、そこへ、小太郎の姿が見えぬのに驚いて、探しに出た那須與一が、二三人の郎黨に、松明を照らさせて、駆つけけて來ました。

變化の『正體』は、蘭陵王の面をかぶつた、乳母の篠原でございました。結びつけた紐をといて、面を取りますと、篠原は、息も絶々になつて、小太郎の膽力と早業とをためした上、もう一度、戦のお供を願つて見ようと、お堂の掛額の蘭陵王の面をかぶり、變化の姿になつて、宵のうちからお堂に來て隠れてゐたことを話しました。さうして、それは、小太郎の望をかなへて、初陣に出すやうにしたいといふ、只、その一心でございました。

その譯を聞いて、郎黨たちは、「乳母は、そんなにまで、若様が可愛いのかな」と、思つて泣きました。小太郎も、篠原に、すがつて、泣きました。

與一も、泣きました。そして、『あッ、さうであつたか。有様はナ、總領に生まれた兄を戦に出して、もし、討死でもするやうなことがあつてはならぬと、小太郎は家に残して置きたかつたのぢや。それで、天の甲召に従ふと云立て、わざと、曲つた矢を小太郎に與へて、扇の的を射損ねさせた……こりや、家のため、總領を大切に思ふ、わしの親心ぢや。そちが、然うして、命を捨て、まで、小太郎の初陣を願ふは、武夫の眞の魂……いかに、わしが惡かつた。この上は、小太郎は、きつと、戦につれて行かうぞ！』

『あ、有難うございます』只一言、さう云つた篠原の舌は、もうもつれて、よく聞取れませんでした。

雲は吹きはらはれて、磨出されたやうに、しろくくと冴え渡つた月影。その清らかな光に照らされて、乳母の怪しい姿は、だん／＼静になつて行きました。

(をばり)

ある仇討ちの話

大木雄三

伊勢國四日市といふところに、劍術の道場を開いてゐた堀内源太左衛門といふ人がありました。源太左衛門は眞影流の達人で、その上教へるのが親切でしたから、道場は日増しに榮えて、朝から晩まで、ほんばんと勢のいい竹刀の音の絶える間もないく



らゐでした。

或日、この道場へ一人の武者修行者が訪ねてきて

「拙者は江戸の者、高田主水といひます。流義は一刀流を使ひますが、せひ一本の立合をお願ひしたい。」と言ひました。

武者修行者といふのは、方々の國々を巡つて、有名な劍客と仕合をして、自分の腕を磨いてゐるものですから、武者修行者に訪られた道場の主人はまづ立合をした上で、勝つても負けてもいろ／＼もてなしてやることになつてゐたのでありました。

まもなく、源太左衛門と高田主水とは、ちゃんと仕度をして道場の真中に出たのです。

「お手柔かに。」

「拙者こそ。」

かう挨拶が済むと、ヤツと兩方に飛び退きました。が、それから激しい仕合がはじまつたのです。そしてたうとう勝負は源太左衛門の勝ちになつてしまひました。

ところが、その晩遅く一人の男が源太左衛門の邸

の塀を乗り越えて忍びこんだのを、誰一人氣のついた者はありません。その男は、そつと戸をこち開けて家の中に入ると、猫のやうにこつそりと主人の源太左衛門の枕元に近づいて、いきなり斬りつけたのでした。

「きやッ」といふ物音をきいて、弟子たちが駆けつけて來た時には、もう誰の姿もなく、血に染つた源太左衛門が、

「残念だ、残念だ。」と叫んでゐるばかりであつた。

「先生。仇は何奴でございますか。」

弟子たちは急ぎ込んでたづねました。

「晝まゐつた奴ぢや。確に一刀流の身の構へだつたが……」

苦しさうな聲で、源太左衛門はかう言ひました。が翌朝、まだ日も昇らないうちに、息を引取つてしまつたのでした。

「よい先生を逝くしてしまつた。」

弟子たちはかう言つて、口惜しいのと悲しいのと、齒ざしりをしましたけれども、仇の高田主水はどこへ逃げてしまつたのかわかりません。

二日後に源太左衛門の葬式がありました。その歸り路のことです。兩腕を組んで伏目になつてとぼとぼと歩いてゐた一人の武士が、並んで歩いてゐた武士に聲をかけました。

「考へれば考へるほど、先生は惜しいことでした。そして憎いのは高田主水とかいふ奴だ。」

けれども相手の武士は黙つてをりました。

話をしかけたのは常見庄三郎といつて、源太左衛門の高弟です。話しかけられた方もやつぱり高弟の一人で、瀬尾藤四郎といふ武士だつたのです。

「拙者はこのまゝでは腹が癒え。い。どうしても主水を一打ちにしてしまはなければ氣がすまない。さう思はないか！」

庄三郎はかう言つて藤四郎の方を向きました。き

つと藤四郎も賛成して、いつしよにやらうと言ふだらうと思つたのです。ところが藤四郎は、

「いや、拙者はさうばかりは思はない。」と答へたのでした。

すると庄三郎はさつと顔色を變へて、藤四郎に詰め寄せました。

「何故だ。」

「考へてみるがよい。先生にも油斷があつたからではないか。仕合に負けた奴が、それを恨みに思つて闇討ちするといふことは、昔からよくあるではないか。晝間あゝして打ち据ゑたのだから、先生はあの晩用心なさればよかつたのに。」

藤四郎は靜かに言ひましたが、これをきいた庄三郎は火のやうに怒つて、

「貴様は先生の惡口を言うのか。憎い仇の味方をしようとするのだな。よし、拙者はがまんできない、瀬尾、勝負しろ。」

いきなりスラリと刀を抜いて斬りつけました。
『待てッ。あわてるな。』

藤四郎は止めようとしたけれども、その聲は庄三郎の耳に入らなかつたのです。しきりに斬込んでくるのを防ぐために、藤四郎も抜き合せましたが、どちらかといへば藤四郎の方が腕が上でしたから、庄三郎はだんだんと受身になつて後退りはじめました。その時、藤四郎が石につまづいてばつたり前へのめりました。そこをつけこんだ庄三郎の一太刀でたうとう藤四郎は倒されてしまつたのでした。

常見庄三郎は、ふと大へんなことをした、と氣がつきました。がもうどうすることもできません。しばらく考へ込んでをりましたが、何を思つたのか血刀を鞘にをさめると、馬のやうな勢ひで走り出したのであります。

二

う、が先生の仇を討つまで、命を貸しておいて下さい。
『』

と兩手を支へて頼んだのでした。

九郎兵衛はちつと考へ込みました。しばらくして何か言はうとした時、庭の方で

『伯父上。』といふ聲がしました。

庄三郎は、はつとして思はず立ち上りかけました。その聲は確に藤四郎の子の左門だつたからです。

『お待ちなさい。』

と九郎兵衛は庄三郎の袖を捉へて隣室へ押し入れながら、

『けつして出てきてはなりません。何も彼も拙者に任しておいて下さい。』と言ひながら、びつしり襖を閉めて まひました。

『伯父上、庄三郎をお出し下さい。』

左門は縁側から躍り上つて、峻しい目つきをして座敷の中を睨まはしました。

瀬尾藤四郎の兄に瀬尾九郎兵衛といふ人がありました。庄三郎は藤四郎の友だちですから、九郎兵衛も庄三郎とはよく知つてをりました。

庄三郎は九郎兵衛をたづねて行きました。九郎兵衛は庄三郎の青い凄顔を目見たばかりで、これは何か變つたことができたな、と氣がついたので、家の者に向つて、

『誰が來ても庄三郎の來てゐることを言つてはならないぞ。』

といひつけてから、庄三郎を奥の間へ案内したのです。

『九郎兵衛殿、私はとんでもないことをしてしまいました。』

庄三郎はくはしいことを九郎兵衛に話してから、『悪い事をしてしまつた後悔はしてをりますが、私はどうしても先生の仇を討たなければなりません。あなたの弟を殺した私をきつと憎いと思ひでせ

『左門。何といふ無禮をするのだ。他人の家へ案内もなく入つてくるばかりか、刀を抜いてゐるとは、その態は何だ。』

九郎兵衛はかう叱りつけたのですが、左門は

『いまは、無禮だの何のと、言つてをられませぬ。父を討つた庄三郎が、こゝにゐるのを知つて仇を討ちにまゐりました。伯父上、早く庄三郎を出して下さい。』

と言つて、いまにも奥へ踏込まうとするのです。

『えい。何といふ莫迦者だ。坐れ、坐つて私のいふことをきけ。』

九郎兵衛はひどく叱りつけました。しかたがありません、左門は恨めしさうに坐つたのでした。九郎兵衛はその様子を見ると、すこし悲しさうに聲を落して言ひました。

『お前が父の仇を討たうとするのは立派な心掛けだ。庄三郎がきいてゐれば、喜んで討たれたいと思ふだ

らう。けれども左門、よく考へなければいけないぞ。庄三郎は先生の仇を討たいばかりに、お前の父を殺してしまつたのだ。先生の仇を討たないうちは、お前に討たれるわけには行かないのだ。武士といふものは惜しくない命でも、勝手に棄てるわけにはいかないのだ。お前がそんなに騒がなくても仇は討



てる。庄三郎を討つ時がくる、それまで時節を待つのだ。わかつたか。」

隣室では庄三郎がきいてゐました。そつと襖を細目にあけてみると、まだ十二歳にしかならない前髪立の左門が、白い首筋を伏せてちつときいてゐる様子です。庄三郎は飛び出して行つて、左門に討たれようと思ひましたが、九郎兵衛の言葉を思つてやめました。そして心の中で、

「仇を討つまでだ。」と言つたのです。

やがて左門は、
「伯父上、お暇いたします。」と言つて、庭へ下りると、そのまゝ表へ出て行つたやうです。

庄三郎は九郎兵衛の前へ出て、
「御恩は忘れません。望みを遂げてから、必ず左門殿に討たれませう。」といつて、男泣きに泣いたのであります。

「お察し下さい。可愛い甥を追ひかへしたのもあな

たを立派な武士にしたいからです。」

九郎兵衛も目に涙をにちませたのでした。

その夜、月の出ないうちに、闇にまぎれて庄三郎は九郎兵衛の家の裏門から出たのでありました。ところが庄三郎の後からまた一人後をつけて行く者がありました。これは左門です。

庄三郎がすたすたと急いで、もすこしで四日市の町を出端れようとするところに橋があります。その橋を渡りかけたときに、

「常見庄三郎待てッ。」

と後からつけて来た者が聲をかけました。逃げることもできませんから、庄三郎は

「誰だ。」

と言ひ返しました

「左門だ。父の仇、覺悟しろ。」

左門はいきなり刀を抜いて斬りつけました。

庄三郎はその刀を除けて、



「左門殿か。討たれたいけれども、いまはまだ時節でない。庄三郎は戻つてまゐる、それまでお待ち下さい。」

と言ひました。けれども左門は赦さうとはしませんでした。

「卑怯者奴、逃がすものか。」

と一生懸命に刺り込んできます。庄三郎は何とかして逃げようとしたが、とても駄目だと思つたの下、

「御免ッ。」と叫んで左門の襟首を捉へると、ざぶんと川の中へ投げ込んでしまつたのです。

「左門殿、お赦し下さい。庄三郎の心が、いまにわかりませう。」

庄三郎はさう言つて、どん／＼と駆け出して行つてしまつたのでした。

三

左門と別れてから、庄三郎は江戸へ出てまゐりま

した。

「あいつは江戸の生れだといつた。だからきつと江戸へ戻つてゐるだらう。たとへ何年かかつて探し出さなければならぬ。」

庄三郎は固い決心をして、毎日々々江戸の町をぶら／＼歩いてをりました。しかしなか／＼仇を見つけて出すことができません。そのうちに春がきて夏がきて秋が来て冬がきて、またもとの春に戻つてくるのでした。ちやうど花の咲く春を五つ過ぎたある日のことでした。

その日も仇を探しながら花見をして歸りかけた庄三郎が、上野の山を下りてくると、向ふから立派な乗物がまゐります。まはりには大勢のお供揃ひの武士が威張つてやつてくるのでした。

庄三郎は、ちつと見てをりましたが、

「しめたッ。」と思はづ膝を叩いたのでした。

お供の武士の中には、憎い憎い高田主水が入つて

ゐたのです。庄三郎はすぐに飛び出して行かうとしましたが、

「あちらは大勢ゐるのにこちらは自分一人だから、ひよつとすると返討ちにされるかもしれない。それではせつかくこれまで苦勞したのが何にもならない。」と考へましたので、その日は、行列の後をついて、主水のゐるところをつきとめるだけにしたのでした。ついて行つてよく調べてみると、主水は小石川の池田備前守といふ大名に召抱へられて、指南番をしてゐるのです。

庄三郎は喜びました。この上は、主水一人の時に側へ寄つて、立派に討たうと思つたのですが、困つたことに、主水は庄三郎の顔を知つてゐるかも知わらないのです。いつか道場へ仕合に來たときに、源太左衛門の前に、庄三郎が立合つたのでした。

「もし覺えてゐられては困るぞ」と庄三郎はいろいろ考へた末、わざと自分の齒を缺いてしまつた上

焼けた火箸で眉毛を半分焼いたのです。

かうして生れ變つたやうに醜い顔になつた庄三郎は、口入屋に頼んで、うまく主水の邸へ仲間奉公に住み込むことができました。仲間といふのは、武士の家に雇はれて、馬の手入れやら、お使ひやらをする自分の低いものです。だから仲間などはみんな心は卑しい者はかりで、なるべく働かずに樂をしようと考へるのですが、庄三郎だけはそんなことはしません。わざと毎日一生懸命に骨身を惜しまずに働くのでした。或時庄三郎が庭の掃除をしてゐますと、

『こら、こら。』と呼ぶものがあります。

振り向いてみると、びつくりするではありませんか。庄三郎を呼んでゐるのは、四日市の町端れで川の中へ投げ込んだ、あの瀬尾左門だつたのです。

『へい。』庄三郎の聲は咽喉へ引かかつてしまひました。『何か御用ですか。』

『うむ。』と左門はうなづいて、『お前たちの友だちに

常見庄三郎といふ者はゐないか。もしゐたならば、そつと拙者に知らしてくれ。』と言ひました。

『かしこまりました。』

庄三郎はかう答へたものゝ、もし自分が庄三郎だといふことがわかりはしないかと思つて、心のうちでびく／＼してをりました。しかし左門にはわからなかつたのです。左門は向うへ行つてしまひました。庄三郎ははつと溜息を吐いて、

『おそろしいことだ。左門は自分を訪ねて出て來たのに違ひない。もうぐ／＼してはゐられない。一日も早く仇を討つてしまはう。』庄三郎は夜も晝も目を輝かして、主水の隙をねらひました。

四

たうとう仇討ちに都合のよい時節がきました。

庄三郎が馬の手入れをして厩から仲間部屋に戻らうとしてふと見ると、庭に主水が一人ゐるのです。

何か考へてゐるのか、庄三郎の來たのにはずこしも



氣がつかないやうですから、

『先生の仇、高田主水覺悟しろ。』

と叫んで、側へ進みよりました。

主水はびつくりしたやうに顔を上げて、

『仇とは何ぢや。貴様は氣が狂つたのか、莫迦者奴。』

と叱りつけましたが、庄三郎の眞剣なやうすを見ると、用心のためにすぐ刀を抜いて、一刀流の大上段に振りかぶりました。

庄三郎は仲間ですから、刀をさすことはできないのです。いつも懐に用意してゐる短い刀を直、眞影流の平青眼といつて斜に構へながら、

『汝はいまから五年前、伊勢國四日市に於て、堀内源太左衛門を闇討ちにした覺えがあるだらう、卑怯者奴。』

主水は驚いてしまひました。

『汝は何者だ。』

『源太左衛門の門弟常見庄三郎を忘れたか。さあ尋

戸へおいでになつたのではござりませんか。』

『さうです。』と左門は答へました。そして庄三郎と顔を合せてから、

『仇を討ちたいのは二人とも同じです。いまあなたが討たれてしまつては、拙者は父の仇を討つことができないではありませんか。』と言つたのでした。

『あなたのお心はわかりました。私を討つて下さい。もう生きてゐたいとは思ひません。四日市の橋の上で約束した時節といふのは今日のことです。』と庄三郎は刀を遠くへ投げ出して、左門の前へ首をさしのべました。

左門は刀を振り上げましたが、どうしても庄三郎を斬ることができないので、

『庄三郎殿、私には立派な武士を斬ることはできない。たとへ親不幸だと嘆はれてもよいから、このままお別れて國へ歸らう。』と涙ぐんで言ひました。そして靜かに立ち去らうとしたので、

常に勝負しろ。』

庄三郎はぢり／＼詰め寄りました。一生懸命ですから、主水にもうつかり斬り込むことができせん。しばらく二人は睨合つてゐましたが、

『やつ』といつて、庄三郎が斬り込むのを、主水はチャリンと受け流して、すぐさま横に拂ひましたから、庄三郎は右腕を斬られて、

『あつ。』と刀を落さうとしました。

『庄三郎殿、助勢申す。』

かう叫んでいきなり飛込んできた者があります。彼は刀を抜くより早く、振向かうとする主水の肩先に斬りつけたのでした。思ひもよらぬ助太刀のために助かつた庄三郎は、元氣を取り直して、たうとう主水を斃すことができたのでありました。けれども助太刀してくれたのが左門だといふことを見たときに、どんなに驚いたかしれません。

『左門殿、あなたは拙者を仇と狙つて、わざ／＼江

『左門殿。』と庄三郎が呼びかけました。

『何です。』左門が振向いたその時、庄三郎はいきなり自分の腹に刀をつき刺して、

『左門殿、仇を討つために苦勞したのは私ばかりではない。あなたも同じだ。そのまゝ國へ戻つてはいけません。さあ、私の首を……』

と苦しさに云ふのでした。かうなつてしまつては、左門が助けたいと思つてもしかたがありません。そこで左門は庄三郎の首を討つて、久しぶりに四日市へ歸つて、伯父の九郎兵衛にその話をしたのでしたが、そのあとでかう言ひました。

『武士はどつらいものはありません。拙者は武士でなければ庄三郎殿を助けて上げることができたのです。もう武士がいやになりました。』

そして左門はその日限り武士をやめて、頭の丸い僧侶になつて、父の藤四郎や庄三郎のために有難い經をあげたのでありました。(をばり)



綴 方
藤 佐 次郎 選

私の兄さん (賞)

山梨縣大月廣里東校尋四

河 西 元 江

私の兄さんは私が七つの時はうこうに行きました。私は兄さんのいつた時のことはまだわすれませんが、兄さんは大きなこりへ着物をいれて東京へ送りました。兄さんは「元江からだをしようぶにするだよ」といつて停車場へ行きました。汽車はまもなくけむりをたててうごきはじめました。兄さんの顔はお天とさんのかげんか光つて

ゐました。そして兄さんがいつてからうど一年たちました。私は八つでした。私は一年へあがるのでした。私はいつしよけんめいにべんきようをすれば、兄さんはきつとうれしがるでせうと心で思つてゐました。そして學校からかへつてきては兄さんのことを思ひ出しました。

兄さんのゐる家には、おばなうが四人だかゐますと手紙でかいてくれました。そしてまもなく四年たちました。そして四年の夏休みがきました。そして十日だかたつた時、丸五のをばさんが東京へつれていつてくれました。そして汽車へのつて、いろんな話をしたり、本をよんだりしてゐますと、まもなく新宿の停車場へきました。そして利子さんと松子さん

とあたしと三人で、手をつながつて行きました。はしごだんをおりきつて、電車へ乗つて、四谷まできました。そして電車からおりて、家の間をはひつていきました。そしてまもなく丸五へ行きました。そして荷物もおかないで洋服屋へ行きますと、兄さんが洋服をこしらへてゐました。兄さんはまだ私たちのきたのきがつかないで、いつしよけんめいに縫つてゐました。私はなつかしうございしました。私が大きい聲で「兄さん」といひましたら、びつくらしてこちらをむきました。兄さんは「いつきたの」といつて笑つてゐました。兄さんは「松子さんも利子さんもおあがりなさい」といひました。松子さんが「またきます」といつて三人でとんで行きました。そ

の晩は兄さんは用ををへてから丸五へきました。そして四人で氷をのみに行きましたら、兄さんがサイダーを買つてくれました。そしてのみきつてから、そこいらを見物をして、九時ごろ丸五へかへりました。そしてその晩のたのしかつたことを思ひだして、四人で笑つたりしてゐますと、丸五のをばさんがきて、おちやをいれて

くださいました。そしてたのしく三日とまりました。私は大月へかへる時はつまらないやうな氣がしました。そしてかへる時兄さんが「家へも中西屋へもよろしく」といひました。私は兄さんにわかれるのがいやでたまりませんでした。

かやの中で (賞)

香川縣木田郡下高岡校尋五

中 原 ふ み 子



「像 肖」 (賞) 横町 市田 牧下 敏邊渡

よしちゃんがかましく泣くので目がさめた。目をこすりながらわきを見ると、よしちゃんは両手でかやのすそをにぎり、足で着ぶとんをふんまへて

泣いてゐる。そして「カア／＼」と言つてゐる。私は「お母さんかい、すぐ来るよ、すぐ来るよ」とあやしなげにだき上げたが中々泣き止まぬ。涙の目で私をうらめしさうに見ながら、口をゆがめて泣いてゐる。私がお母さんでないのを知つて、氣を落したのでせう。ふとんを見ると黒い小便のあとがある。涙をふいて軽くゆつてやつた。小さい足を私のひざの上で何べんもふんばつて、「チチ／＼」と言つて私を見つめる。「チチな、チチな、チチはな、今すぐ持つてくるぜ」と言ふと、「フン」と言つて兩手をにぎつたり、はなしたりしてゐる。もう目には涙は見えない、長いまつ毛が目くそにかたまつてゐる。のけやうとすると、「イヤ」と言つて私の手を拂ひのける。臺所の方



朝(賞) 山松 縣署 鳥六 一頼侯小

「支那傘丈夫、値段安い。大將買はんか。」街道で大きな聲がした。何が起こったのかと思つて、街道へ出て見ると、向ひの桶屋の仕事場で、こわい顔した支那

いな、大將買ふな、ひやかしないな」「ウン」「よし八十銭負けとけ」かう言つて支那人は信さんの前へ傘を出した。信さんはもつと負けると思つたのか「五十銭にせにや、ボコベン」子供らは又どつと笑つた。支那人はきよんとした顔をして信さんを見上げた。秋の夕陽の弱い光が桶屋の店にさし込んでゐた。

逃げた雀

京都市小川通一條下ル高一

伊藤 威

の行商が傘をうりつけてゐた。支那傘、紙厚い、日本傘三本支那傘一本。支那人は浅黒い顔で齒をむき出し乍らかう言つた。なかつてゐた五六人の子供がドツと笑ひくづれた。「なんばや桶屋の信さんは仕事の手をやめてかう言つた。「一圓五十銭大將どや」「八十銭しとけ」「それ出けん、一圓どや」「ボコベンやもつとまけとけ」「冗談な

お晝になつたので御飯をたべて居ると、庭の方でしきりに「チュツ／＼」と小鳥の聲がする。始めの内はお母さんも「雀が庭におりて食べ物を探して居るのでせう」と言はれたので、そのまゝ御

行商 (賞)

福井縣小濱町磯庭 (十五歳) 法本義夫

ではかまの音や、おちやわんの音がする。おかずの香がかやの中へ流れてくる。「よしちゃん、もう起たんかい。」とお母さんが前だれで手をふきながらはひつてこられた。すると今までだまつてゐたよしちゃん「ワア」と泣きだした。



姉さん (賞) 高松市 雄光野水

「つかんでみなさい」と言はれたので「ハー」と言つて下駄を探して居る間もないので縁から飛んで下りて桐の木の根本に走つて行くと、それとさつとつた雀の子は「チュツ」と鳴いて一足位飛んだので「コレハ」と思つておひかけた。手を下すと飛ぶ。ます／＼氣があせつて来た。「ひよい」と雀をおさへ様としたとたん、塀の外へ出てしまつた。その時こそじつと塀の穴をにらんだ。その時お母さんが「アをしい」と言はれた。ほんとにをしかつた。妹はびつくりしてお箸を持つたまゝ飛んで

来た。兄さんはだまつて縁に立つてゐられた。塀の向ふで今の雀が又「チュツ」と鳴いた。

ごんげんさん

熊本縣玉名郡荒尾北校第二

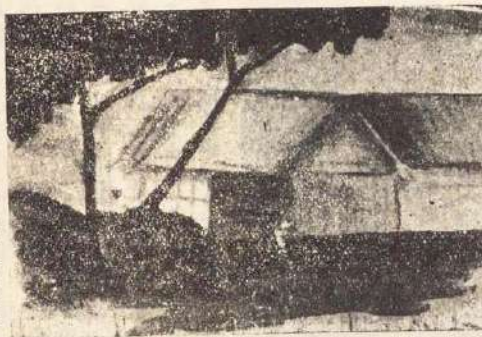
海達 公子

父ちやんと三池のごんげんさんにまわりに行きました。いきがけ道はたのほうせんぐわは、しをれてごみで白うなつてゐました。ふようやさるすべりもさいてゐました。ごんげんさんには大きい青々した松の木がたくさんあつて、せみがないてゐます。松の木のかげからむかふの山を見ましたら、むかふの山にも青々した松の木がたくさんあります。ごんげんさんでたくさんな人があそんでゐたので、うらのいはにこしをかけてや

「風景」

島根縣安來町

岩崎良三郎



すみしました。そこから下を見ましたら、大きいつつみの中にしまがあつて、その上にまつの木がはえて水にうつつてゐます。むかうの

方には、大牟田のまちがよく見えて、たくさんなえんとつからけむりが出てゐます。海には夕日がざらざらうつつてゐます。一時すずんがかへりました。

すゝめ

若狭高濱尋常高等校第六

山岡笑恵

屋根の上に居るかはいゝ三羽のすゝめが、ちゆう／＼となきながら屋根の上でゑをばしきりなさがつてゐる。それをばこちらでながめてゐた兄さんは、すぐにくうきじうを持つて来て、すゝめの腹をねらつてどんと一ぱつはなされる。真中のすゝめは首を討たれて下の方へ落ちて來ました。二羽のすゝめは殺されたすゝめが落ちて來るとどうじに、ばつと何處

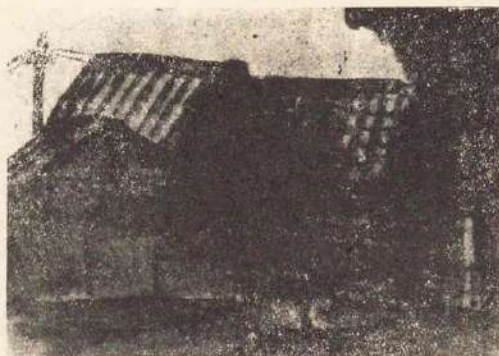
かへたつて行きました。すると二羽のすゝめは再び屋根の上へ來てあちらをさがしたり、下をのぞいたりしてゐたが、どうも見あたらないかつたのか、二羽のすゝめはそのまま何處かへ行つてしまつた。

下の方では兄さんが落ちたすゝめを拾つて來てすゝめの毛をすつかりむしつて、それを犬にやつてをられる時にも、二羽のすゝめは屋根の上へとまつては、あつちへ行つたりこつちへ行つたりしてゐたが、間もなく日が暮れたので、すゝめもその日はもうこなかつたが、私はすゝめでもあんなにして、つれが一人でも死ぬと心配さうに屋根にとまつて下を見おろしたりして、つれをさがすのかとあとで感心しました。

昨日のこと

香川縣木田郡下高岡校尋五

山田隆行



「家」

和歌山縣箕島校尋四

梅木數男

昨日の朝、母がひるまでさなだをくんで、ひるからあそべと言つたから、僕はよろこんでひるまで、一生けんめいにさなだをくんで、ひるからあそびました。四條にいちがあつたので、近所の春雄君や、松夫君やと一しよに見に行きました。

僕がちやうど四條のお宮さんの所へ來た時、自てん車が後から走つて來て、僕がよけようとする間もなく、どんとつきあたつて、私はころげました。自てん車の人は「氣をつけないかん。どうした。けがはせなかつたか」と言つて、又乗つて行つてしまひました。僕は何ともなかつたけれど、くやしくてたまりませんでした。松夫君は「警さつへうつたへたら、あの人ばらうやにはひるんや」と言ひ

ました。

いちを見て「つたら、母があませんので、近所の人に問ふたら、平木へ行つたと言つたので、僕は早く歸つてくればよいとまつてゐましたら、母がにこ／＼しながら手にふろしきづつみを持つて歸りました。歸つて僕の着物を見て、どしたんや、又けんくわしたんかと言ひました。僕は自てん車につきあたつたんやと、言ひますと、母はうか／＼しとるきんやと言つて、おこりながらたんすからあはせの着物出して、これでも着とれと言ひました。

僕はさぶいけれど、母のいひつけどと思つて、がまんして着ました。

さぶくておる／＼ふるへながら、おちやづけをたべました。

夕立

香川縣木田郡永上校尋六

高重數一

一昨日僕は學校から歸つて眞田を編み始めた。父「今日はいかさま蒸し熱い。夕立でも来るのかい」と言ひながら、ざらり／＼と繩をなつて居る。西の田甫から歸つたお母さんが、不意に大きな聲で「あらまあ、よう立が来よる。西の空に雨足がついた」と言つて居る。その時西家の人が「ごう／＼鳴つて居るのは雨の足かいの」と言つた。耳をすまして聞いて見ると、ごう／＼と物凄く聞える。父は「降つて来よる／＼」と言つて年にも似合ず小躍して喜んで居る。其の時東から、なまぬくい風がすうつと吹いて來た。太陽に焼けた、木の

葉がさら／＼と散つた。かと思ふと、大粒な雨がざざあ／＼針のやうになつて降つて來た。雨にそつて風が吹出した。「早／＼戸を締め」と父が言つたから、座敷へ行つて見ると、雨が吹き込んで疊が赤茶色にぬれて居る。急いで雨戸を締めた。西らの道路を傘を細目に開いて走る人がある。すると北から大きなぼろ自動車、やかましく走つて來た。いなびかりがびか／＼と光ると、雷がからんごろ／＼。此の瞬間に實にいそがしいものであつた。父「今の雷はどこぞ東の方へあまつたらう」と言つた。それから後も小さな音の雷は幾つも鳴つた。しばらくして雨は止み風はないだ。今まで西へ飛び東へ飛びして居た雲も、どこかへ消えて、氣持のよい青空となつ

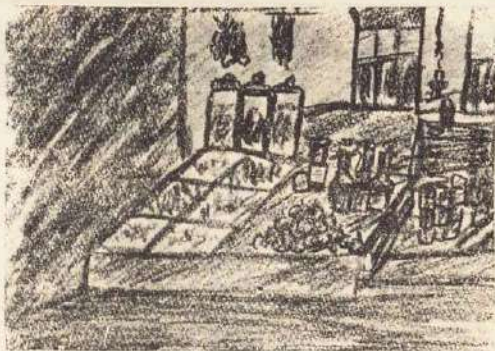
た。太陽はきら／＼輝き始めた。

川ばた

若狭高濱校尋常第六學年女

藤本カヨ

川の水はさら／＼とかすかな音をたて、流れてゐる。もう大分夜が更けたので町の人々は大方ねたらしい。川端に立つて水の流をみつめてゐると、なんだか見さんの事が思ひ出されて仕方がない。ああもういやになつたからねよかと思つたが、だんないも少しの間ここにゐよう」と思つて、川の流れを見つめてゐると、急に後の木ががさ／＼と音をたて、ゆれたので、おやなにかしらと思つて後を見ると、ゆうれいのやうなものが立つてゐるのでひよととび上つてびつくりした。後でよく／＼見



店

秋田縣朝日校高一
岩谷貞三

たら着物がはしてあつたのであつた。まあこれでひと安心と思つて、又川の方を見つめてゐると、川下の方で「ぢやぶ／＼／＼」と

何かあらふ音がする。さてなんであらうと思つて考へてゐると、又「ぢやぶ／＼／＼」といふ音がするので、月の光ですかして見ると、どこかのおばさんが、着物をあらつてをんなさるのであつた。月はます／＼すんで水のやうな光をなげてゐる。

犬猫

朝鮮仁川府崔親校尋五

藤本朝三

「コト／＼」ト音ガスル。ドウモ猫ラシイ。音ノスル方ヘ行ツテ見ルト、猫ガイモヲカジツテキル。

「ゴラ。」トイフト猫ハ

「ニヤオー」ト言ツテ逃ゲテシマツタ。僕ハ猫ヲ追ツカケタケレドナカ／＼ツカマラズ他ノ家ヘ入ツテシマツタ。僕ハ残念ニ思ツテ、

「ニゲラレテハシカタガナイ出テ來タラツカマヘルマデダ。」ト言ヒナガラ目ヲ皿ノ如ク光ラシテアタリヲ見廻シテキル臺所ノ方カラ魚ヲクハヘノソリ／＼ト出テキタ。

「オヤ出テ來タゾ。」僕ハ石ヲ拾

ツテ投ゲタ。猫ハソレトシツテ逃

ゲタ。ト横カラ犬ガトビダシタ。

「ワン／＼。」

「ニヤオー」

「ワン」

トウ／＼猫ハ魚を下シテニゲ

タ。犬ハアトデ魚ヲ見テ「ゴチッ

ウサマ」トイツテ食ベタ。

面日一新大活躍の

□ 四大長篇 □

小鳥は空に……………加藤武雄

出目助さん道中記……………三島霜川

シークフリード
王子物語……………山野虎市

ドイツの古い詩「ニイベルグの歌」に傳へられた王子シークフリードの物語りには、如何に大きな驚きと歎びとなを以て、皆縁から迎へられるでせうか。不可思議な物語りですから、これだけでも讀者に次號を待ち切

本誌新年號豫告

遺品の名曲……………三井信衛

世界的グアイオリンの名手市田四郎の死後、息子達雄の身上に起つた奇々怪々な出来事と不思議な運命をかけた實に面白い物語りです。ありふれた探偵話と違ひ上品で興味ある一大傑作。

童話では、毎號おなじみの沖野岩三郎先生、小島政二郎先生、楠山正雄先生、武井武雄先生をはじめ、諸先生の苦心の作の外に、特に菊池寛先生の名作を掲載いたします。又、童話には野口雨情先生、若山牧水先生が新年號にちなんだ快活な面白い話を書かれ、本誌長世先生の曲譜と共に大評判のことゝ存じます。又、本誌が牛歳の新年號のために特に募集した『牛に關係ある郷土童話』は二百数十篇も集まりました。非常に優れた面白い作があります。これも新年號の呼物の一つです。

アラビヤン
ナイト
冒險雙六

寺内萬治郎案 並畫
(本誌でなくては出来ない、頗る面白い、しかも實に綺麗な、寺内先生大苦心の作。)



信 通

自由畫選評

山 本 鼎

もつと鉛筆畫(濃く鮮明に描いたもの)や、ペン畫や、コンテ畫や、水炭畫や、——つまり單色畫を深山はしと思ひます。

△渡邊敏君の肖像(推薦)——いい鉛筆畫です。形がしつかりして居る。しかしちと筆致の柔のやうなのがいきませんね。とにかく感じはいい。

△山俣一君の「朝」(推薦)——色はまづいいが、テッサンはい。物が圓みをもつて、どつしりと描けて居るのが特色である。

△水野光雄君の「姉さん」調子(濃淡からの觀察)は不十分だが、テッサンに力のあるのがいい。顔から耳、目、鼻、腮までなかなかうまい。頸から着物は駄目。

幼年詩選評

若 山 牧 水

今度ば學校組が優れてゐた。

しかも飛び抜けて佳いといふではないが、みな同じ様に描つてよく出来てゐたので、どれを先にしていゐか、甚だ困つた。止むなく中の二つの學校から二人づつを抜いて四人入賞としておきました。

海邊公子さんの「はいつともうまいものだ。父兄たちは心して餘りに上手にならぬ様に氣をつけてあげて下さい。子供らしさを失つた時は、この人の歌の亡びる時です。

綴方選評

齋藤佐次郎

が出てゐる。これも綴方として結構なことだ。たとへ書き方が下手であつても、その中に立派な感想が出てゐればいい。

△川北た(藤本カヨ)無難な作である。相當によく書けてゐる。

童話の選後に

齋藤佐次郎

△例によつて毎月面白い童話の集つて来るの

『金の星』誌友募集

「金の星」の誌友を募集いたします。誌友にはいろいろの特典と便宜とがありますから、御希望の方は本社宛に規則書をお申込み下さい。今度より三ヶ月分以上の直接購讀者に對しても、誌友のお取扱ひをする事となりました。

は有難い。江口雄一郎さんの「兒童の死」は出色の出来であつた。第一、作に出てゐる氣分が、面白い話だといふのではないが、靜かに物語る作者のその態度から出る多氣に、えいはいれぬ美しさがある。やさしい、美しい作である。

△成田秀二さんの「村の氏神」面白い話である。意味を帯びてゐる處があるが、子供ばかりいふ話に好だ。さういふ意味で歓迎さ

のいふ作である。しかし、教訓が勝ちすぎて童話としての本來の味が乏しくなり勝ちである。最後など、殊にさう感じさせる。

△井上のふなさんの「思ひもの」子供には分つたやうな、分らないやうな感想を抱かせるであらう。怠け者の弟の氣持がわかり兼ねる。思ふであらう。

△小川四郎さんは東京府下の落合小學校の生徒さんです。『狐の話』は面白く讀みました。

△「私の兄さん」(賞)(河西元江作)すなほな、おつとりとした作だ。あたたかい人情がこもつてゐて、いい作だ。でたらめには讀めない、深い感情のこもつた作だ。中でも、兄さんを連れて行くところがいい。奉公してゐる兄さんが一生懸命で難物をしてゐるので、「兄さん」と呼びかけるあたり、最もよくかいてゐます。

△かやの中で(中原ふみ子)細かによく物を見てゐるのに感心する。よしやんがよく書けてゐる。

△「逃げた雀」味の深い作だ。小雀なとりそなつた時の氣持を書いたものだが、たどしき書き方の中に、面白味があつて、氣分がよくわかる。

△行商(法本義夫作)きのさいた上手な作である。この作者などは上手過ぎる危険がある。つしり深く書いて行くことをしたら、いよいよいい作が出来てであらう。

△こんげんさん(海邊公子)公子さんは詩が上手だけに、綴方の上でも草や木や海に注意をひかれて、それを主として書いてゐるのが面白い。そして又、それが本當に美しく、生き生きと書けてゐる。

△すけめ(山岡笑恵)この作などは、決して上手にかいてあるといふのではない。しかし、作の中にいゝ感想

編輯室より

△雑誌社の最もいそがしい季節となりました。今頃こんなことをいふと、妙に聞えますが、全く今が雑誌社の大忙しな日です。もう、新年を迎へる準備をしてゐます。

△新年號は豫告の通り、スバラしく立派なそれば、面白くものを作りますから、どうぞ今から楽しみにしてお待ち下さい。

△新年からは面白い長篇がスラリと並んで皆さんの御愛讀を待つてゐます。加藤武雄先生の名作、三島彌川先生の昔の話、さてはドイツのライン川のほとりに傳へられた有名な傳説「シンクフリード王子物語」など、より本誌獨特の編輯振りを發揮します。

△何にしても、本誌の新年號を御覧下さい。

△先ぞ第一に、毎號のおなじみの諸先生が腕をふるつて、頗るつきの面白いお話を書いて下さる外に、文壇の大家として名の高い菊池寛先生が特に本誌のために、名作を御寄稿下さいます。



讀者だより

▼耳をすませば、暗い床の下で蝶
蜂がキラリキラリ白銀の鈴のふれ
合ふ様な、淋しみを含んだ響を傳
へる秋の夜―只今『金の星』十一
月號を拜見致しました。寺内萬次
郎先生の表紙、岡本露一先生の口
給いづゝながらうれしく頁をくる
毎に面白さうです。諸先生の御苦
心の後がうかがはれます。どうぞ
童話劇號を出して下さい。待つて
あります。終りに金の星並びに愛讀
者皆様の御自愛を祈ります。大阪
府東成郡天王寺村大阪お伽學園
黒田生

ました。それでゐて外の先生方
の童話は一つも読みません。私は
先生のお作が一番好きで今までた
くさんに読みましたので今度此に
二つ三つ作りましたから私の愛讀
誌『金の星』に投書させていただきます。
お話を外れますが『金の星』
は非常に面白い雑誌であります。こ
れもひとへに先生方一同の御力と
思ひ深く感謝いたしてあります。
又私どもの中すことではございませ
んが一つお願ひがございしますが
お聞き下さい。それは『金の星』の
中の紙ですがあの紙をもつと好
い紙にすることはできないものと好
い紙にしたい紙にしたいと思ひます。
みませんでした。では先生何分共
にこのつたない私の作にめんどら
うな見て下さい(京橋區錦木町 福
田榮一)

や何かでゴッソリして居りました
ので、お詫言ひ遅れて了ひました。ど
うぞお許し下さいませ。一昨日、
ちへへへへへ。全く田舎で居
る位静かなところでございませ
ん。童話先生初め、皆様の御健康と金
の星のますますの発展せられるやう
お祈りながら祈つて居ります。(東京
府杉並町 坂井幸子)

せんでした。十月も求めて内容
充實に非常に賛意を表しました。
終りに先生や愛讀者諸兄姉の健康
を祈ります(熊本縣日奈久町 竹
内政一)

▼だん、冬の日も近づいて來ま
した。記者諸先生及金の星のお
友達の御康を祈り申し上げます。記
者様、私は『ホシローヒルム』に當
選した一人です。どうも有難う
ございませ。私はうれしくなり
ませ。今度も、私のベストを盡
した作を投書して、諸先生の御批
評を仰ぎたいと思つて居ります。
『金の星』十一月號は、當選の御報
知と一緒にいたゞきました。先づ
は御禮まで。さよなら(秋田市保
戸野 木村孝)

の『童話十講』は未だ發賣されませ
んが、先生の第一童話集はやはり
金の星社で發賣して居りますか、
右御答へ下さい。朝鮮 片貝生
▼『童話十講』は昨年三月に本社か
ら出版されましたが、震災のため
原稿が焼失して仕舞ひ未だ再版の

したが、入選したと云ふ報にせつ
して家内一同大變喜んでをりま
す。これに元氣づいて、私もどし
どし作品を出して益々金の星の發
展を圖り、僕の作品でうづめたい
と思ひます。簡單ながら、おれい
まで(大阪市西區九條中通 白井

さくさいたかば色のさくのにほひ
は、にがいなあ。などは感心しま
す。私から賞品を上げたいと思
ひます。海邊さんおたより下さい。
(高崎市元給屋町 佐竹金次郎)

▼一月か、投書しはじけた私は、
三ヶ月ついでに童話が出たのは未
だ始めてなのでございませ。う
れしくなりました。父さ
んも喜んでくれました。そして
御褒美に『青い目の人形』を買
つてくれました。毎日、讀ん
でゐります。野口先生、一度是非
へ京都へいらして下さい。待つ
てゐますから。京都 岡本
しな子)

▼記者様は誌友に入れて下さい
まして有難う御座います。御送り
下さいました十月號を見て大變う
れしく感じました。それから大連
の大出静子さんの綴方、やぶれた
くつ下、ほんとうに其の時のあな
たに同情します。私の様に田舎で
語る友がなく暮す者に誌友の皆
さん達がなつかしく思ひます。京
都の三須英三様あなたの住所を誌
上で知らして下さいませんか。記
者様を始め愛讀者の人々どうぞ御
自愛下さい。和歌山縣 瀧口常
▼雨情先生御署名名入(青い目の人
形)を早速御送り下さいまして有
難度々御座いました。虹兒先生の
目も覺るばかりのうす桃色の装
幀、寺内先生の人形の口輪、見るも
のに清新な感じを與へて呉れます
雨情先生の沙の敷、阿彌陀池、お
乳給、くたびれこま、上野のお山
等懐かしく、拜見致しました。
名古屋市中區東陽町 島本天二)

▼金の星記者諸先生には御禮りも
御座、まぜんか。大陸の氣候な朝
鮮のばてに秋が参りました。野
口雨情先生の御高作(へばれ鳥)
(高野山)等の拜見が出来ましたこ
となるこびます。野口先生御著

運びに至りません。野口先生の第
一章諸集も矢張り震災で同様の狀
態にあります(記者)
▼記者先生、有がとう御座います。
私のホシローヒルムが、あれまで
立派に入選し様とは思ひませんで

▼先日お手紙下さった方に、お禮
申上ます。十月號では海邊公子さ
んの幼年時におどきました。全
く天才です。實感のはつきり出て
居るのは全くおどきました。小
(野村)

▼大好きな『小鳥』が眠つてゐて
淋しいのです。早く眠を覺まして
下さい。御頼み致します私は金の
星が新聞雑誌の廣告欄に出ない
事を喜んでゐます。童話童話を御
熱心に研究なされる御方方様、ど
うぞ文通して下さい(山梨縣中
巨摩郡明穂村小笠原 金丸正則)

▼童話誌と云ふことを發行してゐ
ます。是非諸兄姉見て戴きたいも
のです。御申込次第、至急一部郵
送します。台北市榮町二ノ廿六
(野村)



懸賞創作募集

〔意 注〕 童 童 〔意 注〕 綴 幼 自

◆ 少年少女の創作 ◆

自由詩……山 本 鼎 先生選
年 詩……若 山 牧 水 先生選
方……編 輯 部 選

課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君の好きなものを、諸君の好きなやうに書なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由書はなるべく書用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙（または牛紙）に書いてください。よく出来た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號（切は十一月廿八日）の以後は次號（廻る）發表は新年號、宛名は東京市外田端三百五十一番地の星社。

◆ 一般讀者の創作 ◆

話……野 口 雨 情 先生選
話……齋 藤 佐 次 郎 先生選

童謡は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は、『推薦』または『特選』として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして、『入選』の場合は、『金の星』賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊金四拾錢 送料壹錢
三ヶ月分三冊（送料共）壹圓四拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四拾錢
一年分十二冊（送料共）四圓八十錢

但し新年號は特別號で五十錢ですが、御註文の際は、この分だけ必ず加へてお拂込み下さい。

振替口座東京五九五六六番

〔意 注〕 金 送 〕

▽御註文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（差金切手）一割増しです
▽第何巻第何號よりと書いてください
▽住所姓名は必ず書き添えてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十三年十一月九日印刷納本（毎月一回）
大正十三年十一月一日發行（一日發行）

編輯兼發行人 齋 藤 佐 次 郎
印刷所 東京市小石川久野町八百八番地
印刷人 上 村 新 輔
發行所 東京市小石川久野町八百八番地
株式會社 博文館印刷所
東京市外田端三百五十一番地
振替口座東京五九五六六番
電話小石川五三八七番

本日童謡創作界の金星童謡曲譜集

第八輯	小松耕輔作曲・達崎 龍作謠 べ ん べ ん 鳥	(目曲)	小鳥車、紅發蜻蛉、さみだれ
第七輯	本居長世作曲・野口雨情作謠 お 人 形 さ ん の 夢	(目曲)	お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雄子、藪の小道、夢を見る人形、草遊び
第六輯	本居長世作曲・野口雨情作謠 子 守 唄	(目曲)	子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、霜柱、蕨坊主、蕨の下道
第五輯	小松耕輔作曲・野口雨情作謠 夢 と り	(目曲)	夢とり、おしやれ梅、つば子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織り
第四輯	本居長世作曲・野口雨情作謠 赤 い 靴	(目曲)	赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、朝鮮館屋、眠り龜の子
第三輯	本居長世作曲・野口雨情作謠 青 い 空	(目曲)	青い空、燕、雨夜の傘、でんく蟲、雀の酒盛り、呼子鳥
第二輯	本居長世作曲・野口雨情作謠 一 つ お 星 さ ん	(目曲)	一つお星さん、七つの子、鰯と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬
第一輯	本居長世作曲・野口雨情作謠 人 買 船	(目曲)	人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん

東京市外田端三百五十一番地 星社の金 振替口座東京五九五六六番 電話小石川五三八七番

東京市外田端三百五十一番地 星社の金 振替口座東京五九五六六番 電話小石川五三八七番

東京市外田端三百五十一番地 星社の金 振替口座東京五九五六六番 電話小石川五三八七番

金の星社 世界少年少女著名大系 編四

四判入箱美本・定價各冊金十九錢・送料金五十錢

金の星社の名著大系は少年少女の爲めに書かれた世界的名著を、最も面白く、又最も解りやすく、しかも、クロース製本箱入りの非常に立派な本を、他に例のない安い定価で發賣するので、熱烈な歡迎を受け、増版又増版の有様です。皆さまの愛讀書として是非お揃へ下さい。

第一編 ロビンソン漂流記

船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中で難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸るまでの長い物語りです。これ程澤山讀まれた本はない。この本を讀まない者は、一生の不幸です。

第二編 ナポレオン物語

ナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年がナポルトが、ナポレオン大帝と稱せられ、歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の孤島セント・ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化極まりない物語です。

第三編 ドン・キホーテ

イスパニヤの有名な物語。毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、馬に乗つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ痛快な物語りです。

第四編 コロンブス物語

アメリカ大陸を發見した大偉人コロンブスの物語りです。コロンブスがあらゆる困難と戦つて、遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極まりない運命を書いた血と涙の物語りです。この偉人の傳記を書いた本は餘りないので、非常にめづらしい本です。

金の星社 世界少年少女著名大系 編四

四判入箱美本・定價各冊金十九錢・送料金五十錢

第五編 大人國小人國めぐり
カリバアー旅行記

カリバアーが、難船して小人國に漂流して、奇想天外の滑稽をやり、再び航海に出て大人國に漂流し、そこでさん／＼な目にあひ、漸く覺にさらはれて、本國に歸つて来るまで實に面白い物語りです。

第六編 ロビンフッド物語

英國に傳へられた有名な物語りです。もとは伯爵であつたロビンフッドが悪い男のために國を棄れて、遂に義賊となつて、シャーウッドの森にかくれ、王を救ふ戦を起したり、悪い僧正をやつつけたり、そして最後に毒殺されるまでの變化、多い物語りです。

第七編 アラビヤンナイト

アラビヤン・ナイト程面白い物語りは、世界の童話文學を通じてないといはれてゐます。千年餘の間も語り傳へられた物語りである事を考へても、如何にこの物語りが讀者に興味を興へてゐるかばかりです。アラビヤン・ナイトの中でも、特に面白いのばかりが集つてゐます。

第八編 ギリシヤ神話
オデッセル物語

ギリシヤの詩聖ホメーロの作であつて、世界中で一番古い、そして又一番面白い物語りです。トロイの戦争に遙々海を越えて出征した勇士オデッセルが神の怒にふれ、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食となつて本國に歸る迄の物語りです。

第九編 シエークスピア物語

有名なシエークスピアの芝居の中で、面白いものばかりを選んで、物語り風に書いたものです。『テンペスト』『御意のま』『エニスの商人』『みく／＼女刺し』『眞夏の夜の夢』『冬の夜ばなし』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

K2A-28

僕の大好きな

ライオン常用日記が出たから

早速買ってきました。

まあ、

なんて美しい

氣持の好い本だらう。

内容が面白くて、

爲めになつて、

新しい知識が澤山に入つてゐます。



ライオン常用日記第十二号 昭和十三年十一月十日 定價金四十銭 送料「五銭」